

第二十二條 戰闘及ヒ公務ノ爲メ傷痍ヲ受クルト雖モ其傷痍ニ原因セサル他病ニテ死
歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十三條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第
二十一條第一項ヲ適用ス

第二十四條 寡婦ハ陸軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以
前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生レタル兒子アレハ嫁時年月ノ
查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痍疾病ニ原因シテ死レタル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關
セメ負傷又ハ發病前ニ婚配セル者ニ限ル

第二十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受クルノ權消絶ス

第二十六條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受クルノ權消絶スル時ハ當該
軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ
男女ニ拘ハラヌ家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ
扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死レタル時孤兒ノ母在ラサル
者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十七條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順
次年少者ニ及フ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ或ハ

男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十八條 扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラルハ時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ
受ク可キ者ニ之ヲ給ス

第二十九條 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受クル寡婦再嫁
若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ
之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ終身給
スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死歿若クハ權利消絶
スルコトアレハ轉シ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ依リ
テ之ヲ轉給ス可シ

但父及ヒ祖父ハ年齢五十歳以上其未滿ハ癡疾又ハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサ
ル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ且孰レモ軍人死歿ノ際年齢五十歳以上ニシテ其
戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其後
見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ奥印セル願書ヲ以テ之
ヲ地方廳ニ呈ス可シ

其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ者ハ見証證書若クハ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷疾疾病ニ基ク者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷證書ヲ證據ニ供ス可シ

但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ證明ス可シ

第四章 服役年算則

第三十一條 服役年ノ始期及ヒ終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ總テ同月ヲ以テ始トス
- 二 但明治四年八月以前ヨリ勤仕シタル者ハ明治四年七月ノ現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ス
- 三 際別ニ一時賜金トシテ給與ス
- 四 下士以上ハ其初任當日ヨリ起算ス
- 五 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算ス
- 六 壯兵其他諸種ノ方法ヲ以テ軍籍ニ入りタル者ハ其就役ノ當日ヨリ起算ス
- 七 上長官士官准士官ハ退職恩給ノ願書該長官ヨリ陸軍卿ニ呈スル進達書ノ日ヲ以テ

六 下士卒ハ免官免役ノ日ヲ以テ終期トス

第三十二條 十七歳未滿ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セス

士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時間ハ之ヲ除算ス

第三十三條 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナル者ハ海軍服務ノ年月ヲ通算ス又文官轉シテ陸軍軍人トナリタル者并ニ陸軍軍人ノ現役ニ在ラスシテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受ケル者恩給ヲ受ケルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉仕中ノ年月ハ十六箇月ヲ以テ一年トシ之ヲ通算ス

第三十四條 豫備後備ニ在ルノ月日ハ服役實期ニ算セスト雖モ復習ノ外現役ニ徵集スルコトアル時ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十五條 退職免役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其歸營以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時虜獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ尙ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第一類 行政法 陸軍恩給令

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十一年未滿ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セス

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰地ニ於テ服役スル時ハ二箇年ヲ増加ス
- 二 出征軍ニ編入セラレ或ハ合圍若クハ臨戰地境內ニ於テ服役セシ時又戰時平時ヲ論セス日本國外ノ地ニ於テ鎮戍ノ軍隊ニ在リシ時及ヒ海戰ニ當リ其船中ニ在リシ時ハ一箇年ヲ増加ス
- 三 海戰ニ當リ海岸防禦ニ從事セシ時ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスシテ一時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ陸軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルコトヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ跨リ十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ檢閱監軍部長ヲ經テ陸軍卿ニ呈シ陸軍卿之ヲ太政官ニ上申ス(十七年六月第六十號達ヲ以テ圖點ノ九字刪除)

寡婦(孤兒)扶助料ノ願書ハ居住地地方廳ヨリ内務卿ニ呈シ内務卿之ヲ陸軍卿ニ移シ陸軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ内務大臣陸軍卿ニ下シ内務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓受領ノ證ト爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付スルノ前ニ於テ陸軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ免除恩給并ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル

- 一 准士官以上ハ計算書日附ノ翌日
- 二 下士卒ハ免官免役ノ翌日
- 三 寡婦(孤兒)扶助料ハ當該軍人死去ノ翌日

第四十六條 恩給及ヒ扶助料ハ一月四月七月十月ニ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ證セシ本人生存書及ヒ金額受領證書ト引替ニ其金額ヲ交付ス

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ期日ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ

交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ内務省ニ出シ内務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省陸軍省ニ報告ス但扶助料移轉ス可キ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メス更ニ扶助料請願ノ証ト爲サシ

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ失亡スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ内務卿ヨリ証明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戰闘或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受テ服役ニ堪ヘス免官除隊スト雖モ第十九條末項ヨリ輕傷ニシテ免除恩給ヲ受テサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受テ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニアラスシテ傷痍疾病ヲ受テ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨グルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ

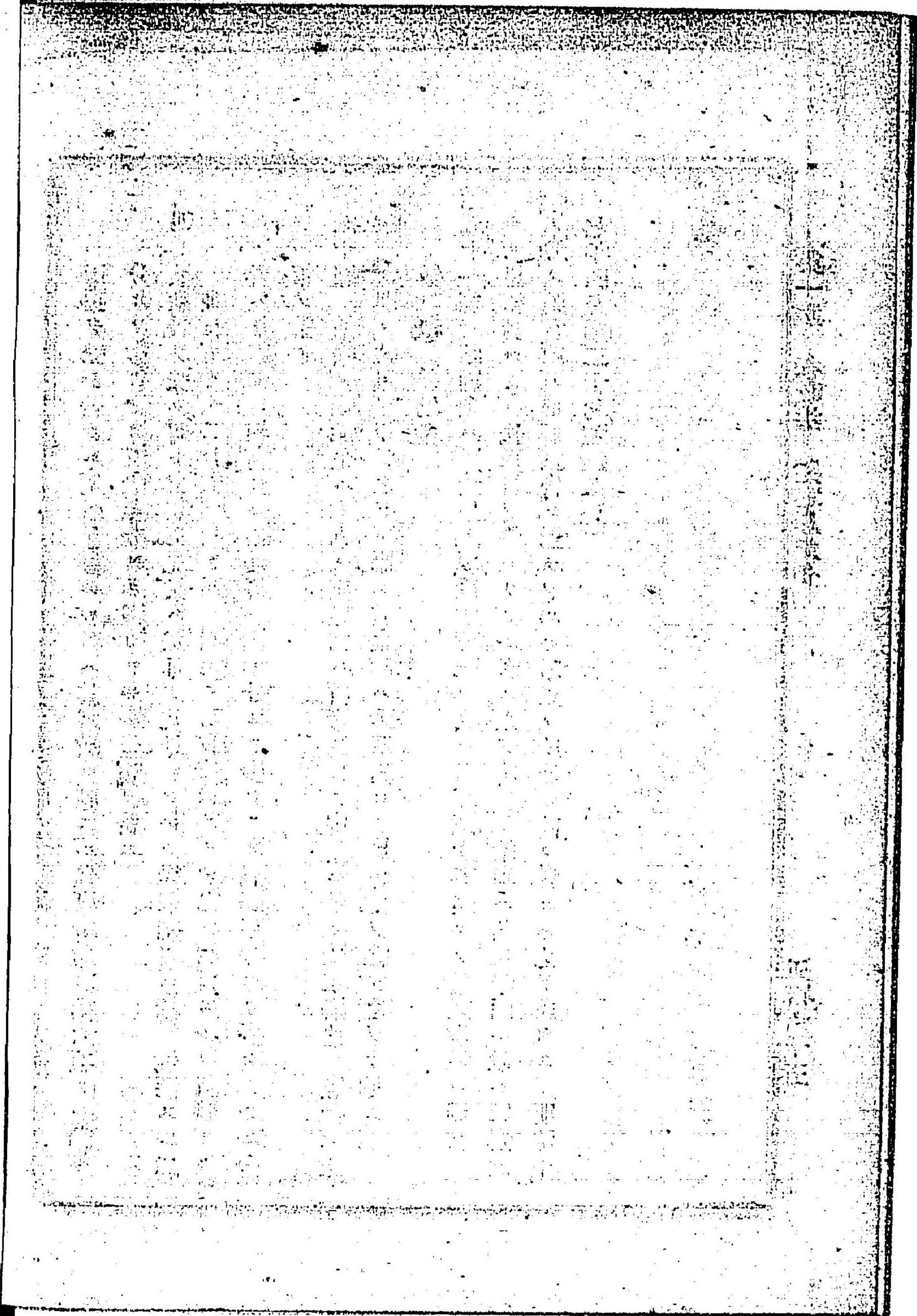
切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

四 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活スル二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルノ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ請願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ陸軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ之ヲ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ又ハ五年以上勤續キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給若シクハ扶助料ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其給額ハ已號表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルモ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス(明治十七年四月第三十七號達改正)



甲號

退職恩給表

年數	官等	一	二	三	四	五	六	七	八	九
十一年	年	千五百	千二百	千五百	七百五十	六百	四百五十	三百	二百二十五	二百
十二年	年	千五百二十五	千二百二十五	千五百二十五	七百七十五	六百二十五	四百七十五	三百二十五	二百三十五	二百二十五
十三年	年	千五百五十	千二百五十	千五百五十	七百七十五	六百二十五	四百七十五	三百二十五	二百三十五	二百二十五
十四年	年	千五百七十五	千二百七十五	千五百七十五	七百七十五	六百二十五	四百七十五	三百二十五	二百三十五	二百二十五
十五年	年	千六百	千二百八十	千五百八十	七百八十五	六百三十五	四百八十五	三百三十五	二百四十五	二百
十六年	年	千六百二十五	千三百	千五百三十五	八百二十五	六百五十五	四百九十五	三百四十五	二百五十五	二百
十七年	年	千六百五十	千三百二十	千五百六十	八百二十五	六百五十五	四百九十五	三百四十五	二百五十五	二百
十八年	年	千六百七十五	千三百四十	千五百八十	八百三十五	六百七十五	五百一十五	三百六十五	二百六十五	二百
十九年	年	千七百	千三百六十	千六百	八百三十五	六百七十五	五百一十五	三百六十五	二百六十五	二百
二十年	年	千七百二十五	千三百八十	千六百二十五	八百六十五	六百九十五	五百三十五	三百八十五	二百七十五	二百
廿一年	年	千七百五十	千四百	千六百七十五	八百七十五	七百	五百四十五	三百九十五	二百八十五	二百
廿二年	年	千七百七十五	千四百二十	千六百七十五	八百八十五	七百一十	五百五十五	四百	二百九十五	二百
廿三年	年	千八百	千四百四十	千六百七十五	八百八十五	七百一十	五百五十五	四百	二百九十五	二百
廿四年	年	千八百二十五	千四百六十	千六百七十五	八百九十五	七百二十	五百六十五	四百一十	三百	二百
廿五年	年	千八百五十	千四百八十	千六百七十五	九百	七百三十	五百七十	四百一十	三百一十	二百
廿六年	年	千八百七十五	千五百	千六百七十五	九百二十五	七百四十	五百八十	四百二十	三百二十	二百
廿七年	年	千九百	千五百二十	千六百七十五	九百二十五	七百四十	五百八十	四百二十	三百二十	二百
廿八年	年	千九百二十五	千五百四十	千六百七十五	九百七十五	七百六十	五百九十	四百三十	三百三十	二百
廿九年	年	千九百五十	千五百六十	千六百七十五	九百七十五	七百六十	五百九十	四百三十	三百三十	二百
三十年	年	千九百七十五	千五百八十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅一年	年	二千	千六百	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅二年	年	二千二十五	千六百二十五	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅三年	年	二千五十	千六百五十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅四年	年	二千七十五	千六百七十五	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅五年	年	二千	千六百八十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅六年	年	二千二十五	千七百	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅七年	年	二千五十	千七百二十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅八年	年	二千七十五	千七百四十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
卅九年	年	二千	千七百六十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百
四十年	年	二千二十五	千七百八十	千六百七十五	九百七十五	七百八十	六百	四百四十	三百四十	二百

○第五款 海軍恩給令 明治十六年九月
第三十八號達

海軍恩給令別冊ノ通相定候條此旨相達候事

但從前ノ海軍退隱令ハ廢止ス

海軍恩給令

海軍恩給令目錄

- 第一章 總 則
- 第二章 恩給及ヒ增加
- 第三章 寡婦(孤兒)扶助料
- 第四章 服役年算則
- 第五章 從軍年算則
- 第六章 恩給支給順序
- 第七章 賑恤金
- 第八章 給助金

海軍恩給令

第一章 總 則

第一類 行政法 海軍恩給令

第一條 海軍恩給ハ海軍諸種ノ勤勞ニ依リテ之ヲ給スル者ナリ其種類別テ左ノ五項トス

一 退職恩給

二 退役恩給

三 寡婦(孤兒)扶助料

四 賑恤金

五 給助金

第二條 退職恩給退役恩給寡婦扶助料ハ本人ノ終身孤兒扶助料ハ男女共ニ二十歳ニ至ル迄之ヲ給シ賑恤金給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第三條 軍人ハ年限ノ年齢ニ達スレハ退職退役シテ恩給ヲ受クルヲ例トス其定限左ノ如ク

軍醫大監 主計大監

六十五

機關大監 機關中監 軍醫中監 軍醫少監

六十

主計中監 主計少監

大佐 中佐 機關少監 大軍醫 中軍醫 大主計

中主計 兵曹上長 木工上長 機關工上長

兵曹長 木工長 機關工長 樂長

(明治十七年第七十六號ヲ以テ本項中改正)

五十五

少佐 大機關士 中機關士 少軍醫 少主計 下士

五十

大尉 中尉 少機關士 卒

四十五

少尉 軍醫補 主計補

四十

少尉補 機關士補

三十

第四條 軍人年限ノ年齢ニ達スト雖モ前途尙ホ任用ニ堪ヘ若クハ材能特拔又ハ老練者ヲ要スル職務ニ在ル者ハ尙ホ留任ヲ命スルコトアル可シ但強テ現役ヲ辭スル者ハ此限コトアルス

第五條 軍人未ダ年限ノ年齢ニ達セスト雖モ服役實期十一年以上ノ者ニシテ服役ニ堪

ハサルヲ認メタル時ハ海軍卿旨ヲ諭シテ現役ヲ退キ恩給ヲ願ハシムルコトアル可シ

第六條 恩給ハ公權剝奪ノ時ハ全ク之ヲ止メ左ノ各項ニ該ル時ハ其時間ノミ之ヲ停ム

一 公權停止ノ時

二 事故アリテ日本人タルノ分限ヲ失フ時

三 政府ノ許可ナクシテ日本國外ニ出タル時

第七條 恩給ヲ受ケタル者再ヒ現役ニ就キ若クハ文官ニ任シ俸給ヲ受クル時ハ其間該

恩給ヲ停ム但其負傷増加恩給ハ仍ホ之ヲ給ス

第八條 寡婦若クハ孤兒扶助料ハ當該軍人死歿ノ日(戰地等ニテ死歿ノ者ハ海軍官憲

ヨリ報告ノ日ヨリ一箇年間願出サル時ハ其權利消絶ス」恩給及ヒ扶助料ハ一箇年以
上其金額ノ受領ヲ怠リタル時ハ其怠リタル間ノ金額ハ之ヲ給セス
第九條 恩給及扶助料ノ金額計算ニ就キ違算アリト思惟スル時ハ初メテ金圓ヲ受領セ
シ日ヨリ三箇月以内ニ管轄地方廳ヲ經テ海軍卿ニ上申ス可シ若シ此期限ヲ過クル時
ハ之ヲ受理セス

第二章 恩給及ヒ増加

第十條 退職恩給ハ准士官以上服役實期十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ又ハ傷痕ヲ
受ケ若クハ疾病ニ罹リ査問會議ノ處決若クハ海軍卿ノ諭旨ニ依リ退職スル者ニ之ヲ給ス
戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メニ傷痕若クハ疾病ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失
ヒ或ハ之ヲ失フニ等シト認ムル者又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰
時ニ於テ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ非常ノ勞動及ヒ困苦
ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ健康ヲ妨害シ全ク職務ニ堪ヘサルニ至リ其證據明亮ニシ
テ退職スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス
其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト甲號表面ノ如シ但十
一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ其十一年ニ等シキ額ニ依ル
第十一條 退職恩給ハ下士退役恩給ハ卒服役實期十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ

十七年第七
十六號達ヲ
以テ本項次
項中附添ノ
分追加

或ハ服役滿期トナリ或ハ傷痕若クハ疾病ノ爲メ退職若クハ退役スル者ニ之ヲ給ス
前條第二項ニ掲クルカ如キ傷痕疾病ヲ受ケ永久健康ヲ妨害シ全ク兵役ニ堪ヘス其證
據明亮ニシテ退職若クハ退役スル者ハ服役實期十一年未滿ト雖モ亦之ヲ給ス
其退職恩給ノ額ハ十一年ヨリ三十九年ニ至リ年々差等アルコト乙號表面ノ如シ
但十一年未滿ノ者ニ給ス可キ恩給ハ十一年ニ等シキ額ニ依ル
第十二條 軍人傷痕ヲ受ケルト雖モ尙ホ奉職セシメ後日退職若クハ退役スル者ハ現官
等ニ依リ恩給ヲ給ス但負傷増加恩給ハ負傷當時ノ官等ニ依リ之ヲ給ス
第十三條 下士以上ノ恩給願書ハ所管長官ヲ經テ海軍卿ヘ卒ハ所管長官ヘ其履歷書ヲ
副呈ス可シ
第十四條 傷痕疾病ニ起因シ恩給ヲ願出ル者ハ其原因症候等詳細之ヲ開陳ス可シ
第十五條 傷痕疾病ヲ受ケシ事故及ヒ其原因ハ見證々書又ハ公文若クハ査問會議口供
書ノ寫ヲ以テ之ヲ証明ス可シ
第十六條 傷痕疾病不治ノ狀ハ海軍病院長並ニ（主任醫官地方病院ニ於テ治療ヲ受ケ
シ者ハ其院長並ニ主任醫師）ノ診斷證書ヲ以テ之ヲ證ス可シ
其診斷證書ハ傷痕疾病ノ原因症候及ヒ其治療方法ヲ述ヘ以テ不治ノ狀ヲ詳悉ス可シ
病院ニ就キ治療ヲ受ケサル者ト雖モ海軍病院長若クハ地方病院長ノ診斷證書ヲ要ス

第十七條 傷疾疾病不治ノ狀ハ軍醫若クハ地方醫師ノ証書ニ依ルト雖モ其軍務ニ堪ヘサルヤ否ヤハ當該ノ所管ニ於テ検査判定シ之ヲ海軍卿ニ呈スヘシ海軍卿ハ臨時調査委員ヲ撰定シ更ニ覆覈セシメ以テ之ヲ決定ス

第十八條 下士以上恩給ヲ願フ時ハ所管長官其海軍卿ニ呈スル進達書ノ日ニ於テ直ニ休暇ヲ命シ卒恩給ヲ願フ時亦所管長官同上ノ日ニ於テ直ニ免役ス可シ

第十九條 凡恩給ハ軍人ノ現官階ニ依リ之ヲ給ス但其官階ニ進ミ未ク滿十八箇月ニ至ラスシテ退職若クハ退役ヲ願フ時ハ前官ニ准シテ之ヲ給ス其戰闘又ハ公務ノ爲メ傷疾ヲ受テ或ハ戰地若クハ航海中ニ於テ受ケタル疾病ノ爲メ恩給ヲ給スルハ此限ニアラス

第二十條 戰闘及ヒ戰時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷疾ヲ受テ左ノ各項ニ該ル者ハ恩給ノ外更ニ丙號表面ノ金額ヲ加給ス但公務ノ爲メ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナル者モ亦本條ニ準ス

- 一 兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者
- 二 前項ニ等シキ傷疾ヲ受ケシ者
- 三 一肢ヲ亡シ或ハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル者
- 四 前項ニ等シキ傷疾ヲ受ケシ者

五 全ク一肢ノ用ヲ失フ者

六 前項ニ等シキ傷疾ヲ受ケシ者
第二十一條 傷疾疾病ニ依リテ恩給ヲ受ケ引續キ重症ニ趨キ或ハ現役ヲ離レシ後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ願出ル時ハ検査ノ上事實相違ナキニ於テハ更ニ恩給ヲ給シ或ハ負傷増加恩給ヲ給ス可シ但更ニ恩給ヲ願フハ現役ヲ離ルハ際其傷疾ノ爲メ服役シ難キ確定ヲ得タル者ニ限ル

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ或ハ二肢ノ用ヲ失フニ等シキ者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ二箇年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ或ハ兩眼ヲ盲シ或ハ二肢ヲ亡スル者ハ現役ヲ離レシ日ヨリ三箇年

第三章 寡婦(孤兒)扶助料

第二十二條 寡婦扶助料ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス其給額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ緣故トニ依リテ差アリ

- 一 戰闘或ハ公務ノ爲メ死歿シ或ハ之ニ依リテ受ケタル傷疾ニ原因シテ死歿シ又ハ戰地ニ於テ流行病ニ罹リ或ハ航海中若クハ戰地ニ於テ非常ノ勞動及ヒ困苦ノ勤務ニ服シ爲メニ健康ヲ害セラレ發病終ニ死歿シ又ハ平時當務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染死歿シタル軍人ノ寡婦

第一類 行政法 海軍恩給令

二 退職若クハ退役恩給ヲ受ケタル後或ハ之ヲ受ケ可キ權ヲ有シテ死歿シタル軍人ノ寡婦

其扶助料第一項ニ該ル者ハ丁號表面ニ依リ第二項ニ該ル者ハ戊號表面ニ依ル

第二十三條 戰闘若クハ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケルト雖モ其傷痍ニ原因セサル他病ニテ死歿シタル軍人ノ寡婦ハ扶助料ヲ給セス

第二十四條 戰闘中踪跡ヲ失フ者其死亡公務ニ原因セシニ相違ナキヲ確認スル時ハ第二十二條第一項ヲ適用ス

第二十五條 寡婦ハ海軍簿籍ニ登記セシ者ニシテ其夫ノ現役ヲ去ルノ時ヨリ一箇年以前ニ嫁シタル者ニ限ル可シ但前妻若クハ現時ノ妻ニ生シタル兒子アレハ嫁時年月ノ查覈ヲ要セス又戰死或ハ傷痍疾病ニ原因シテ死タル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ年月ニ關セ

ス負傷又ハ發病前ニ婚配セシ者ニ限ル

第二十六條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スル時ハ扶助料ヲ受ケルノ權消絶ス

第二十七條 寡婦死去シ或ハ前條ノ事故アリテ扶助料ヲ受ケルノ權消絶スル時ハ當該軍人ノ孤兒(嫡子庶子養子ヲ論セス)戸籍ニ登記セシ者但養子ハ死傷前ノ養子ニシテ

男女ニ拘ハラヌ家名ヲ繼襲スル者ニ限ル)ニシテ其家名繼襲ノ者ニハ寡婦ト等シキ扶助料其他ノ者ニハ其額三分ノ二ヲ給ス又當該軍人ノ死シタル時孤兒ノ母在ラサル

者ハ直ニ其孤兒ニ給ス

第二十八條 孤兒扶助料ハ數子アル時ハ其年長ナル者ニ給シ權利消絶ノ期ニ至レハ順次年少ナル者ニ及ブ但二十歳未滿ト雖モ官署ニ奉職シ俸給ヲ受ケ或ハ其戸籍ヲ去リ

或ハ男女共ニ嫁娶シタル時ハ其權消絶ス

第二十九條 扶助料ヲ受ケル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、時ハ之ヲ止メ更ニ其轉給ヲ受ケ可キ者ニ之ヲ給ス

第三十條 軍人死没シ扶助料ヲ受ケ可キ寡婦孤兒ナク又ハ扶助料ヲ受ケル寡婦再嫁若クハ復籍シテ孤兒ナク尙ホ從來死者ニ依リテ生活セル父母又ハ祖父母アリテ他ニ之ヲ奉養スルノ子孫ナキ時ハ其情狀ニ依リ終身寡婦ニ相當セル扶助料三分ノ二ヲ給スルコトアル可シ

其扶助料ハ父母祖父母共ニ存在スル時ハ先ツ之ヲ父ニ給シ其父死没若クハ權利消絶スルコトアレハ轉シテ之ヲ母ニ給ス以下其母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ順次此例ニ

依リ之ヲ轉給ス可シ但父及ヒ祖父ハ年滿五十歳以上其未滿ハ癱疾及ヒ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者又母及ヒ祖母ハ夫ナキ者ニシテ其孰レモ軍人死没ノ際年齢

五十歳以上ニシテ其戸籍ニ在ル者ニ限ル

第三十一條 扶助料ヲ仰カントスル時ハ本人主名ヲ以テ親族二名及ヒ後見人アレハ其

後見人若シ親族ナキ時ハ同郷ノ戸主二名連署シ其郡區長戸長ノ與印セン願書ヲ以テ地方廳ヘ進達ス可シ但恩給登錄寫帖アレハ之ヲ添附ス可シ
其夫若クハ父戰死其他公務ノ爲メ直ニ死亡セシ時ハ死亡報告若クハ死亡證書若クハ他ノ公文ノ内其一ヲ證據ニ供シ其傷痕疾病ニ起因スル者ハ該書類ノ外尙ホ軍醫若クハ地方醫師ノ診斷書ヲ證據ニ供ス可シ但地方醫師ノ診斷ヲ受ケタル時ハ尙ホ地方官吏ノ檢視證書ヲ添附シ死歿ノ原因ヲ詳細證明ス可シ海軍卿ハ之ヲ調査委員ニ下シ其事實ヲ調査セシメ以テ決定ス

第四章 服役年算則

第三十二條 服役年ノ始期及終期ノ例ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 准士官以上ニテ三上長三長及ヒ樂長ヲ除クノ外ハ初任ノ日三上長三長及ヒ樂長以下ハ四等卒及ヒ樂生タルノ日ヲ以テ服役年ノ始期トス
(明治十七年第七十六號ヲ以テ本項中改正)
 但准士官以上ハ明治四年八月以前下士以下ハ明治二年五月以前准卒ハ海軍定員ニ准セサル以前ハ服役年ニ算入セズ然レモ其以前ヨリ勤仕シタル者ハ其算入期ノ前月ニ於ケル現官等ニ對スル俸給ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スルノ金額ヲ以テ恩給支給ノ際別ニ一時賜金トシテ給與ス
- 二 下士以上ハ退職年恩給ノ願書ヲ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈スル進達書ノ日卒ハ退

第三十三條 十七歳未満ハ恩給服役年ノ計算ニ算入セズ

士官以上待命及ヒ非職中ノ月日ハ服役實期ニ算入ス但非職中地方病院學校及ヒ其他ノ事業ニ從事シ其給料ヲ受ケ非職俸ヲ給セサル時限ハ之ヲ除算ス

第三十四條 陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナル者ハ陸軍服役ノ年數ヲ通算ス又文官轉シテ海軍軍人トナル者並ニ海軍軍人ノ現役ニ在ラスニテ文官ヲ兼任シ文官ノ俸給ヲ受ル者恩給ヲ受クルノ期ニ至ル迄ハ其文官奉任中ノ年月ハ十六月ヲ以テ二年トシ之ヲ通算ス

第三十五條 退職若クハ退役ノ後再ヒ現役ニ就ク者ハ前後ノ現役ヲ通算ス

第三十六條 逃亡ノ者其逃亡以前ノ現役ハ其復歸以後ノ現役ニ通算ス

第三十七條 處刑中ノ日數ハ現役年數中ヨリ除算ス

第三十八條 戰時處獲ニ遭ヒ俘囚トナリタル月日ハ猶ホ平時現役ニ在ルト同シク之ヲ算ス

第五章 從軍年算則

第三十九條 從軍年ハ服役實期外ノ年月ト爲ン之ヲ其服役年數ニ加算スル者トス但其服役實期十年未満ニシテ退身スル者ニハ之ヲ加算セズ

第四十條 從軍年加算ノ法ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 日本國外ノ戰役ニ從事中ハ二箇年ヲ増加ス
- 二 出征艦隊ニ編入中及ヒ各國若クハ陸戰地境內ニ服役中ハ一箇年ヲ増加ス
- 三 戰時平時ヲ論セス外國航海中ハ半箇年ヲ増加ス

第四十一條 出征軍ノ定メニアラスニ時出兵ノ時ト雖モ出征軍ト視做ス可キ場合ニ於テハ海軍卿上請シテ從軍年ニ算入スルヲ決定ス

第四十二條 從軍年ヲ算スルノ法ハ十二箇月間數回ノ戰役ニ從フト雖モ重複シテ之ヲ算セズ但其一年以上ニ跨ル十二箇月ニ餘ル所ノ分數ハ前條ニ依リテ之ヲ計算ス

第六章 恩給支給順序

第四十三條 恩給ノ願書ハ所管長官ヨリ海軍卿ニ呈シ海軍卿之ヲ太政官ニ上申ス 寡婦若クハ孤兒扶助料ノ願書ハ居住ノ地方廳ヨリ內務卿ニ呈シ內務卿之ヲ海軍卿ニ移シ海軍卿ヨリ太政官ニ上申ス

第四十四條 太政官ニ於テハ之ヲ審査シタル後恩給許可令及ヒ恩給登錄寫帖ヲ內務大臣海軍卿ニ下シ內務卿ヨリ管轄地方廳ヲ經テ之ヲ本人ニ下シ依テ以テ年々金圓三受領シ證下爲サシム

恩給登錄寫帖ヲ下付セル前ニ於テ海軍卿ハ其恩給ヲ受ク可キ本人ニ計算書ヲ下シ

以テ其算則ヲ示ス

第四十五條 退職及ヒ退役恩給並ニ扶助料下賜ノ始期ハ左ノ各項ニ依ル可シ

- 一 下士以上ハ計算書日付ノ翌日
- 二 卒ハ免役ノ翌日
- 三 寡婦若クハ孤兒ハ扶助料當該軍人死歿ノ翌日

第四十六條 恩給扶助料ハ一月四月七月十月ニ於テ前三箇月分ノ金額ヲ大藏省ヨリ本人所在ノ地方廳ヲ經テ下付ス但其交付者ハ恩給登錄寫帖ヲ披閱ノ上戸長ノ證セル本人生存書及ヒ金額受領書ト引替ニ其金額ヲ交付ス可シ

恩給若クハ扶助料ヲ受クル者其金額受領ノ地ヲ轉セントスル時ハ金額交付期月ノ三箇月前ニ其所在ノ地方廳ニ願出可シ若シ其期ヲ過クル者ハ仍ホ元所在地ニ於テ之ヲ交付ス

第四十七條 恩給若クハ扶助料ヲ受クル者權利消絶ニ屬スル時ハ地方廳其恩給登錄寫帖ヲ收メテ內務省ニ出シ內務省ハ之ヲ太政官ニ還付シ其旨ヲ大藏省海軍省ニ報告ス但扶助料移轉スヘキ者アル時ハ恩給登錄寫帖ヲ收メズ更ニ扶助料請願ノ證ト爲サシム

第四十八條 恩給登錄寫帖ヲ受領セシ者盜難水火災等ノ爲メ之ヲ亡失スル時ハ速ニ其旨ヲ届出可シ此場合ニ於テハ內務卿ヨリ證明書ヲ下付ス

第七章 賑恤金

第四十九條 賑恤金ハ左ノ項目ニ該ル者ニ之ヲ給ス

- 一 下士卒戰鬪或ハ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受テ服役ニ堪ヘス免官免役スル者ト雖モ第二十條末項ヨリ輕傷ニシテ退職退役恩給ヲ受ケサル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第五項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 二 下士卒平時公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受テ前項ト等シキ者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス十箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 三 下士卒服役實期滿五年以上十一年未滿ノ者公務ノ故ニ非スシテ傷痍疾病ヲ受テ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨クルニ至ル者及ヒ其五年未滿ト雖モ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者ハ其官階ニ應スル負傷增加表第六項ノ一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス
- 四 軍人死歿シ扶助料ヲ受ク可キ其寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ從來死者ニ依リ生活セルニ二十歳未滿又ハ二十歳以上ト雖モ癡疾ノ兄弟姉妹アリテ之ヲ教育スルニ親族ナキ者ハ其寡婦ニ相當セル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

第五十條 前條ノ賑恤金ハ本人ノ情願又ハ所管長官ノ申請ニ依リ海軍卿之ヲ詮議シ太政官特別ノ裁可ヲ以テ之ヲ下賜ス其金額ハ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ下付ス

第八章 給助金

第五十一條 給助金ハ下士以上服役中死歿シ又ハ五年以上勤績キノ後罷役或ハ免官トナリ恩給ヲ賜ハラサル者ニ之ヲ給ス其金額ハ已号表面ニ依ル但懲戒ノ爲メ免官或ハ刑名宣告ニ至ラサルノ不正ノ所業確認ノ者ニハ之ヲ給セス(明治十七年四月第卅八號達改正)

退職及退役恩給表

級	一	二	三	四	五
級一	六拾圓	五拾四圓	四拾八圓	四拾四圓	四拾圓
級二	七拾五圓	六拾七圓五	六拾圓	五拾五圓	五拾圓
級三	九拾圓	八拾壹圓	七拾貳圓	六拾六圓	六拾圓
級四	百五圓	九拾四圓五	八拾四圓	七拾七圓	七拾圓
級五	百貳拾圓	百八圓	九拾六圓	八拾八圓	八拾圓
					七拾貳圓
					六拾四圓
					五拾六圓

負傷增加恩給表

等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
等一	百四十四圓	百三十五圓	百二十五圓	百十五圓	百五圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等二	百三十四圓	百二十五圓	百十五圓	百五圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等三	百二十四圓	百十五圓	百五圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等四	百十四圓	百五圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等五	百四圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓

戰闘及公務ニ因リ死亡者ノ寡婦(孤兒)扶助料表

等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
等一	百四圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等二	百三圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等三	百二圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等四	百一圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等五	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓

寡婦(孤兒)扶助料表

等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
等一	百四圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等二	百三圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等三	百二圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等四	百一圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
等五	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓

給助金表

等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
等一	千五十四圓	七百五十四圓	六百圓	四百五十四圓	三百圓	二百五十四圓	百八十四圓	百五十四圓	六十圓	五十四圓	四十八圓
等二	千四十四圓	六百五十四圓	五百圓	三百五十四圓	二百圓	一百五十四圓	百圓	五十圓	四十圓	三十四圓	二十八圓
等三	千三十四圓	五百五十四圓	四百圓	二百五十四圓	一百圓	五十圓	四十圓	三十圓	二十圓	十四圓	八圓
等四	千二十四圓	四百五十四圓	三百圓	一百五十四圓	五十圓	四十圓	三十圓	二十圓	十四圓	八圓	七圓
等五	千十四圓	三百五十四圓	二百圓	五十圓	四十圓	三十圓	二十圓	十四圓	八圓	七圓	六圓

○第六款 武官恩給支給法 明治十七年一月 第四號達

陸海軍大將滿二年以上在官ノ者退職若クハ死亡スル時ハ特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ

陸海軍中將小將并ニ同等ノ軍人ニシテ特別ノ功績アル者ハ服役實期十一年未滿ト雖特旨ヲ以テ恩給ヲ支給スルコトアル可シ

陸海軍武官ヨリ文官ヲ兼任スル者武官現役十一年以上十五年十一年以上ニハ未滿ニシテ從軍年ヲ合算ス未滿ニシテ退官若クハ死亡スル時ハ陸海軍恩給令ニ依リ恩給ヲ支給シ其現役滿十五年以上ノ者

ニハ本兼官ノ内ニテ其俸給ノ多キ額ニ就キテ恩給ヲ支給ス可シ 恩給金額ノ増加年數 迄ヲ云 及寡婦孤兒等ニ轉給スルコトハ總テ陸海軍恩給令ノ例ニ依ル

右相違候事

○第七款 武官傷疾病等差例 明治十七年七月海軍省丙 第百十九號(海軍一般)達

海軍恩給令中傷痰疾病等差例並傷痰區分左ノ通相定候條此旨相違候事 傷痰疾病等差例

戦闘及び戦時平時ニ拘ハラヌ公務ノ爲メ傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ恩給令第二十條ニ該當スル者ニ等差ヲ附スルノ概子左ノ如シ

- 第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ癩スル者ハ第四項トス
- 第二條 兩耳ヲ聾スルハ第四項トス
- 第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ癩スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス
- 第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス
- 第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ癩スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス
- 第六條 咀嚼ノ用ヲ癩スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障碍アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス
- 第七條 精神凶失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス
- 第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項乃至第五項トス
- 第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

- 第十條 言語ノ機能ヲ癩スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十一條 胃腸膀胱等ニ癩遺管ヲス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス
- 第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十三條 陰莖或ハ睾丸ヲ全失スル者ハ第三項トス
- 第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏辜丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス
- 第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全癩スル者ハ第一項トス
- 第十七條 一上肢ヲ失ズル者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス
- 第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ癩スルモ全肢ノ用ヲ癩スルニ至ラサル者ハ第六項トス
- 第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒著若クハ強硬等ノ爲メニ把握採摘ノ用ヲ癩スル者ハ第五項トス
- 第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第一類 行政法 武官傷痕疾病等差例

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ合セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕量ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス

恩給令第四十九條第一項第二項傷疾ノ區分

第一款 拇指ヲ失スル者

第二款 上ニ等シキ傷疾ヲ受ル者

第三款 示指ヲ失スル者

第四款 上ニ等シキ傷疾ヲ受ル者

第五款 拇指示指ヲ除クノ他一指ヲ失スル者或ハ之ニ等シキ傷疾ヲ受ル者

以上ノ五款共ニ輕重ヲ酌量シテ重キ者ニハ甲額ヲ給シ輕キ者ニハ乙額ヲ給ス假令ハ第一款傷疾ノ重キ者ニハ十年分輕キ者ニハ九年分第二款傷疾ノ重キ者ニハ八年分輕キ者ニハ七年分ノ金額ヲ給スルカ如シ以下倣之

恩給令第四十九條第三項營業ヲ妨ケル者及ヒ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩眼ヲ盲スル者傷疾疾病ノ區分

第一款 兩眼ヲ盲シ若クハ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ或ハ之ニ等シキ傷疾疾病ヲ受ル者

第二款 一肢ノ用ヲ失シ或ハ之ニ等シキ傷疾疾病ヲ受ケ全ク服役ニ堪ヘス其營業ヲ妨ケルニ者ル者

以上二款共ニ輕重ヲ酌量シ第一款ヲ分テ甲乙ノ二トシ甲ニハ五年分乙ニハ四年分ノ金額ヲ給シ又第二款ヲ分テ甲乙丙ノ三トシ甲ニハ三年分乙ニハ二年分丙ニハ一年分ノ金額ヲ給スルモノトス

○第八款 下士卒家族扶助金給與法

明治十七年九月海軍省
乙第十五號(府縣へ)達

海軍下士卒家族扶助金給與法左ノ通改定候條此旨相達候事

一 海軍兵員ニ編入及ヒ退職退役或ハ轉免死亡等ノ節一個年未滿ノ端月アル時ハ其月數ニ應リ月割テ以テ給與スヘシ

二 海軍刑法第百十九條第百二十條第百三十三條第百三十四條第百三十五條ノ罪ヲ犯シタル者其不在中ハ停止ス而シテ其給與法ハ仍ホ前項ニ准ス

三 獨身ノ附籍者ハ給與スヘキ限ニ在ラズ

四 (明治十八年二月同省乙第三號達改正) 毎年給與ノ金額ハ前半年後半年ノ二期ニ分テ前半年分ハ其年八月ニ後半年分ハ翌年二月ニ會計局ヨリ支出シ該家族居住ノ地方廳ヲ經テ下附スヘシ

五 (明治十八年二月同省乙第三號達追加) 地方廳ニ於テ金額下附ノ際家族失踪等ノ事故ニ依リ六ヶ月以上受領者ナキ時ハ其受領者ガキ間ノ金額ハ之ヲ給セズ

○第九款 巡查看守給助例

明治十五年七月
第四十一號達

巡查看守給助例別紙之通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但實施ハ府縣於八年(二月)第三號達并九年(八月)第八十號達別表中免職歸國旅費ハ

相廢儀儀相心得ヘシ

巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助傷痕給助死亡給助療治料祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與フル者ハ左ノ如シ

一 退職給助 勤績 巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ滿五年以上ニシテ退職スルモノニハ一時之ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スルモノニハ終身之ヲ給ス

二 傷痕給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス

三 死亡給助 職務ノ爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷痕ニ原シテ死亡スル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

一 勤績滿五年ノ者ハ一時金貳拾圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラス額ヲ給ス滿

六年以上九年迄ハ一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラス額ヲ増給ス

二 勤績滿十年ノ者ハ年金貳拾五圓ヨリ少カラス三拾圓ヨリ多カラス額ヲ給ス滿

十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラス額ヲ増給ス

第一類 行政法 巡查看守給助例

第四條 傷疾給助ノ額

- 一 一等傷 終身不具トナリ自用ハ年金三十拾圓ヨリ少カラス四拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 二 二等傷 終身不具トナリ自ハ年金二十拾圓ヨリ少カラス三十拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

- 一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三十拾圓ヨリ少カラス五十拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス 寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス 但寡婦アレハ孤兒ニ給セス
- 二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受ル者ナク祖父母父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五十拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス
- 三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾アルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五十拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條 療治料ハ傷疾又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料

一 奉職ニ年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金十圓ヨリ少カラス十五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五十圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各頂ニ該ル者ハ給助ヲ受ルヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪セラレタル者
- 二 懲罰ニ依リ免職セラレタル者

第九條 左ノ各頂ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受ルノ官職ニ就キタル者
- 二 公權ヲ停止セラレタル者
- 三 失踪シタル者
- 四 許可ヲ得ズシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○第二十三章 公債

○第一款 新舊公債証書發行條例

明治八年五月 第九十五號布告

明治五壬申年マテノ間從來舊諸藩縣ニ於テ内國人民ヨリノ逋債ヲ改メテ政府ノ公債トシ之レヲ大藏省ニ引受テ其債主ハ各此公債證書ヲ交付シ定期ヲ逐テ之レヲ償却スルニ付キ政府ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一條 (新舊公債ノ區別及ヒ證書ノ種類記號ノ品別等ヲ明ニス)

第二節 弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年マテ舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ舊公債ト稱シ明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩マテ及ヒ明治五壬申年迄ノ間舊諸縣ニ於テ借用シタルモノヲ新公債ト稱スヘシ

第二節 新舊公債トモ各其高チ五分シテ第一第二第三第四第五トシ證書面ノ金高チ五百圓三百圓壹百圓五拾圓貳拾五圓ノ五種ニ區別スヘシ

第三節 新公債證書ハ向後抽籤ノ方法ヲ以テ其元金ヲ償却スヘキニ付便宜ノ爲メ四十部ニ別チ(スルハ)四十七字ノ記號ヲ證書面ニ命名スヘシ

第二條 (新舊公債償却年度及ヒ利息ノ割合ヲ明カニス)

第二節 舊公債ハ無利息モノヲ元金ハ明治五年壬申ヨリ明治五十四年迄五十ヶ年賦トシ其年ノ拂方ニ當リタル賦金ヲ毎年十二月一日ヨリ同十五日迄ノ間ニテ拂渡スヘシ

第三節 新公債ハ利息付モノヲ明治八年ヨリ明治二十九年迄二十二年ノ間ヲ限リ大藏

省ノ都合ニヨリ毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ證書ノ記號ヲ公定シ其割合ニ隨テ之ヲ拂戻スヘシ其利息ハ年々元高百分ノ四分トシ明治五年壬申ヨリ明治二十九年マテ毎年六月一日ヨリ十五日迄(圖標ヲ施ス十字ハ明治九年第五十號布告追加)十二月一日ヨリ十五日迄ノ間ニテ之ヲ拂渡スヘシ(本文總テ其金額ハ大藏省ノ都合ニヨリ金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ)

但明治八年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂ヒ戻スニ當リテハ年四分ノ利息月割ヲ以テ右抽籤法行ヒシ月マテノ分下ケ渡スヘシ

第三條 (公債證書ノ渡方及ヒ其簿記ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債證書共各債主ヘ交付スルニハ大藏省ニ於テ其金高及ヒ新舊ノ區分共調査シテ後之ヲ簿冊ニ登記シ證書五種ノ區別(新公債ナレハ四十七種ノ記號)中ニ於テ其金高ニ應シ相當ノ割合ヲ定メ其證書ハ簿冊ニ割印シテ各債主ノ地方管廳ニ送達ス可シ

但此公債證書ヲ其地方管廳ニ送達スルニハ勿論其債主ノ名面金高證書ノ種類等詳明ニ目錄書ヲ添テ相渡スヘシ

第二節 各地方管廳ニ於テハ別ニ公債掛ノ局ヲ設ケ各種ノ簿冊ヲ備ヘ大藏省ヨリ渡サレタル證書ヲ點檢シ其債主ノ名面及ヒ證書ノ金高種類ヲ分別シテ之ヲ簿冊ニ登記

第一類 行政法 新舊公債證書發行條例

シ且ツ其證書裏面へ悉ク債主ノ名面ヲ記入シ管屬ノ割印ヲ加ヘテ其渡方ヲ取計フヘ

第四條 (舊公債證書元金年賦並ニ新公債證書ノ利息渡方手續等ヲ明カニス)

第一節 (明治九年四月第五十號布告改正) 毎年舊公債元金年賦並ニ新公債利足下渡方ハ各地方官ニ於テ各管下ノ公債證書所持人ノ數ヲ取調其年ノ渡方ニナルヘキ利息並ニ元金年賦共金額内譯合計表ヲ作リ新公債上半季ノ利息表ハ五月十日マテ下半季ノ利息表及ヒ舊公債年賦金表ハ十一月十日マテニ毎年大藏省へ差出スヘシ

第二節 大藏省ヨリ右合計表ニ從テ其下渡スヘキ金高ヲ拂場所へ廻送ノ手續ヲ爲シ臨時官員出張スルガ又ハ其地方官ニ委任シ都テ證書ノ下ニ附添スル其年ノ拂方ニ屬スル小札ヲ切取リ引換ニ其拂方ヲ爲スヘシ

第三節 右切取リタル小札ハ其拂方ヲナシタル明細調書ト共ニ直ニ之ヲ大藏省ニ送納スヘシ

第五條 (新公債證書拂方諸般ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新公債證書ノ元金拂方ヲ爲スニハ毎年又ハ隔年大藏省ノ都合ニ從ヒ抽籤ノ法ヲ以テ拂渡ス可シ

右抽籤ノ法ハ證書ノ記號ヲ明ニシ其年拂戻ス可キ金高ヲ定メ此金高ニ證書ノ高ヲ部

分シ東京或ハ大坂等證書ノ金額最も多キ場所へ國債寮ノ官員出張シテ其地方ノ長官及ヒ公債掛立會ノ上管下ノ證書所持人十人以上ヲ集メ眼前ニ於テ籤ヲ抽キ其籤ニ當リシ部分ヲ其年ノ拂戻スヘキモノト定ムヘシ

第二節 抽籤ノ處置相濟ニ賦當ノ記號公定スレハ立會タル證書所持人等ヨリ其抽籤ノ方法公正ナル事ヲ保證スル爲メ書面ヲ出サシメ然ル後何記號ノ證書ハ何月何日何處ニ於テ拂戻ス可シト云フコトヲ布告書又ハ新聞紙ニテ普ク世上ニ公告ス可シ

第三節 右拂場所へハ大藏省ヨリ拂戻スヘキ金高ノ廻送ヲ爲シ公債拂方ノ官員出張シテ(時宜ニヨリテ地方官ニ委任スルコト可シ)其籤ニ當リタル證書引換ニ其拂方ヲナシ其證書ハ拂濟ノ証ヲ印シ明細書ト共ニ直ニ大藏省ニ送納スヘシ

第四節 右拂方ノ取扱ハ(年賦又ハ利息拂方トモ)大藏省ノ都合ニヨリテ追テ各地ニ創立スヘキ國立銀行ニ命ジ名代人トシ其處置ヲ爲サシムルコトアルヘシ

△(明治十二年七月第二十六號布告第五節追加)

第五節 凡ソ公債元金並ニ利賦金拂渡ノ際其期日ヲ失シテ受取方申出テス其拂渡スヘキ年ノ翌年ヨリ向五十年ヲ過クル片ハ一切之レヲ拂渡サス證書所持主ノ損失タルヘシ然レモ其受取リ難キ事由ヲ該期限内ニ其管屬ニ申出テ認可ヲ經タル者ハ此限ニ在ラス

但シ起業公債證書(記名無記名)モ本節ニ準ヌ又次條改正追加ノ内第十二節ヲ除キ該公債記名證書ニ適用スルモノトス

第六條 (新舊公債證書授受買賣等ノ手續ヲ明ニス)

第一節 (明治十三年六月第三十號布告改正)新舊公債證書共全ク所持人ノ所有物ナレハ他人(外國人ヲ除ク)ハ讓渡賣渡買入等都テ勝手タルヘシ尤モ死者又ハ失踪者遺留ノ公債證書並ニ養子ノ戸主離縁復籍スル片其養家ニ屬スル公債證書ハ特約アルモノ、外總テ其遺留財産ヲ相續スヘキモノ、所有ニ販スルモノトス

但本文讓渡賣渡ハ第二節以下ノ手續ニ照準スヘク尤死亡失踪離縁ニヨリ遺留セル證書ハ此條例附錄第二圖ノ振合ニ依テ名面書替ノ上管廳ノ檢印ヲ受クヘシ

第二節 證書ヲ授受及賣買スルニハ双方ノ示談整ヒシ上ニテ甲ノ方(讓リ主買主ヲ云フ)ハ證書裏面ヘ形ノ通り(裏面雜形)記名調印シテ別ニ其證書ノ種類記号番号金高枚數月日及ヒ乙(受クル者買人ヲ云フ)ノ姓名等ヲ認メ其證書ト共ニ甲ヨリ之ヲ其管廳ニ差出スヘシ

△(明治十四年八月第四十一號布告但書追加)

但シ裁判所ニ於テ公買スル證書ヲ買受ケタル者又ハ裁判所ノ言渡ニヨリ流質トナリタル證書ヲ有スル者此ノ條例附錄第三圖ノ振合ニ依テ名面書替ノ上裁判所ヨリ

管廳ヘシ通知書ヲ添ヘ管廳ノ檢印ヲ受クヘシ

第三節 管廳ノ公債掛ハ右證書ト屆書トヲ受取リ其次第ヲ承リ正シ證書裏面ヘ形ノ如ク(裏面雜形)年號月日ヲ記シ檢印シテ之ヲ差出セシ者ヘ下渡シ其趣ヲ簿冊ニ詳記シ大藏省ヘハ翌月五日マテニ届出スヘシ

第四節 (明治十二年第二十六號布告ヲ以テ本節中「若シ遠隔ノ地方云々以下罰金ヲ命スヘシ」ノ百二字削除)

右ノ手續ニテ檢印済ノ證書ヲ甲ヨリ乙ニ渡シタル片甲乙トモ同管下ノ者ナレハ別ニ屆書ヲ出スニ及ハスト雖モ管轄違ナシハ其證書ノ種類記号番号枚數及ヒ甲ノ姓名年號月日ヲ詳記シテ乙ヨリ其管廳ヘ速ニ届出ヘシ

但シ利賦金拂方施行中ニ讓受買受ノ證書他ノ地方ヨリ増加シ來ル分ハ先ツ買主ノ届出ヲ聞届最初ノ拂方相濟シ上ニテ利賦金受取方也加表ヲ制シ尙大藏省ニ差出スヘシ

第五節 乙ノ地方管廳ニテハ右ノ届出アレハ前以テ備置キタル公債簿冊ヘ其證書ノ金高種類記号番号枚數及ヒ其名面取引ノ年號月日ヲ登記シ且ツ證書ヘ割印シテ下渡スヘシ

第六節 右ノ手續ヲ以テ引取リタル證書ヲ更ニ他人ニ(外國人ヲ除ク)讓渡スルモ都テ

前條ノ手續ニ從テ之ヲ處置スヘシ

第七節 (明治十二年七月第二十六号布告ヲ以テ本節中「若其送達云々違令ノ罪ニ處スヘシ」ノ四字削除)新舊公債證書ヲ管轄違ヒニテ讓渡買賣等ノ事アレハ甲ノ地方管廳ヨリハ即日乙ノ地方管廳ヘ其證書ノ種類記號金高及ヒ名面取引ノ年月日ヲ詳記シ送達スルルキ直チニ公債簿上ヲ削除スヘシ尤モ此時證書ヘ割印チ爲スニ不及乙管廳ニテハ右送達書ヲ得ラレハ直チニ其旨ヲ甲管廳ヘ回報スヘシ尤モ甲管廳ヨリ乙管廳ヘ送達ノ封書ヲ都合ニ因テ讓受買受人ヘ托シテ送達スルモ妨ケナシ且ツ大藏省ヘハ一月分翌月五日マテニ甲乙管廳ヨリ互ニ届出ヘシ

但シ乙ノ管廳ニテハ右送達之レナキ間ハ其證書買賣スルチ差留置クヘシ

第八節 新舊公債證書所持ノ者管轄替相成ル節ハ甲ノ地方管廳ヨリ乙地方管廳ヘ相達スル儀ハ第七節ノ通りタルヘシ本人ハ所持ノ證書種類記號番號金高枚數及ヒ轉籍ノ年號月日住所ノ地名等詳記シ乙管廳ニ届出ヘシ管廳ニテハ公債簿冊ヘ登記シ證書ヘ割印シテ下渡スヘシ

第九節 他ノ府縣ヨリ寄留ノモノ新舊公債證書ヲ讓受ケ買受ケントスルルキハ寄留地ノ管廳ニ申立管廳ニテハ本管ノ人民同一ノ取扱ヲ爲スヘシ就テハ年々元利金モ其應ヨリ拂渡スヘシ

但後日本籍ヘ復皈スルルキハ本人ヨリ即日管廳ヘ届出ヘシ管廳ニテハ復歸ノ地方管廳ヘ通達方並本人居方等第八節ノ通タルヘシ

第十節 新舊公債證書所持ノモノ他ノ府縣ヘ寄留スルルキハ年々元利拂及ヒ讓渡シ賣渡トモ寄留地管廳ノ主務ト爲スニ付キ寄留セントスル者ハ證書ノ種類記號番號金高枚數トモ本管廳ヘ届出ヘシ本管廳ニテハ寄留地ノ管廳ヘ送達シ寄留地ノ管廳是ヲ受テ取扱ヲ爲ス手續ハ第七節第八節ニ照準スヘシ若シ其身他ヘ寄留スト雖モ都合ニ因テ公債證書ハ本貫ヘ殘シ置年々元利受取或ハ讓渡賣渡ヲ爲ス如キハ寄留地管廳ニテ與カルナカルヘシ然レモ所持高ノ内都合ニ因リ幾分カ引分ケ寄留先ヘ携帯スルルキハ其分ヲ本管廳ヘ届出本管廳ヨリ寄留地ノ管廳ヘ送達ノ手續ハ前條ニ記載セル通タルヘシ尤本管ヘ殘シタル證書ハ本管廳ノ所轄勿論ニシテ年々元利受取或ハ讓渡賣渡等本人ヨリ委任狀ヲ與ヘシ代理人ヲ以テ取扱ヲ爲シ妨ケナカルヘシ但後日本籍ヘ復歸スルルキハ第九節但書ノ通りタルヘシ

第十一節 (明治十二年七月第二十六号布告改正)都テ讓渡シ又ハ買賣等ハ相對ノ約定ヲ以テ其所有權ヲ轉移スルヲ得ヘシ然レモ前各節ノ手續ヲ了セサル間ハ其讓受主買主ニ於テ假令其證書ヲ所持スルトモ利賦金及ヒ元金ハ官簿ニ記載ノ債主ニアラサルハ下渡サス又證書紛失等ヨリ代リ證書ヲ願出ルモ亦前ニ同シ

第十二節 (明治九年第五十號布告明治十年第三十四號布告明治十一年第二十二號布告明治十二年第二十六號布告改正追加左ノ如シ)

每年六月一日ヨリ十五日迄ニ新公債利息渡方并十二月一日ヨリ十五日迄ニ新公債利息舊公債元金年賦渡方ヲ爲スニ付五月一日ヨリ六月十五日迄十一月一日ヨリ十二月十五日迄ハ各地方証書所持人ノ混淆セサル爲右証書ノ讓渡賣買ノ届出ハ見合ス可シ
△(明治十二年七月第二十六號布告第十三節第十四節追加)

第十三節 公債證書ヲ諸官廳ノ所有トシテ引受タル節ハ其應主掌官ノ官名姓名ヲ記シ讓渡等ノ節ハ其官印(官印ナキハ其實印)ヲ捺スヘシ
△(明治十三年六月第三十號布告但書追加)

但シ記名者代換ノ時ハ次節ノ手續ニ照準スヘシ

第十四節 (明治十三年六月第三十號布告改正) 銀行及ヒ公認シタル會社學校又ハ町村組合等ノ類共同合資ニシテ所有主一個人ニ限リ難クトモ其内主長タル者又ハ證書管保ノ責ニ任スル者等一個人ノ姓名ヲ記シ肩書ニ其責任タル名義ヲ記シ(例ヘハ學校ハ其取締又ハ世話掛銀行又ハ會社ハ頭取其支店ハ支配人町村組合ハ總代人等何レモ其責任タル名目ヲ肩書ニシ以テ一個人ノ私有ニ非ラサルコトヲ明ニスルノ類) 而シテ讓渡其他一切右記名者ノ實印ヲ以テ取引致スヘシ右記名者代換等ノ節ハ右ノ類ニ限

リ代任ノ者へ引繼キ證書書替ニ及ハヌト雖モ代換ノ譯及ヒ其肩書姓名印影ヲ管廳へ届出ヘシ其廳ニ於テハ簿冊へ其譯并ニ名而年號月日等ヲ登記シ置クヘシ然ル後代任ノ者更ニ記名者ト成リ讓渡其他一切肩書姓名實印ヲ以テ取引致スヘシ(明治十三年節中ヲ改ム)

但是迄銀行會社學校等ニ於テ記名者ヲ定メス所有スル向ハ證書書替ニ及ハヌ本節ニ照シ記名者ヲ定メ管廳へ届置ク可シ向後讓渡其他一切本節ニ照準シ取引致ス可シ

第七條 (新舊公債証書引當物等ニナシタル處置ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債証書借金ノ引當又ハ質物ノ証據金トシ所持人ヨリ他ニ預メ置クコトアリトモ其拂戻ス可キ元金利息ハ其所持人へ下渡ス可シ尤モ本人調印ノ委任狀ヲ持參セル片ニハ外國人ヲ除クノ外何人ヘナリトモ相渡ス可シ

第二節 若シ又質入流込ミトナリタル類ハ讓リ渡賣買ノ手續ヲ爲スコト第六條第二節第三節ノ通タル可シ

第八條 (新舊公債証書共裏面並ニ引換等ノ手續ヲ明カニス)

第一節 新舊公債証書讓渡賣買頻繁ニシテ裏面記名ノ場所ナキニ至ルキハ其所持人ハ書面ヲ以テ其地方管廳ニ申立証書ノ繼足ヲ願ヒ其証書ヲ差出スヘシ

第二節 地方管廳ニテハ其証書ノ假受取ヲ所持人ニ渡シ置キ証書へハ兼テ大藏省ヨリ

渡置タル記名紙ヲ補足シ割印シテ其次第年號月日等ヲ簿冊ニ記入シ假受取ト引換ニ之レヲ所持人ニ渡スヘシ

第九條 (新舊公債証書共紛失等ノ處置ヲ明ニス)

第一節 新舊公債証書ノ所持人若シ証書ヲ取失フカ又ハ盜難ニ逢テ証書ヲ盜取レン片ハ何號何番何高ノ証書幾許ヲ紛失又ハ盜取ラレタル由ヲ直ニ其地方管廳へ届出管廳ヨリ之ヲ大藏省へ届出ヘシ

但シ管廳ニテハ大藏省へ届出ル片管内へ其趣ヲ布達スヘシ

第二節 大藏省ニテ右ノ届書ヲ受取レハ速ニ其趣並ニ証書種類番記號枚數等ヲ掲ケ何月何日後日ハ右証書ヲ取引スヘカラス又何人ニ限ラス所持致居候ヲ見聞候者ハ速ニ管轄廳へ訴出管轄廳ヨリハ即チ大藏省ニ届出ヘキ旨ヲ布達ス地方管廳ニテハ即チ右ノ旨ヲ新聞紙其他ノ手續(新聞紙ナキ地ハ町村高札場ニ揭示セシム)ヲ以テ紛失又ハ盜取ラレン月ヨリ七ヶ月間管内へ公布ス可シ

第三節 右公布ノ間ハ其証書ノ元金又ハ利息共之レヲ拂ヒ渡サ、ル可シ

第四節 七ヶ月ヲ過キ其証書發見セサレハ大藏省ニテ其証書ニ換フ可キ新証書ヲ作り其地方管廳ヲ通シテ之レヲ所持人ニ交付ス可シ尤モ公告時間中ニ積リタル元利ノ高ハ其新証書ヲ渡シタル次ノ拂期月ニ同之ヲ拂渡ス可シ

但シ此ノ新証書ヲ渡ス時元証書ノ記號其外紛失又ハ盜難ニ付此條々ノ手續ヲナセシ後チ更ニ交付スルノ趣意ヲ大藏省及ヒ其管廳ノ簿冊ニ記入ス可シ

第十條 (新舊公債証書共燒失等ノ處置手續ヲ明カニス)

第一節 水火災ニテ証書燒失ノ事アレハ所持人ハ前條ノ手續ニ從テ書面ニテ其由ヲ管廳ニ申立テ新証書下渡方ヲ乞フヘシ

第二節 管廳ニテハ其燒失ノ次第ヲ推糺シ判然タレハ直チニ其次第及ヒ推糺ノ手續ヲ大藏省へ申立ツヘシ

但シ其燒失若シ判然タラサレハ第九條紛失ノ手續ニ從テ之ヲ處置スヘシ

第三節 大藏省ニテハ其申立ニ從テ代リ証書ヲ作り之ヲ其管廳ニ送達シテ所持人ニ交付スヘシ

但シ証書燒失ニ付キ新証書交付ノ趣旨ハ大藏省地方管廳ノ簿冊ニ詳記スヘシ

第四節 若シ又水火災ニテ其証書ノ部分燒切レ又ハ消滅シテ通用シ難キ程ナレハ所持人ハ証書ノ殘紙ヲ添ヘ書面ニテ其由ヲ其管廳ニ申立証書ノ書替ヲ乞フヘシ

第五節 其管廳ニテハ其証書ノ殘紙ヲ添ヘ書面ニテ大藏省へ申立書替証書ヲ得テ之レヲ下渡ス可シ

但シ其書替ノ手續ハ大藏省地方官ノ簿冊ニ詳記スヘシ

第十一條 (新舊公債證書贗造等ノ處分ヲ明ニス)

第一節 何人ニ不拘公債證書ヲ故ヲ剝去リ又ハ切裂キ又ハ塗抹シ孔ヲ穿テ糊付ニスル等ノ事ヲ爲ス可カラス若シ犯ス者アラハ裁判ノ上其金高十倍ノ罰金ヲ命スヘシ但公債證書ハ年賦拂濟ノ金高ヲ引去リ餘殘ノ小札金額ニ依テ計算シ罰金ヲ當ル者トス

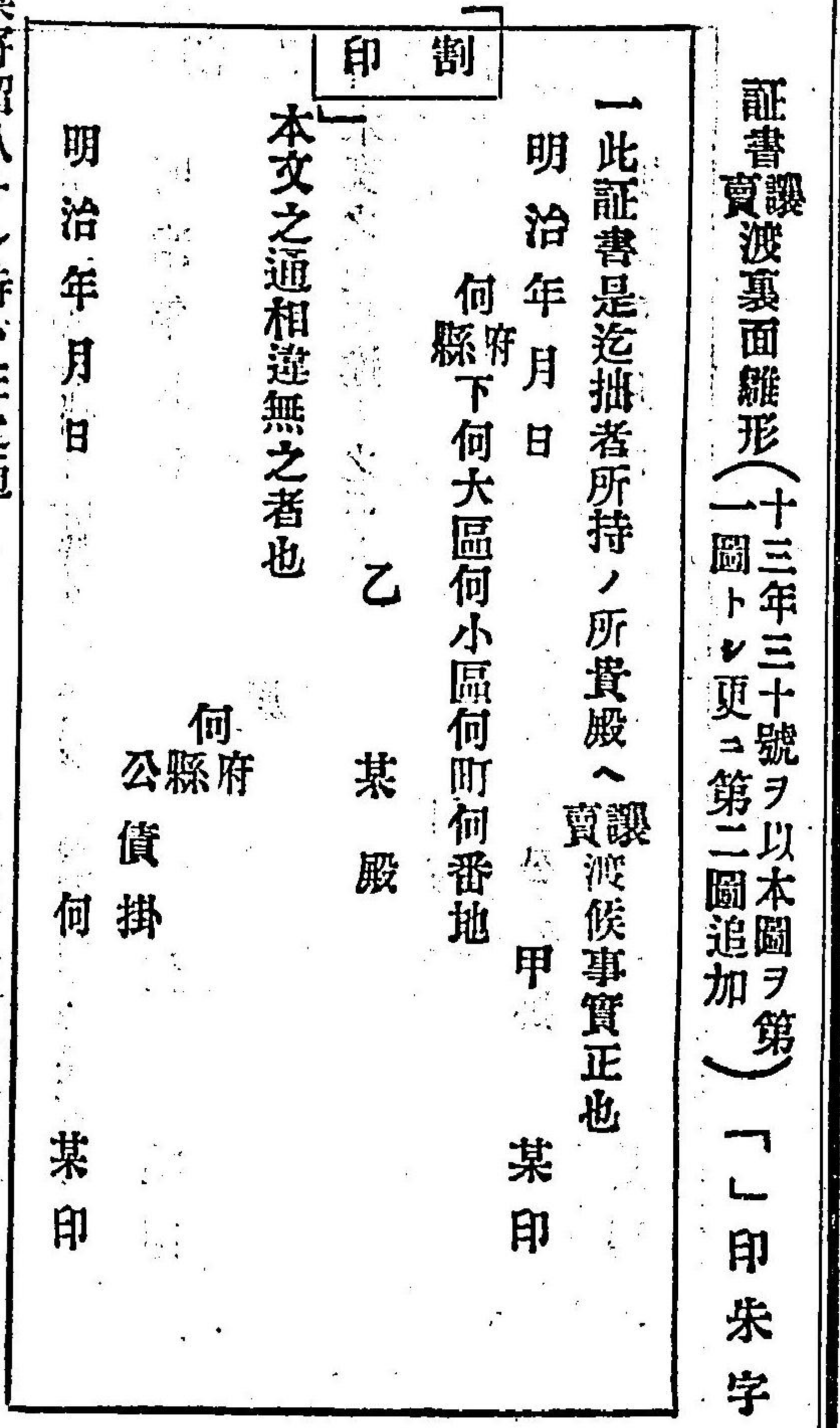
第二節 何人ヲ不論此公債證書ヲ贗造シ又ハ人ヲシテ之ヲ模擬セシメ又ハ人ノ贗造スルヲ助ケ又ハ贗造ト知リテ通用セシメ又ハ證書ノ圖書文字ヲ變換シ又ハ人ヲシテ變換セシメ又ハ變換セシメノト知リテ之ヲ通用シ其他似寄ノ板版紙品雛形ノ圖書文字等ヲ所持スル者ハ都テ裁判ノ上法ニ處スヘシ

第十二條

第一節 政府ノ都合ニヨリテ要用ノ事アレハ利息及ヒ償却年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補シ又ハ之ヲ改正スルコトアルヘシ

第二節 右增補改正等アレハ速ニ其由ヲ世上ニ公告スヘシ

附錄第一圖



乙 某寄留人ナル時ハ左之通

本貫何府華士族カ

何縣下何大區何小區何町何番地寄留

何所何番地居留

乙 某殿

第一類 行政法 新舊公債證書發行條例

右ノ通タルヘシ允施行濟ノ分ハ此限ニ非ヌ

附錄第一圖

「何某^死遺^七物トシテ拙者ヘ引受候事實正也」
離縁ニ付
 「此證書是迄拙者所持之處貴殿へ譲渡候事實正也」
 明治年月日 何 某印
 殿
 何(府縣)
 公債掛
 何 某印
 明治年月日

割印

本文之通相違無之者也

明治年月日

附錄第三圖

「何某所持之處何^割印何々ニ付公買ニ因テ拙者買受ケ候事實正也」
候事實正也
 「此證書是迄拙者所持之處貴殿へ譲渡候事實正也」
 明治年月日 何 某印
 殿
 何(府縣)
 公債掛
 何等屬何 某印
 明治何年何月何日

割印

明治何年何月何日

本文之通相違無之者也

明治何年何月何日

○第二款 家祿引換公債證書拂渡方

明治八年八月三十號布告

第一類 行政法 家祿引換公債證書拂渡方

(加追圖三第以ヲ號一十四第年四十)

明治七年(三月)第三十九號布告家祿引換公債証書發行條例自今相廢止係左ノニテ條ノ外諸般ノ手續總テ本年(五月)第九十五號布告新舊公債証書發行條例ノ通可相心得此旨布告候事

一家祿引換公債証書ノ元金拂渡ハ家祿引換相渡候三ケ年目ヨリ七ケ年ノ間ニ政府ノ都合ニ寄リ抽籤ノ法ヲ以テ拂渡ス可シ

一(明治十年第三十四號布告明治十一年第二十二號布告明治十二年第二十六號布告改正)年八朱ノ利息ハ年々十一月一日ヨリ十五日マテニ拂渡スニ付キ証書所持人混淆セサル爲メ十月一日ヨリ十一月十五日マテ証書ノ賣買譲渡等ノ届出ヲ見合各管廳ニ於テ十月一日証書所持人ノ數ヲ取調ヘ其季ノ拂方ニナルヘキ名面金高内譯合計表ヲ作リ同月十五日マテニ大藏省ニ差出スヘシ

○第三款 配當公債証書下賜法 明治十年三月 第三十二號布告

各社領朱黑印地並ニ除地収額中ヨリ従前配當受來候舊神官ノ輩ハ右配當高ヲ別紙祿制ニ引充候上金額ニ換ヘ五ケ年分ノ合計配當祿公債証書ヲ以テ一時ニ下賜候條右公債証書ハ明治八年(八月)第三百三十號布告ノ通可相心得此旨布告候事
但配當米金受來候者ハ確証相添來ル四月三十日限リ其管轄廳ヘ可申出若シ右期限後

別紙 三至リ如何様ノ事情申出候共採用不相成候條此旨兼テ可相心得事

配當現米 祿制
千石以上 三百石
千石未滿 二百八十石
九百石未滿 二百六十石
八百石未滿 二百四十石
七百石未滿 二百二十石
六百石未滿 貳百石
五百石未滿 百六拾貳石五斗
四百石未滿

四百石未滿	百貳拾五石
三百石迄	八拾七石五斗
三百石未滿	五十石
二百石迄	四十五石二斗二升
二百石未滿	四十石四斗四升
百石迄	三十五石六斗七升
百石未滿	三十石八斗九升
九十石迄	二十六石一斗一升
九十石未滿	二十一石三斗三升
八十石迄	十六石五斗五升
八十石未滿	
七十石迄	
七十石未滿	
六十石迄	
六十石未滿	
五十石迄	
五十石未滿	
四十石迄	
四十石未滿	
三十石迄	
三十石未滿	

六百十

三十石未滿
二十石迄
二十石未滿
十石迄
十石未滿
五石迄
五石未滿
五石以下

十一石七斗八升
七石
五石
從前之通

○第四款 金祿公債證書發行條例

明治九年八月
第百八號布告

第一條 華士族及ヒ平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡ス
ト爲シ以テ公債證書ヲ附與ス可シ

一 永世祿ノ者ハハ

金祿元高(賞典祿アルモノハ家祿ニ合計シ元高トス)年限
 (七方圓以上) 五ヶ年分
 (六方圓未滿六方圓以上) 五ヶ年二分五厘分
 (五方圓未滿五方圓以上) 五ヶ年半分
 (四方圓未滿四方圓以上) 五ヶ年七分五厘分

第一類 行政法 金祿公債證書發行條例

- (四万圓未滿三万圓以上) 六ヶ年分
 - (三万圓未滿二万圓以上) 六ヶ年二分五厘分
 - (二万圓未滿一万圓以上) 六ヶ年半分
 - (一万圓未滿七千五百圓以上) 六ヶ年七分五厘分
 - (七千五百圓未滿五千圓以上) 七ヶ年分
 - (五千圓未滿二千五百圓以上) 七ヶ年二分五厘分
 - (二千五百圓未滿千圓以上) 七ヶ年半分
- 右一ヶ年五分ノ利子ヲ給ス
- (千圓未滿九百圓以上) 七ヶ年七分五厘分
 - (九百圓未滿八百圓以上) 八ヶ年分
 - (八百圓未滿七百圓以上) 八ヶ年二分五厘分
 - (七百圓未滿六百圓以上) 八ヶ年半分
 - (六百圓未滿五百圓以上) 八ヶ年七分五厘分
 - (五百圓未滿四百五十圓以上) 九ヶ年分
 - (四百五十圓未滿四百圓以上) 九ヶ年貳分五厘分
 - (四百圓未滿三百五十圓以上) 九ヶ年半分

- (三百五十圓未滿三百圓以上) 九ヶ年七分五厘分
 - (三百圓未滿二百五十圓以上) 十ヶ年分
 - (二百五十圓未滿二百圓以上) 十ヶ年二分五厘分
 - (二百圓未滿百五十圓以上) 十ヶ年半分
 - (百五十圓未滿百圓以上) 十一ヶ年分
- 右一ヶ年六分ノ利子ヲ給ス
- (百圓未滿七十五圓以上) 十一ヶ年半分
 - (七十五圓未滿五十圓以上) 十二ヶ年分
 - (五十圓未滿四十圓以上) 十二ヶ年半分
 - (四十圓未滿三十圓以上) 十三ヶ年分
 - (三十圓未滿二十五圓以上) 十三ヶ年半分
 - (二十五圓未滿) 十四ヶ年分
- 右一ヶ年七分ノ利子ヲ給ス

一終身祿ノ者ハハ

右永世祿年限十分ノ五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

第一類 行政法 金祿公債證書發行條例

一年限祿ノ者ハハ

十年以上ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ四ヲ給ス。
 (十年未滿八年以上)ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ三五ヲ給ス。
 (八年未滿六年迄)ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ三ヲ給ス。
 (六年未滿四年迄)ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ二五ヲ給ス。
 (四年未滿三年迄)ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ二ヲ給ス。
 二年ノ者ハハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス。

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

第二條 此ノ公債証書ノ利子下渡シハ明治十年分ハ十一月翌年五月ニ相渡シ以後之ニ準シ年々兩度ニ下渡スヨトス

△(明治十一年九月第二十六號布告但書追加)

但シ利子下ケ渡シ混浴セサル爲メ毎年四月一日ヨリ五月二十八日マテ十月一日ヨリ十一月廿八日マテハ証書ノ讓渡シ賣買ノ届出(圖點ヲ施ス三字ハ明治十一年第廿六號布告追加)等ヲ見合スヘシ

第三條 家祿賞典祿元高ヲ附與スル年限ニヨリテ利子ノ差異ヲ生スル片元高ニ向テ公債証書ヲ附與スル制限左ノ如シ

譬ヘハ

一金壹萬圓

家祿賞典祿合高

此六ヶ年半分金六萬五千圓此公債証書ノ利子一ヶ年五歩金三千二百五十圓ト成ル一金九千九百圓 家祿賞典祿合高

此六ヶ年七分五厘分金六万六千八百二十五圓此ノ公債証書ノ利子一ヶ年五歩金三千三百四十一圓二十五錢ト爲ル

右比較九千九百圓ノ方利子九十一圓廿五錢ノ過ト成ル然ル片ハ一万圓ノ利子金額ニ超過セサルヲ以テ制限トナメ故ニ九十一圓二十五錢ヲ引去リ利子三千二百五十圓ニ適當スル公債証書ヲ下渡ヲ以テ規則トス其他右ニ類似ノ件ハ皆之ニ准ス

第四條 此公債証書ハ利子ノ差ニヨリ區別アリト云ル其發行スル種類ハ左ノ如シ

- 五百圓 拾圓 二拾五圓 五拾圓 百圓
- 三百圓 五百圓 千圓 五千圓

第五條 前條公債証書ヲ付與スル片ニ當リテハ公債証書ニ未滿ノ端金ハ總テ通貨ニテ相渡スヘシ

第六條 此公債証書ノ元金ハ五ヶ年間之ヲ据置キ六ヶ年目ヨリ大藏省ノ都合ニ因リ毎年抽籤ノ方法ヲ以テ之ヲ消却シ都合三十ヶ年間ニ悉皆之ヲ消却ス可シ

第七條 此公債証書發行ニ付テノ順序其外トモ此條例外ノ事件ハ都テ新舊公債証書發行條例ノ通りタルト心得可シ

○第五款 祿券引換公債証書下賜法 明治九年十二月 第百五十二號布告

家祿賞典祿改制ノ儀本年(八月)第百八號ヲ以テ布告候處右ノ内舊藩廳ニ於テ祿券買買差許有之從來現場買買致シタル家祿ノ向ニ限リ其高ノ多寡ニ不拘給テ十ヶ年分ノ金高公債証書ヲ以テ一時ニ下賜來明治十年ヨリ年一割ノ利息ヲ下渡候條右元金消却利金下渡方等ノ儀ハ金祿公債証書發行條例ノ通可相心得此旨布告候事

○第六款 金札引換公債証書條例 明治十三年十月 第四十七號布告

第一章 總則

第一條 金札引換公債証書ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シ其元利金共ニ金銀貨幣ヲ以テ仕拂フモノトス

第二條 金札引換公債証書ハ記名利札付ニシテ五百圓百圓五拾圓ノ三種トス

第三條 何人ニテモ(外國人ヲ除ク)前條ニ記載スル各種証書面ノ金高ノ紙幣ヲ差出シ金札引換公債証書ニ交換スルコト得ヘシ(本條ハ明治十六年十二月第四十八號布告ニ依リ停止セラレタリ)

第四條 金札引換公債証書ヲ以テ交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ成規ニ遵ヒ之ヲ截斷

スヘシ

第三章 元利金ノ仕拂

第五條 金札引換公債ノ元金ハ其証書交付ノ年ヨリ三ヶ年據置キ四ヶ年目ヨリ向十二ヶ年間政府ノ都合ニヨリ抽籤ノ法ヲ以テ消却シ利息ハ一ヶ年六分(百分ノ六)トシ元金消却ニ至ルマテ毎年五月十一月ノ兩度ニ拂渡スヘシ

但シ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻スニ當リテハ年六分ノ利息月割抽籤十五日以前ニ係レハ前月迄ノ分十六日後ニ係レハ半ヶ月ヲ下渡スヘキモノトスヲ以テ右抽籤法ヲ行ヒントキマテノ分下渡スヘシ

第三章 証書ノ交付及ヒ簿記ノ手續

第六條 紙幣ヲ以テ金札引換公債証書ニ交換セント欲スル者ハ其紙幣並ニ紙幣ノ高ヲ記載シタル交換願書ヲ其地方ノ管廳ニ差出スヘシ

第七條 地方管廳ニ於テハ紙幣ト願書トヲ受取リ其受領証ヲ製シテ本人ニ渡シ其紙幣ヲ大藏省出納局若クハ其出張所ニ納付シ其預リ証ト共ニ金札引換公債証書申請書ヲ大藏省國債局ニ送付スヘシ

第八條 交換願書ヲ差出シタル者ニ地方管廳ヨリ其受領証ヲ交付スルコト各月十五日以前ナレハ其月十六日以後ナレハ其翌月ヨリ計算シテ其年利ヲ拂渡スヘシ

第九條 國債局ニ於テハ申請書ニ據リ其金高ニ相當スル公債證書ノ番號記號枚數ヲ定メ其債主ノ住所姓名ヲ簿冊ニ登記シ並ニ割印シタル上ニテ其證書ヲ各債主ノ地方管廳ヘ送達スヘシ

第十條 地方管廳ニ於テハ其債主ノ住所姓名及ヒ證書ノ金高種類枚數番號記號ヲ公債掛リノ簿冊ニ登記シ及ヒ證書裏面ノ右側ヘ債主ノ姓名ヲ記入シ且ツ管廳ノ割印ヲ加ヘ本人ヘ渡置キタル受領證ト引換ヘシ證書ヲ交付スヘシ

但シ證書交付ノ後ト他管ニ移轉シ若クハ他管ヨリ移轉シ來ルモノハ其出入増減表ヲ製シ每翌月五日マテニ大藏省國債局ニ届ケ出ツヘシ

第十一條 公債證書ト引換ヘタル受領證ノ裏面ニ本人ヲシテ證書ノ受取ヲ記サシメ翌月五日マテニ之レヲ取纏メ明細表ヲ添ヘ大藏省國債局ヘ送致スヘシ

第四章 證書ノ様式及ヒ賣渡讓渡ノ手續

第十二條 此條例頒布以後ト雖モ金札引換公債證書ハ従前ノ金札引換公債證書無記名利札付ノ様式ヲ用ヒ不要矛盾ノ文字ハ朱書ヲ以テ點竄スヘシ

第十三條 金札引換公債證書ノ所有者ニ於テ始メテ之レヲ他人(外國人ヲ除ク)ヘ賣渡シ若クハ讓渡サントスル片ハ其證書ヲ其地方管廳ヘ差出シテ繼足紙ヲ請願スヘシ管廳ニ於テハ新舊公債證書ニ用フル繼足紙ヲ該證書ノ左側ニ糊付繼印シテ請願人ニ

下付ノ名前書替ノ手續ヲ爲サシメタル上其檢印ヲ取計フヘシ

但シ利息渡方混淆セサル爲メ毎年四月一日ヨリ五月十五日マテ十月一日ヨリ十一月十五日マテ證書ノ讓渡シ賣買ノ届出ヲ見合スヘシ

第十四條 此條例頒布以前交付シタル金札引換公債證書ハ記名無記名ノ分共改定ノ證書ト引換コヘシ

第十五條 凡ソ此條例ニ明文ナキ事件ハ都テ明治八年五月第九十五號布告改正新舊公債證書發行條例第四條ヨリ第十二條マテ及ヒ右ニ關シ爾來改正増補ノケ條ニ準據スヘシ

○第七款 起業公債證書發行條例 明治十一年五月大藏省 甲第十三號布達

今般内國債募集ノ儀ニ付本年(四月)太政官第七號布告ノ旨趣ニ因リ起業公債證書發行條例別冊ノ通り相定メ施行セシメ候條此旨布達候事

起業公債證書發行條例

此公債ハ明治十一年(四月)太政官第七號布告ノ旨趣ニ基ツキ要領ノ金額ヲ募集スル爲メ起ス所ニシテ是ヲ大日本政府ノ公債トシテ各債主ヘハ此公債証書ヲ交付シ年限ヲ定メテ之ヲ償却スルニ付大藏省ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

第一類 行政法 起業公債證書發行條例

第二條 (公債証書ノ元高種類並ニ利息ノ制限ヲ示ス)

第一節 此公債ノ元高ハ壹千貳百五十萬圓ニシテ年六分(百分ノ六)ノ利付トシ其元金ハ二箇年間据置キ三ヶ年目(即チ明治十三年ヨリ向二十三箇年ヲ限リ)即チ明治三十五年迄(每年大藏省ノ都合ヲ以テ(第四條ニ掲クル)抽籤ノ方法ヲ用ヒ之ヲ拂戻スヘシ)而シ其利息ハ(第三條第二節ノ但書並ニ第四節ノ分ヲ除キ)募金拂込ニ皆濟ノ後ヨリ明治三十五年迄毎年六月十二月ノ兩度ニ之ヲ拂渡スヘシ(本文金額ハ都テ大藏省ノ都合ニ依リ金銀貨又ハ紙幣ヲ以テ之ヲ下渡スヘシ)

但明治十三年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻スニ當テハ年六分ノ利息月割(抽籤十五日以前ニ係ルハ前月迄ノ分十六日以後ニ係ルハ半ヶ月分下渡スヘキモノトス)ヲ以テ右抽籤法ヲ行ヒシ片迄ノ分下渡スヘシ

第二節 此公債証書面ノ金高ヲ五百圓百圓五十圓ノ三種ニ區別シ利息ノ小札付トス但本文ノ利札ハ每半年利息渡ノ片ニ其渡方ヲ取扱フ銀行等ニテ切り引換ニ其金額ヲ得ヘキモノトス

第二條 公債証書授受買賣等ノトチ示ス

第一節 此公債証書ハ(第六條ニ掲クル記名ニ變改スル分ヲ除キ)所有主ノ名ヲ記サス故ニ書換又ハ管廳ノ捺印ヲ受クル等ノ手續ナクシテ授受買賣等(外國人ヲ除クノ外)

各自ノ隨意タルヘシ

但質入書入(外國人ヲ除キ)及ヒ相續人ヘノ遺物モ勝手タルヘシ

第三條 (募債並ニ出金等ノ手續概略ヲ示ス)

第一節 此公債ノ募集方並ニ元金ノ渡方ハ都テ第一國立銀行並ニ三井銀行ヘ委任シテ取扱ハシムルカ故ニ申込ノ手續引受ノ實高期限場所及ヒ利息並ニ元金ノ渡方其他必要ノ件々ハ右兩銀行本店若クハ支店及ヒ其取引仲間等ヨリ進テ新聞紙等ヲ以テ廣告ニ及フ可シ

第二節 募リニ應シ出金スルノ時期ハ都合四度ト定メ最初引受方申込ノ節手付金ヲ拂込マシメ其後ハ第一第二第三ト割合ヲ以テ順次ニ出金セシムルモノトシ其時日ハ右兩銀行等ヨリ廣告ス可シ

△(明治十一年七月大藏省甲第二十三號布達但書改正)
但第三割拂マテノ利息ハ其出金高ニ準シ年六分ノ割合ナル月割ヲ以テ之ヲ拂渡ス可シ

第三節 右四度ノ内手附金拂込ノ節ハ該銀行ノ受取書ヲ與ヘ第一割拂ノ拂込ニハ右受取書ト引換ニ假証券ヲ與ヘ第二割拂ニハ新假證券ヲ以テ舊假證券ト取換ヘ第三割拂ノ拂込濟ニ至リ此公債証書ヲ假証券ト引換ニ交付ス可シ

第一類 行政法 起業公債証書發行條例

但シ公債證書ノ種類ハ大藏省ノ都合ニ依リ之レヲ交付ス可シ

第四節 (明治十一年七月大藏省甲第二十三號布告第二節但書拂込十五日云々)ノ四字ヲ本節月割ノ下ニ移ス) 手付金又ハ第一第二第三割拂ノ拂込金トモ都テ其定期ノ時日ニ先ツテ入金スル者ヘハ其高ニ對シ年六分ノ割合ナル利息月割(拂込十五日以前ニ係ルハ半々月分十六日以後ニ係ルハ翌月ノ分ニ立テ、計算スルモノトス)ヲ以テ入金ノ内ヨリ割引シテ債主ヘ拂渡ス可シ

第五節 右ノ如ク四度ニ配賦シテ拂込マシムルコト付テハ若シ初度ノ手付金相濟ス更ニ第一割拂若クハ第二第三割拂出金ノ定期ヲ愆マツ者ハ其以前差出シタル金額ハ當人ノ損失ニ販セシメテ返與セサルヘシ

第六節 出金未タ皆濟ニ至ラス此公債證書ヲ受取ラサル以前タリトモ當人ノ都合ニ依リ第一割拂ヨリ交付シタル假證券ヲ授受買賣質入書入ニスルハ(外國人ヲ除ク)ノ外勝手タルヘシ尤モ授受買賣ノ節ハ其證券ノ裏面ニ讓渡人(又ハ賣主)ノ姓名住所ト讓受人(又ハ買主)ノ姓名住所トヲ記載シ且ツ調印スルモノトス

但シ此讓受人(又ハ買主)ニテ其次ノ割拂出金ヲ愆期スル片ハ本條第五節ノ通タル可シ

第七節 若シ申込ノ出金高募集ス可キ見込高ヨリ超過スル片ハ該銀行ニテ之レヲ總体

ノ申込高ニ割付ケテ平等ニ減却シ而シテ其手付金ノ過剩トナル分ハ第一割拂ノ拂込金ニ廻スヘシ尤モ其時ノ都合ニ依テハ別ニ適宜ノ方法ヲ設ケテ之ヲ減却スルコトモアル可シ

第四條 (抽籤ノ手續概要ヲ示ス)

第一節 毎年抽籤ヲ以テ此公債ノ拂戻ヲ定ムルニハ此公債ヲ取扱フ銀行本店ニ於テ其年ノ十月中該地方身柄ノ人ニテ此公債證書(無記名記名トモ)ヲ所持スル者五人以上ヲ撰ミ大藏省國債局ノ官員ト其地方廳ノ官員各兩名以上立會ノ上抽籤ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ證書ノ記號番號ヲ公定シ中リ籤ノ記號番號ハ速ニ新聞紙等ヲ以テ廣告スヘシ

第五條 (證書ノ毀損紛失盜難流焼失等ノ心得方ヲ示ス) (圈點ノ七字ハ明治十

三號布 一年大藏省甲第二十

第一節 此公債證書ハ自然垢付或ハ少々ノ毀損等アルモ金高及ヒ主要ノ印部等ニ損害ナク正真ノ證書タルヲ保認スヘキ分ハ當然ノ規則ニ隨ヒ元利金ノ渡方ヲ爲ス可シ尤モ過失ニテ此公債證書ノ一部分ヲ燒損シ又ハ金高及ヒ主要ノ印部等ヲ毀損シ或ハ之ヲ見認メ難キ程ノ墨附等アレハ速ニ其手續書ヲ添ヘテ兩銀行ノ本店又ハ大阪ニ在ル支店ニ持參シテ引換ヲ乞フヘシ兩銀行ハ其事實ヲ承明シテ後々之ヲ大藏省ヘ具申シ

第一類 行政法 起業公債證書發行條例

テ此引換ヲ爲スヘシ尤モ大藏省ニ於テハ其事實ハ勿論該證書面ニ金高番記號ノ部分
必ス判然存在シ眞正ノ證書ニ相違ナシト見認ムル分ハ之カ引換ヲ爲ス可シ

但此引換ヲ乞フコトハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ヘ拂フヘシ

△(明治十一年七月大藏省甲第二十三號布達第三節追加)

第二節 此公債證書紛失盜難又ハ流焼失ニ罹ル分ハ所有主ニ於テ其事實ヲ審明シ證書

ノ記號番號金高枚數及ヒ所有トナリシ片ノ手續等詳細相認メ地方管廳ヲ經テ大藏省

ニ届出置キ償却年限ノ末期ニ至ル迄該證書終ニ顯出致サス全ク消滅セシニ相違ナキ

ニ於テハ該證書ニ對シテ積リタル利息元金トモ一同ニ之レヲ拂渡スヘシ

第三節 前節届出ノ後テ該證書顯出シ而シテ未ダ犯罪人ノ手ニ在ルカ或ハ犯罪ノ情ヲ

知リ轉受セシモノカ或ハ情ヲ知ラストモ恩惠(貨幣又ハ物品ヲ渡サスニテ受取ルノ

類)ノ讓與ニ係ルモノハ原所有主ニ於テ之ヲ取戻スヲ得ヘシ

但前二節ノ場合ニ於テ事實判明致シ難キ片ハ都テ法官ノ裁決ニ付テ相當ノ處分ニ

及フコトアルヘシ

第六條 (記名公債證書ニ變改スル手續並ニ變改セシ以後ノ規則ヲ示ス)

第一節 此公債證書ハ授受買賣等ヲ便ニスル爲メ本來無記名ナレド所有主ノ請願ニ依

リテハ之ヲ變改シテ更ニ記名証書ト爲スヲ得ヘシ其變改ノ手續並ニ規則等ハ左ノ

如シ

第二節 無記名證書ヲ記名ニ變改スルコトハ證書ヲ引換ユルニ非ラス又證書本紙ニ記名

スルニ非ラスコト本條第四節ノ取扱ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス

第三節 右記名ヲ請願スルニハ第三條最後出金ノ定期ヨリ七八十日乃至五六十日以前

ニ其旨ヲ此公債ヲ取扱フ兩銀行ノ本支店若クハ取引仲間等ニ申込ムヘシ右銀行ハ(

支店並ニ取引仲間等ニ申込ミタル分ハ之ヲ取纏メ)請願人ノ姓名住所並ニ入用證書

ノ金高等ヲ詳記シ大藏省ヘ具申シ記名極印濟ミシ證書ヲ(記名紙相添ヘ)受取リ之ヲ

其本人ヘ交付シ本人ヨリ更ニ之ヲ管廳ヘ持出テ記名其他次節ノ手續ヲ受クヘシ

第四節 前節ノ如ク大藏省ヘ具申ノ上ハ同省ニ於テ該證書ニ記名タル極印ヲ押シ之ヲ

簿冊ニ登記シ置キ再ヒ之ヲ其銀行ニ送付シテ其本人ヘ交付シ本人ヨリ管廳ヘ持出ル

モノトス管廳ニテハ該證書ノ種類金高記號番號枚數及ヒ所有主ノ姓名住所年月日等

ヲ簿冊ニ登記シ該證書ニ記名紙ヲ糊附シ該廳ノ繼印ヲ爲シ所有主ノ姓名住所ヲ記入

シ該廳ノ割印及ヒ公債掛ノ捺印ヲ捺シテ再ヒ之ヲ所有主ヘ付與ス可シ

但一旦無記名證書ヲ引受ケ置キ追テ記名ニ改メント欲スル者ハ該證書ニ其種類金

高記號番號枚數目録書及ヒ願書ヲ添ヘ管廳ヘ申立ツヘシ管廳ヨリハ願人ヘ證書

ノ受取書ヲ渡シ置キ之ヲ大藏省ヘ具申シ極印濟ミシ證書並ニ記名紙ヲ受取リ成規

第一類 行政法 起業公債證書發行條例

ノ如ク再ヒ之ヲ其本人ヘ付與スルノ手續ヲ爲スモノトス尤モ記名紙ハ地方官ノ見込ヲ以テ豫メ之ヲ大藏省ヨリ受取リ置クモ適宜ナルヘシ

第五節 前節ノ如ク無記名證書ヲ記名証書ニ變改シタル上ハ之ヲ授受買賣シ或ハ引當物ニ爲シ又ハ紛失盜難及ヒ流失等ノ虞ハ明治八年(五月)太政官第九十五號布告改正新舊公債證書發行條例第六條第七條第八條第九條第十條ヲ適用スヘシ尤右條例ヲ此記名公債證書ニ適用スル場合ニ於テハ右條例中換用ノ文字並ニ不用ノ廉々左ノ如シ但シ元利金渡方等ノ手續ハ無記名公債證書ト同様ナルモノトス

右條例第六條ヨリ第十條迄ノ中ニ「新舊公債證書共」並ニ「新舊公債證書」トアルハ都テ「此記名公債證書」ト改ム

同第六條第一節但書ノ「其都度大藏省ヘ届出可シ」ヲ「置ク可シ」ニ改ム

同條第二節ニ「證書裏面ヘ形ノ通り(裏面離形)及ヒ同條第三節ノ「證書裏面ヘ形ノ如ク(裏面離形)」ハ都テ「記名紙ノ末ニ附スル離形ノ通り」ト改ム

同條第三節ト「大藏省ヘハ云々」ノ十五字ヲ置クヘシニ改ム

同條第四節ノ但書ヲ削除ス

同條第五節並ニ第七節第八節ノ「證書」訂印」ハ都テ「記名紙」訂印」ニ改ム

同條第七節ノ「且大藏省ヘハ一月分翌月五日迄ニ云々」ノ廿七字ハ不用同條第九節ノ

「就テハ年々元利金云々」ノ十八ヲ「尤モ年々元利金拂方ハ此公債ヲ取扱フ銀行等ニテ拂渡スヘシ」ニ改ム

同條第十節ノ「年々元利拂及」ノ六字並ニ「年々元利受取或ハ」ト兩所ニ在ル都合十六字及ヒ第十二節ヲ削除ス

同條同節中ノ「前條」ヲ「第七節」ニ改ム

同第七條第一節ノ「其所持人ヘ下渡スヘシ云々」ノ四十七字ヲ「何人タリトモ其持參人ヘ(外國人ヲ除ク外)相渡スヘシ」ニ改ム

同第八條割註廿二字ヲ「此公債證書記名紙繼足ノ手續ヲ改明ニス」ニ改ム

同條第一節「裏面記名ノ場所」ヲ「記名紙ノ餘粹」ニ改メ「證書ノ繼足」ヲ「記名紙ノ繼足」ニ改ム

同第九條第一節ノ但書ヲ削除ス

同條第二節ノ「地官官廳ニテハ即右ノ旨ヲ云々」ノ六十三字ヲ削除ス

同條第三節ノ「公布」ヲ「布達」ニ改ム

同條第四節ノ「元利」ヲ「利金」ニ改ム

第七條 (證書贗造等ノ處分ヲ示ス)

第一節 此公債證書(無記名記名トモ)ヲ私ニ剥去リ又ハ切裂キ又ハ塗抹シ孔ヲ穿テ糊

付ニスル等ノ事ヲ爲ス可カラス若シ犯ス者アレハ裁判ノ上其金高十倍以下ノ罰金ヲ命スヘシ

第二節 此證書ヲ贗造シ又ハ入テシテ贗造セシメ又ハ人ノ贗造スルヲ助ケ又ハ贗造ト知リテ通用シ又ハ證書ノ圖畫文字ヲ變換シ又ハ人ヲシテ變換セシメ又ハ變換セシ者ト知テ之ヲ通用シ其他似寄ノ板版紙品等ヲ所持スル者ハ都テ裁判ノ上法ニ處スヘシ

第八條

第一節 政府ノ都合ニ依リ要用ノアレハ利息及ヒ償却年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補シ又ハ之ヲ改正スヘシ

第二節 右增補改正アル片ハ速ニ其旨趣ヲ公告スヘシ

明治十一年五月

大藏省

○第八款 中山道鐵道公債證書條例 明治十六年十二月 第四十七號布告

中山道鐵道公債證書條例左ノ通制定ス

第一條 中山道鐵道公債證書ハ群馬縣下上野國高崎ヨリ岐阜縣下美濃國大垣ニ至ルヤテ中山道ニ沿ヒ及ヒ大垣ヨリ三重縣下伊勢國四日市ニ至ルマデ鐵道ヲ敷設シ及ヒ其

事業ヲ經營スルノ資金ニ充ツルカ爲メ發行スルモノトス(本條中國點ノ廿一字明治十七年第十七號布告追加)

第二條 此公債證書發行高ハ二千万圓ヲ限リ大藏卿工業ノ都合ヲ計リ漸次之ヲ發行スルコトヲ得其發行ノ手續ハ大藏卿時々之ヲ定ムルモノトス

第三條 此公債證書ハ無記名利札附ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス

第四條 此公債ノ利子ハ年七分トス

第五條 此公債證書引受ノ申込高ハ大藏卿ノ需用スル金高ヨリ超過スル片ハ其超過高ニ比例シ各申込入ヘ對シ證書渡高ヲ減少スルモノトス但價格ヲ定メテ發行シタル場合ニ於テ其價格以上ニテ申込ム者ハ其渡高ヲ減少セサルヘシ其價格ハ大藏卿之ヲ定ムルモノトス

第六條 此公債證書ノ見本ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第七條 此公債證書ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五ヶ年据置其翌年ヨリ向フ二十五ヶ年ヲ限リ毎年抽籤法ヲ以テ償還スヘシ但償還ノ金高ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ六十日以

前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

此公債ノ利子ハ元金償還ニ至ルマテ毎年六月十二月ノ兩度ニ拂渡スモノトス但元金

ヲ償還スルトキハ月割ヲ以テ右抽籤ヲ行フ月マテノ利子ヲ拂渡スヘシ

滿期ニ至リ償還ノ證書ニ屬スル利子ハ償還ノ月マテノ分ヲ拂渡スモノトス

第一類 行政法 中山道鐵道公債證書條例

六百二十九

此公債ノ元利金額ハ總テ通貨ヲ以テ任拂フモノトス

第八條 此公債ノ利子ハ其元金拂込ノ日ニ從ヒ各月十五日前後ヲ以テ區別シ十五日以前ナレハ其下半年分ヨリ十六日以後ナレハ其翌月分ヨリ拂渡スモノトス

第九條 此公債ノ元金償還利子拂渡ノ事務ハ總テ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ其時期及ヒ場所等ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十條 此公債ノ利子ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ利札ヲ切取リ之ト引換ニ拂渡スヘシ

第十一條 此公債證書ハ何人ニテモ授受買賣スルコトヲ得

第十二條 此公債ノ元金償還ノトキハ日本銀行ニ於テ抽籤配賦計算ノ割合ヲ定メ東京横濱居住人ニテ此公債證書ヲ多額所持スルモノ十名以上并大藏省國債記録兩局ノ官員五名以上立會ノ上抽籤ヲ執行シ其當籤證書ノ記號番號種類金高等ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十三條 此公債證書ノ所有者其證書ヲ亡失セントキハ其事由并證書面ノ金高記號番號及所有セントキノ手續ヲ詳記シ其亡失セントキ地ノ管廳ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其證書ヲ授受買賣ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同條

ノ手續ヲ以テ届出スヘシ

第十四條 此公債證書當籤ト爲リ元金ヲ拂渡スヘキ場合ニ於テ其證書ノ亡失セントキト覺知シタルトキハ其當籤ノ効ヲ失フモノトス

第十五條 此公債證書汚染又ハ毀損セントキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ證書ノ引換ヲ大藏省ヘ請求スヘシ但其證書面金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ檢査シ其真正ナルヲ證認シ得ヘキモノニアラサレハ引換サルヘシ此引換ヲ得タルモノハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ヘ拂フヘシ

第十六條 此公債證書引換又ハ償還ノトキ其證書汚染毀損シ金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ認メ難キモノハ其元利金トモ償還方總テ亡失證書ト同一タルヘシ

第十七條 此公債ノ元利金受取方申立テス其拂期月ヨリ滿十五ケ年ヲ過ルトキハ一切之ヲ償還セサルヘシ

第十八條 政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除ク外此條例ヲ增補改正スルコトアルヘシ

○第九款 金札引換無記名公債證書條例

明治十六年十二月
第四十八號佈告

第一類 行政法 金札引換無記名公債證書條例

金札引換無記名公債證書條例左ノ通制定シ明治十三年(十月)第四十七號布告金札引換公債條例第三條ヲ停止ス

金札引換無記名公債證書條例

第一條 金札引換無記名公債證書ハ政府發行ノ紙幣ヲ交換支消スル爲メ發行シ其元利金共銀貨ヲ以テ仕拂フモノトス

此公債證書ト交換シタル紙幣ハ大藏省ニ於テ之ヲ燒却スルモノトス

第二條 此公債證書ハ望人ノ申込ニ任セ大藏卿臨時之ヲ發行スルモノトス但大藏卿ハ財政ノ都合ヲ計リ其申込ヲ拒ムコトアルヘシ

第三條 此公債證書ハ無記名利札付ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス

第四條 此公債ノ利子ハ年六分トス

第五條 此公債證書ハ證書額面百圓ニ付發行價格紙幣百圓ト定ム此證書ヲ引受ケンコトヲ望ムモノハ隨時日本銀行本支店又ハ代理店ヘ申出ヘシ

第六條 此公債證書ノ見本ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第七條 此公債ノ元金ハ其證書交付ノ年ヨリ五ヶ年据置其翌年ヨリ向フ三十ヶ年ヲ限リ毎年抽籤法ヲ以テ償還スルヘシ但償還ノ金高ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ六十日以前ヨリ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

此公債ノ利子ハ元金償還マ至ルマテ毎年五月十一月ノ兩度ニ拂渡スモノトス但元金

ヲ償還スルトキハ月割ヲ以テ右抽籤ヲ行フ月ヨリ利子ヲ拂渡スヘシ但償還ノ期ニ至リ償還ノ證書ニ屬スル利子ハ償還ノ月マテノ分ヲ拂渡スモノトス

第八條 此公債ノ利子ハ其元金拂還ノ日ヨリ從ヒ各月十五日前後ヲ以テ區別シ十五日以前ナレハ其下半月分ヨリ十六日以後ナレハ其翌月分ヨリ拂渡スモノトス

第九條 此公債ノ元金償還利子拂渡ノ事務ハ總テ日本銀行ヲマテ之ヲ取扱ハシムヘシ其時期及場所等ハ抽籤ノ日ヨリ少クトモ三十日以前ニ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十條 此公債ノ利子ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ利札ヲ切取り之ト引換ニ拂渡スヘシ

第十一條 此公債證書ハ何人ニテモ授受買賣スルコトヲ得

第十二條 此公債ノ元金償還ノトキハ日本銀行ニ於テ抽籤配賦計算ノ割合ヲ定メ東京横濱居住人ニテ此公債證書ヲ多額所持スル者拾名以上并大藏省國債記録兩局ノ官員五名以上立會ノ上抽籤ヲ執行シ其當籤證書ノ記號番號種類金高等ハ大藏卿ヨリ告示スルモノトス

第十三條 此公債證書ノ所有者其證書ヲ亡失セシトキハ其事由并證書面ノ金高記號番號及所有セシトキノ手續ヲ詳記シ其亡失セシ地ノ官廳ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏

卿ハ其證書ノ授受買賣ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ

亡失ノ證書ヲ發見セシメ其償還年限ノ末期ニ至リ證書消滅セント認ムヘキ場合ニ於テハ該證書ノ元利金額ヲ其届出人ヘ拂渡スヘシ

第十四條 此公債證書當籤ト爲リ元金ヲ拂渡スヘキ場合ニ於テ其證書ノ亡失セシコトヲ覺知シタルトキハ其當籤ノ効ヲ失フモノトス

第十五條 此公債證書汚染又ハ毀損セントキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ證書ノ引換ヲ大藏省ヘ請求スヘシ但其證書面金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ檢査シ其真正ナルヲ証認シ得ヘキモノニアラザレハ引換サルヘシ此引換ヲ得タルモノハ本人ヨリ相當ノ手数料ヲ銀行ヘ拂フヘシ

第十六條 此公債證書引換又ハ償還ノトキ其證書汚染毀損シ金高記號番號及大藏卿ノ印章ヲ認シ難キモノハ其元利金トモ償還方總テ亡失證書ト同一タルヘシ

第十七條 此公債ノ元利金受取方申出テス其拂期月ヨリ滿十五ケ年ヲ過クルトキハ一切之ヲ償還セサルヘシ

第十八條 政府ノ都合ニ依リ要用ノ事アレハ利子ノ割合及元金償還年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補改正スルコトアルヘシ

右奉 勅旨布告候事

○第十款 公債証書亡失取扱手續 明治十七年四月 大藏省第廿三號達

凡公債証書亡失ニ關スル告示ハ急速ヲ要スルモノニ付本年四月第四十八號告示ニ據リ亡失ノ届出アル片其取扱手續左ノ通り之ヲ定ム

公債証書亡失ニ關スル取扱手續

- 第一條 他管廳所轄ノ証書亡失ノ届出アル片ハ本管廳所轄ノ證書同一ノ取扱ヲ以テ該届出ヲ受理シ其旨速ニ管内ヘ告示シ詳細書ヲ以テ同時ニ大藏省ヘ届出且證書所轄廳ヘ通知スヘシ
- 第二條 前條ノ場合ニ在リテ證書所轄廳ヨリ亡失地ノ管廳ヘ證書ノ送達書己ニ到達シアレハ所持人ノ届書ヲ該送達書ニ照シ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ
- 第三條 証書所轄廳ノ送達書未タ亡失地ノ管廳ヘ到達セシテ證書ノ種類記號番號金高枚數及ヒ記名等證明シ難キ片ハ届出人ヨリ實際取引授受ノ証據物或ハ手記等ノ如キ書類ヲ提出セシメ左ニ掲載スル各項ニ據リテ篤ト取糺シ相違ナキモノト認定シ得ル證憑アルモノハ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

一 證書ノ所轄廳

第一號 行政法 公債証書亡失取扱手續

二 證書ノ種類記號番號金高枚數
 三 前(記名所有)者ノ氏名族籍住所
 四 讓渡賣渡等ニ關スル取引授受ノ證據物若クハ證據物無之トキハ其年月日並授受取引ノ場所及ヒ因由
 五 利賦札截斷現金交換濟之分何年月渡リ迄ノ分界
 第四條 證書所轉應ヘ往復セザレハ證書ノ種類記號番號金高枚數及ヒ記名等證明シ難キ片ハ直ニ證書所轉應ヘ照會シ確報ヲ得テ第二証ノ手續ヲ爲スヘシ
 第五條 無記名公債證書亡失シタル片モ亦第一條ノ如ク管内ヘ告示ヲ爲シ大藏省ヘ届出ツヘシ
 右相達候事

○第十一款 公債證書亡失ノ節 届方

明治十七年四月大藏省第四十八號告示

公債證書所有者其所有ノ公債證書ヲ亡失シタル片ハ明治八年五月第九十五號布告新舊公債證書發行條例第九條第一節第十條第一節ニ據リ届出ツヘキノ處公債證書亡失ニ關スル告示ハ急速ニ要スルモノキ付自今他管應所轉シ證書所離レ左ノ場合ニ於テハ其亡失地ノ管應ヘ直ニ届出ツルヲ得「轉籍寄留ノ爲メ他ノ管下ヘ携帶其地管應割印又ハ

押印未濟ニ至リテ亡失シタル時」自己ノ都合ニ依リ公債證書ヲ他管下ヘ携帶又ハ地管下ノ者ハ買入若クハ預ケタル等ノモノヲ亡失シタル時他管下ノ人民ニシテ旅行滯在中其地管應所轉シ公債證書ヲ讓渡買受等ヲ爲シ猶旅中ノ故チ以テ其地管應割印又ハ押印未濟ノモノヲ亡失シタル時
 右告示候事

○第廿四章 証券印紙

○第一款 証券印稅規則

明治十七年五月第十一號布告

明治七年(七月)第八十一號布告証券印稅規則別冊ノ通改正シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

但明治八年七月第百貳十號布告ハ同日ヨリ廢止ス
 右奉 勅旨布告候事

証券印稅規則

第一條 凡ソ財産ノ授受及ヒ契約ノ証明ニ用スル證書帳簿ハ此規則ニ循ヒ印紙ヲ貼用スヘシ
 第二條 證書帳簿ヲ分テ二類ト爲シ其稅率ハ左ノ如シ

第一類 行政法 証券印稅規則

第二類

左ニ掲クル所ノ證書帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラヌ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用ス
 一 但當座預リ金引出小切手ハ大藏省ニ税印ノ押捺ヲ請フコトヲ得
 一 當座預リ金引出小切手 印税 五厘
 一 委任狀 同 五厘
 一 金高記載ナキ約定證文 同 壹錢
 一 遺物證文 同 壹錢
 一 跡式讓證文 同 壹錢
 一 譲與證文 同 壹錢
 一 期限ヲ定メサル預リ金證文 同 壹錢
 一 耕地小作證文 同 壹錢
 一 雇入請合狀 同 壹錢
 一 金高記載ナキ諸物品預リ證文 同 壹錢
 一 金高記載ナキ諸物借用證文 同 壹錢
 一 地所預リ證文 同 壹錢
 一 家屋預リ證文 同 壹錢
 一 諸物品切手 同 壹錢

借地證文 同 壹錢
 一 買賣仕切書 同 壹錢
 一 保險證文 同 壹錢
 一 諸會社株券 同 壹錢
 一 送金手形 同 壹錢
 一 金錢通帳 同 壹錢
 一 諸物品 同 壹錢
 一 金錢判取帳 同 貳拾錢
 一 諸物品 同 壹錢
 一 結社約定書 同 壹錢
 但結社約定書ニ金圓授受貸借ニ係ル條項アリテ之カ効力ヲ確定スル證書帳簿ハ
 金高記載ナシト雖モ第二類金高記載アル諸般ノ契約證書ニ準シ印紙ヲ貼用スヘシ
 左ニ掲クル所ノ證書ハ金高五圓以上ノモノニ限リ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 一 營業ニ關スル送狀 印税 壹錢
 一 營業ニ關スル請取書 同 壹錢
 右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 第二類

第一類 行政法 證券印稅規則

右ニ掲クル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲替手形約束手形用紙ヲ用フヘシ

- 一金錢借用證文
 - 一 地所 賣買證文
 - 一 家屋 賣買證文
 - 一金高記載アル諸物品預リ證文
 - 一金高記載アル諸物品借用證文
 - 一 諸物品 賣買證文
 - 一金錢定期預リ證文
 - 一金高記載アル諸般ノ契約證書
- | | |
|----------------|-------|
| 金高壹圓以上貳拾圓未滿 | 印稅壹錢 |
| 金高貳拾圓以上五拾圓未滿 | 同 貳錢 |
| 金高五拾圓以上百圓未滿 | 同 四錢 |
| 金高百圓以上百五十拾圓未滿 | 同 六錢 |
| 金高百五十拾圓以上貳百圓未滿 | 同 八錢 |
| 金高貳百圓以上三百圓未滿 | 同 拾壹錢 |
| 金高三百圓以上四百圓未滿 | 同 拾四錢 |

- | | |
|----------------|--------|
| 金高四百圓以上六百圓未滿 | 同 貳拾錢 |
| 金高六百圓以上八百圓未滿 | 同 貳拾六錢 |
| 金高八百圓以上千圓未滿 | 同 三拾貳錢 |
| 金高千圓以上千四百圓未滿 | 同 三拾八錢 |
| 金高千四百圓以上千七百圓未滿 | 同 四拾四錢 |
| 金高千七百圓以上貳千圓未滿 | 同 五拾錢 |
| 金高貳千圓以上貳千五百圓未滿 | 同 六拾錢 |
| 金高貳千五百圓以上三千圓未滿 | 同 七拾錢 |
| 金高三千圓以上三千五百圓未滿 | 同 八拾錢 |
| 金高三千五百圓以上四千圓未滿 | 同 九拾錢 |
| 金高四千圓以上 | 同 壹圓 |
- 右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 金高百圓未滿 印紙 四錢
- 金高百圓以上總テ諸證書稅率ニ據ルヘシ
- 一金錢當座預リ證文

第一類 行政法 證券印稅規則

一 買物預り書	
金高壹圓以上貳拾圓未滿	印稅 壹錢
金高貳拾圓以上	同 貳錢
右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘ	
金高百圓未滿	印紙 貳錢
金高百圓以上	同 四錢
一 爲替手形	
一 荷爲替手形	
一 約束手形	
金高五拾圓未滿	印稅 壹錢
金高五拾圓以上百圓未滿	同 貳錢
金高百圓以上貳百圓未滿	同 四錢
金高貳百圓以上五百圓未滿	同 八錢
金高五百圓以上千圓未滿	同 拾五錢
金高千圓以上貳千圓未滿	同 貳拾五錢

金高貳千圓以上

同 五拾錢

第三條 前條ニ掲クル所ノ證書帳簿ト効用ヲ同フスルモノハ其名稱ニ拘ハラズ稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第四條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循ヒ印紙ヲ貼用セサルモノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰ヲ受クル後印紙ヲ貼用シタルモノハ此限ニ在ラス

第五條 印紙ハ證書ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ證書ハ授受ノ前帳簿ハ使用ノ前ニ貼用シ證書帳簿記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ證書帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ消印スヘシ

第六條 印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

△(明治十七年六月第十六號布達)

本年五月第十一號証券印稅規則改正布告中當座預リ金引出シ小切手へ押捺スヘキ稅印并ニ同年同月第十二號ヲ以テ及布達候証券印紙及手形用紙ハ別紙見本ノ通トス

(見本畧ス)

右布達候事

第七條 印紙及ヒ手形用紙ハ官ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ非カレハ之ヲ賣捌クコトヲ得ス

第一類 行政法 證券印稅規則

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り状ハ主任官之ヲ検査スルコトアルヘシ

第九條 左ニ掲クル所ノ證書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セス

一 官廳ヨリ差出ス證書帳簿

一 官吏准官吏若クハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタル議員若クハ公立學校病院ニ從事
スルモノ各其職務ニ依テ用フル證書

一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ差出ス預リ金ニ對スル抵當證書

一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ對シタル諸上納金ノ預リ證書帳簿

一 金員記載アル官廳ヨリノ命令書ニ對シ國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ差出ス請書

一 諸上納金ニ付國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ納人へ差出ス請取証書

一 罹災救助金献金寄付金ニ關シ人民ヨリ官廳ニ差出ス證書

第十條 第二類ノ帳簿ハ初丁へ附込見積金高及ヒ使用期限紙數ヲ記載スヘシ
但物品ノ授受ニ關スルモノハ其代價ヲ記載スヘシ

第十一條 證書帳簿ニ稅率ノ異ナルモノヲ雜記スルトキハ各相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 紙印貼用濟第二類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ滿チタルトキハ其旨該帳
簿ニ記載シ置キ主任官検査ノ節之レニ檢印ヲ受シヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙之ヲ使用セントスルトキハ第十條ノ手續ヲ以テ更

ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高未タ滿チタルカ又ハ使用期限未タ盡キサルニ紙數盡
キタルトキハ更ニ紙數ヲ増加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ
期限ノ側ニ其事由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルトキハ内國ノ貨幣ニ改算シタル
金高ヲ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ證書ハ雙方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副證書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ本證書ト効用ヲ異ニスルモノ若クハ
金高ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ就キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ脱稅ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後證書帳簿ノ受取人ニ於テ相
當ノ印紙ヲ貼用スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若シハ貼用不足スルモノ及ヒ手
形用紙ヲ用ヒス若クハ不足稅ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ脱稅高二十倍ノ科料又ハ
罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以
テ消印シタル者ハ印稅高十倍ノ科料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同

第二十一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ請人證人トシテ加印シタルモノハ各正犯ニ係ル科料罰金ノ半額ニ相當スル科料又ハ罰金ニ處ス

第二十二條 第八條ノ證書帳簿ノ檢査ヲ拒ミタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 前數條ノ罪ヲ犯シタルモノハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

○第二款 證券印紙手形用紙種類定價 明治十七年五月
第十二號布達

今般第十一號布告ヲ以テ證券印稅規則改正條ニ付テハ印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價左ノ通り相定ム

但印紙ハ當分ノ内新舊取交貼用スルコトヲ得

印紙	定價 五厘
赭色	同 壹錢
橙黃色	同 貳錢
黃綠色	同 伍錢
萌黃色	同 拾錢
桔梗色	同 二拾五錢
青色	同 五拾錢
淡黑色	同 壹圓
赤色	定價 壹錢
手形用紙	同 貳錢
老綠色	同 四錢
桔梗色	同 八錢
淡黑色	同 拾五錢
橙黃色	
淡赭色	

第一類 行政法 證券印紙手形用紙種類定價 六百四十七

捌所看板ヲ受ク之ヲ店頭ニ掲クヘシ

第五條 印紙類賣捌所ハ一人一ヶ所ニ限リ許可スルモノトス

第六條 此規程ニ依リ賣捌クヘキ印紙類左ノ如シ

一 證券印紙

一 烟草印紙

一 訴訟用印紙

一 賣藥印紙

第七條 印紙類ハ必ス定價ヲ以テ賣捌クヘク賣捌ノ外讓與貸與スルコトヲ許サス

第八條 印紙類ハ其代金ヲ上納セシメタル後下渡スヘシ

但第一條ノ資格ヲ有スルモノ及ヒ第三條ノ受恩典者ニハ代金五百圓マテ公債證書ヲ抵當トナシ六ヶ月以内之カ延納ヲ許スコトアルヘシ

第九條 印紙賣捌手数料ハ第一條ノ資格ヲ有スル者ニハ賣捌代金高百分ノ十其他ノ者ニハ百分ノ七ヲ給スヘシ

第十條 賣捌人ニシテ左ノ事項ニ該ル者ハ賣捌殘餘ノ印紙類及ヒ賣捌所看板ヲ返納スヘシ此場合ニ於テハ返納印紙ニ對スル既納ノ代金ハ返付シ之ニ對スル當初下渡ノ手

數料ハ返納スヘシ
(明治十七年八月第一號布達改正)

一 思給ヲ受クル權消絶シタル時

一 恩給停止ノ時

一 廢業シタル

一 此規程ニ背キ營業禁止又ハ停止セラレタル時

第十一條 印紙類火災盜難等ノ爲メニ亡失スルモ其代金ノ返付ヲ請求スルコトヲ得ス

但避クヘカラサル事變ニ遭遇シタル者ハ事狀ヲ具シテ處分ヲ乞フヘシ

第十二條 印紙類ノ損傷又ハ汚染シタル時ハ其印紙ニ代金百分ノ五ノ金額ヲ添ヘ印紙交換ヲ請求スルコトヲ得

第十三條 此規程ニ違背シタル者ハ情狀ニ依リ管轄廳ニ於テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトアルヘシ

○第五款 印紙類賣捌規程取扱手續

明治十七年五月
大藏省第廿九號達

府縣沖繩縣
ヲ除ク

本年四月第九號布達印紙類賣捌規程取扱手續左ノ通心得ヘシ

第一項 印紙類ハ府縣長官ノ名印ヲ以テ租稅局長ニ宛テ之ヲ請求スヘシ

第二項 印紙類賣捌看板ニハ住所姓名番號等ヲ記シ從前ノ書式ニ倣ヒ調製ノ上之ヲ下

第一類 行政法

印紙類賣捌規程取扱手續

六百五十三

- 付スヘシニ種類以上賣捌クモノハ各種類チ一枚ニ併記スルモ妨ケナシ
- 第三項 印紙賣捌人改姓名轉居ノ節ハ其旨郡區役所ニ申出サセ看板ニ記載シアル住所姓名ノ書換テ請ハシムヘシ但燒失等ノ節ハ其事由チ詳記シ更ニ看板ノ下渡チ請ハシムヘシ
- 第四項 印紙賣捌人休業スル片ハ規程第十條ニ準據シ賣捌看板チ返納セシムヘシ
- 第五項 府知事縣令ハ規程第二條ニ據リ印紙賣捌人員ヲ定ムルニハ從來賣捌方ノ摸樣等ニ據リ需用者ニ差支ナキ樣之ヲ定ムヘシ
- 第六項 印紙賣捌人員増減ハ一ケ年チ二期ニ分チ別紙雛形ニ倣ヒ増減表チ調製シ七月二十日限リ差立租稅局ヘ送付スヘシ
- 第七項 規程第八條ノ但書ニ據リ延納チ許可スルトキハ其抵當ト爲スヘキ公債證書ノ價格ハ明治十三年乙第一號當省達ニ據テ之ヲ定ムヘシ
- 但延納印紙ノ代金及上納期限チ記シ其時々租稅局出張所ニ通牒スヘシ
- 第八項 印紙額代金延納チ許可シタル片ハ別紙上納受書雛形ニ倣ヒ證書チ差出サシムヘシ
- 第九項 印紙賣捌手数料ハ即納延納トモ印紙代金上納ノ節チ下渡スヘシ
- 第十項 規程第十條ニ據リ返納セシ印紙中代金既納ノモノアルトキハ左ノ區別ニ從ヒ

其代金チ返付スヘシ

- 但返納セシ印紙代金ニ對スル手数料ハ其節チ返納セシムヘシ
- 一代金納付ト印紙返納ト其時日同年度ニ係ルモノハ所在租稅局出張所ヘ照會シ該年度收入金ノ内ヨリ返付シ而シテ稅表皆濟帳トモ其員數チ除却スヘシ
- 一代金納付ト印紙返納ト其時日年度チ異ニスル片ハ別途還付ノ儀當省ヘ稟申シ稅表皆濟帳トモ除去ニ及ハス其返納印紙ハ受排計算表ニ一畫チ設クテ元請ニ立ツヘシ
- 第十一項 規程第十二條ノ損傷又ハ汚染印紙交換ノ際上納セシ代金百分ノ五ノ金額及第十項但書ニ據リ返納セル手数料ノ内最前下渡セン時ト年度チ異ニスルモノハ雜收入ニ編入スヘシ
- 第十二項 印紙賣捌人ハ帳簿チ製シ各種類チ區別シ印紙賣捌高チ記載シ置カシムヘシ但烟草印紙ハ別ニ成規アルチ以テ此限ニアラス

用紙美濃

明治何年分印紙賣捌人員増減表

何 府 縣

第一類 行政法 印紙賣捌規程取扱手續

此金高何圓

內譯

何印何號何番何枚此金高何圓

右之通相違無之候也

年月日

何區何町番地
賣捌人

某

印

右戶長

某

印

他人記名ノ公證債書ヲ借受抵當トスルト
其記名者ノ連署ヲ要スヘシ戶長同斷

○第六款 證券印稅檢査規程

明治十七年九月
大藏省第六十號達

本年(五月)第十一號布告ヲ以テ證券印稅規則改正相成候ニ付右檢査規程左ノ通相定ム
右相違候事

一 證券印稅檢査規程

第一項 府縣收稅官吏ハ明治十七年第十一號布告證券印稅規則第八條ニ記載セル證書

帳簿ノ檢査ヲ行フ

第二項 檢査ヲ分テトシテ定期檢査トシテ臨時檢査トス

第三項 定期檢査ハ毎年四五六ノ三ヶ月間ニ於テ之ヲ行ヒ臨時檢査ハ該檢査ヲ必要ト
スル場合ニ於テ之ヲ行フヘシ

第四項 檢査員ヲ派遣スルニハ府縣管内ヲ數部ニ區畫シ每部其擔當員二名以上ヲ定ム
ヘシ

第五項 檢査員ハ其擔當部内ノ商況戶數及路程ノ遠近ニ應シ一町村若クハ數町村ヲ以
テ一區トシ區内ノ便宜ヲ量リ檢査場ヲ設クヘシ

第六項 檢査員ハ豫メ檢査日割ヲ定メ其日割及前條檢査場ヲ其區内ノ町村ニ告知ス
ヘシ

第七項 臨時檢査ノ節ハ時宜ニヨリ前第五項第六項ノ手續ヲ履行セサルコトアルヘシ

第八項 檢査ハ力メテ便捷ヲ要シ人民ノ營業ニ障害ナキヲ圖ルヘシ

第九項 檢査員檢査ノ要領左ノ如シ
一 證書帳簿上印紙貼用ノ有無當否
一 帳簿見積金高及使用期限紙數記載方ノ有無當否
一 貼用印紙消印ノ有無當否

第一類 行政法 證券印稅檢査規程

ガラム	メートル	グレイ	トロイ	日木
一ミリガラム	一ガラム千分一	〇、〇一五四三	グレイン百分ノ	〇、〇〇〇二六六二〇
一サンチガラム	一ガラム百分一	〇、一五四三	グレイン百分ノ	〇、〇〇二六六二〇四
一デシガラム	一ガラム十分一	一、五四三		〇、〇二六六二〇四
一ガラム		一五、四三二〇		〇、二六六二〇四
一デカガラム		一五四、三二〇		二、六六二〇四
一ヘクトガラム		一五四三、二〇		二六、六二〇四
一キロガラム		一五四三二、〇		二六六、二〇四
一ミリヤガラム		一五四三二、〇		二六六二、〇四
日木	量目	ガラム	メートル	グレイ
一毛		〇、三七五六	ミリガラム	〇、〇〇五七九
		三、七五六五	ミリガラム	〇、〇五七九七

一厘	三七、五六五二	ミリガラム	〇、五七九七一
一分	三七五、六五二一	ミリガラム	五、七九七一
一錢	三七五六、五二	ミリガラム	五七、九七一
十錢	三七五六五、二	ミリガラム	五七九、七一
百圓	三七五六五二、	ミリガラム	五七九七、一
一貫文目	三七五六五二、	ミリガラム	五七九七、一
一ケレイン	三七五六、五二	ガラム	五七九七、一
一オンス	凡八分二分八厘 但「一オンス」ハ「四百八十ケレイン」		

(貨幣器圖并品位量目表略ス)

○第二款 造幣規則 明治十六年五月 第十五號布達

造幣規則別冊ノ通相定本年八月十六日ヨリ施行シ明治十一年(七月)大藏省甲第二十四號同十二年(十月)同省甲第百一號布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

第一類 行田法 造幣規則

但本年ハ本文甲第百一號布達第三條日限中ト雖モ地金ヲ受取ル可シ
右布達候事

造幣規則

第一條 大阪造幣本局若クハ東京該出張所ニ輸入スル内外人民ノ金銀地金ハ左記ノ日
ヲ除キ毎日之ヲ受取ル可シ但時限ハ本局ニ於テハ午前九時ヨリ午後一時迄出張所ニ
於テハ同九時ヨリ正午十二時迄トス

毎日曜日

大祭日

臨時休暇

一月一日ヨリ
三月マテ

一月五日

九月一日ヨリ
十月三十一日マテ

十二月

二十九日ヨリ
三十一日マテ

第二條 非常ノ事アリテ休業スルトキハ速ニ其旨ヲ布達シ地金受取方ヲ止ム可シ

第三條 輸入ノ金銀地金ハ左ノ高以上ニ非サレハ受取ラサル可シ但出張所ニ於テハ輸
入高工程ニ超過スルトキハ受取方ヲ拒ムコトアル可シ

金地金

三十ヲンス「トロイ」

(凡二百四十
八匁四分)

銀地金

三百ヲンス「トロイ」

(凡二百四十
八匁四分)

不純粹金銀地金

舊金銀貨幣

價格貳百圓

金銀混合地金

價格貳百圓

凡二百四十
八匁四分

凡二百四十
八匁四分

凡二百四十
八匁四分

凡二百四十
八匁四分

第四條 品位詳明ナル外國金銀貨幣ハ其品位ニ據テ受取ル可シ若シ試験鑄解ヲ要スル
トキハ輸入人ニ報知シ第六條ニ依リ之ヲ受取ル可シ但出張所ニ於テハ其試験鑄解ヲ
要スル者ノ外ハ之ヲ受取ラサル可シ

第五條 品位詳明ナル金銀地金ハ照査試験ヲ爲シ其品位ニ據テ之ヲ受取ル可シ若シ試
験鑄解ヲ要スルトキハ輸入人ニ報知シ第六條ニ依リ之ヲ受取ル可シ

第六條 品位詳明ナラサル金銀地金或ハ内外國金銀貨幣ハ試験鑄解ノ上試験分析シ其
品位ニ據テ之ヲ受取ル可シ

第七條 金銀地金若クハ内外國金銀貨幣ノ試験鑄解ヲ要スル者其鑄解減ハ輸入人ノ負
擔タル可シ

第八條 凡テ輸入ノ金銀地金ハ輸入人若クハ其代理者ヲ立會シメテ秤量シ本局ニ於テ
ハ地金課長出張所ニ於テハ所長ノ假受取証ヲ交付シ試験分析濟ノ上勘定書ニ試験分
析表ヲ添ヘ之ヲ輸入人ニ送付ス可シ

第九條 輸入人地金勘定書ノ旨ヲ承諾シ之ニ捺印シテ回付スルトキハ輸入地金ノ價額
ニ對スル貨幣拂渡證書ヲ輸入人ニ交付シテ假受取證ト交換ス可シ但勘定書送付ノ日
ヨリ三日以内ニ勘定書ヲ回付セサルハ承諾シタルモノト爲ス可シ

第十條 代リ貨幣ハ地金ヲ本局ニ輸入シタルトキハ日本銀行大阪又ハ神戸支店(若ク

第一類 行政法 造幣規則

ハ代理店) 出張所ニ輸入シタルトキハ日本銀行本店又ハ横濱支店(若クハ代理店)ニ於テ左ノ期日ニ至リ之ヲ拂渡ス可シ但期日前貨幣拂渡ヲ望ム者ハ日本銀行本店又ハ其大阪支店ニ於テ一日萬分一ノ割引ヲ以テ前渡ヲ爲ス可シ

試験済ノ日ヨリ

造幣適當金銀地金

本局ニ輸入シタルモノ
出張所ニ輸入シタルモノ
十日目
二十五日目

精製分拆ヲ要スル地金 壹萬圓未満

同 同
十五日目
三十日目

同 三萬圓未満

同 同
二十日目
三十五日目

同 七萬圓未満

同 同
二十五日目
四十五日目

同 七萬圓以上

同 同
三十日目
四十五日目

但右期日休暇ニ當リテ翌日拂渡ス可シ

第十二條 鑄造料ハ金貨幣ハ千分ノ七銀貨幣壹圓ハ千分ノ拾ヲ收入ス可シ若シ試験鑄解ヲ要スル地金ナレハ更ニ千分ノ壹ヲ收入ス可シ

第十二條 精製分拆ヲ要スル地金ヲ輸入シタル片ハ其地金ノ種類ニ應ジ左ノ精製分拆料ヲ收入ス可シ但其地金千分中銀七百五十分以上ヲ含有セサルトキハ需ニ應セス

不純粹金地金

千分中金九百分以上 純金十ヲونس「トロイ」ニ付

金壹圓

同 金八百五十分以上

金壹圓拾貳錢七厘

同 金八百分以上

金壹圓貳拾五錢四厘

不純粹銀地金

千分中銀九百分以上 純銀十ヲونس「トロイ」ニ付

金貳拾六錢三厘

同 銀八百五十分以上

金貳拾九錢

同 銀八百分以上

金三拾壹錢七厘

金銀混合地金

同 銀七百五十分以上

金三拾四錢四厘

同 同

金壹圓

第一類 行政法 造幣規則

九百分以上 純銀十ヲンス「トロイ」ニ付 金貳拾六錢三厘
 同金銀八百 純金十ヲンス「トロイ」ニ付 金壹圓拾貳錢七厘
 五十分以上 純銀十ヲンス「トロイ」ニ付 金貳拾九錢
 同金銀八百 純金十ヲンス「トロイ」ニ付 金壹圓貳拾五錢四厘
 分以上 純銀十ヲンス「トロイ」ニ付 金三拾壹錢七厘
 同金銀七百 純金十ヲンス「トロイ」ニ付 金壹圓卅八錢壹厘
 五十分以上 純銀十ヲンス「トロイ」ニ付 金三拾四錢四厘

第十三條 出張所ニ地金又ハ内外國金銀貨幣ヲ輸入シテ貨幣鑄造ヲ請求スル者ハ運賃並ニ保險料トシテ成貨壹萬圓ニ付金六拾五圓ヲ納ム可シ但大阪ニ於テ成貨拂渡ヲ乞フ者ハ其半額ヲ減ス

第十四條 輸入ノ地金貨幣鑄造ヲ爲サスレテ返却スルトキハ左ノ費用ヲ收入ス可シ

試驗鑄解料

金地金 五百ヲンス「トロイ」未滿 金壹圓
 金銀混合地金(千分中金分百) 同上 金貳圓
 同 千ヲンス「トロイ」以上 金貳圓
 二千ヲンス「トロイ」未滿 同上 金壹圓
 以上之ニ準ス

試驗分析料

金地金 壹塊ニ付 金貳圓
 金銀混合地金 壹塊ニ付 金壹圓
 銀地金 壹塊ニ付 金壹圓

照査試驗料

試驗分析料ニ準ス

銀地金 以上之ニ準ス

金銀混合地金(千分中金分百) 千ヲンス「トロイ」未滿 金壹圓
 同 千ヲンス「トロイ」以上 金貳圓
 二千ヲンス「トロイ」未滿 同上 金壹圓
 以上之ニ準ス

試驗分析料

金地金 壹塊ニ付 金貳圓
 金銀混合地金 壹塊ニ付 金壹圓
 銀地金 壹塊ニ付 金壹圓

照査試驗料

試驗分析料ニ準ス

第十五條 流通不便ノ貨幣ハ本局若クハ出張所ニ於テ鑑定シ左ノ量目以上ナレハ左ノ手数料ヲ收入シテ之ヲ受取リ其翌日代リ貨幣ヲ拂渡ス可シ

金貨幣量目五ヲンス「トロイ」(凡四十一) 千分ノ三、半
 壹圓銀貨幣量目五十ヲンス「トロイ」(凡四百) 千分ノ五
 補助銀銅貨幣 量目ニ制限ナシ 無手数料

銅破目アリ又ハ音響惡キ貨幣ト雖モ全鉢ヲ失ハス量目減少セサル者ハ金銀共一枚ヲ

第一卷 行正法 紙幣交換制限 損傷紙幣交換規則 六百七十五

以テ一枚ト交換シ手数料ハ受取ラサル可シ

第十六條 金銀地金及ヒ金銀混合地金ニ含有スル雜物ハ滓ヲ返却セサルヘシ

○第三款 舊銅貨通用期限 明治十七年十月

舊銅貨天保通寶來ル明治十九年十二月限通用ヲ禁止ス

右奉 勅旨布告候事

○第四款 紙幣交換制限 明治十八年六月

政府發行ノ紙幣ハ來明治十九年一月ヨリ漸次銀貨ニ交換シ其交換シタル紙幣ハ之ヲ消

却スヘシ

但交換ノ手續ハ大藏卿之ヲ定メ日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシムヘシ

右奉 勅旨布告候事

○第五款 損傷紙幣交換規則 明治十七年四月大藏

明治十四年(五月)當省甲第七十五號布達損傷紙幣交換規則左ノ通改正候條右ニ照準シ

引換方可取計候此旨告示候事

損紙幣交換規則

水火災或ハ鼠喰蟲喰等ノ爲メ毀損セシモノヲ交換スルトキハ毀損ノ原因ヲ取札シ左ノ

箇條ニ照準交換スヘシ

第一條

小破或ハニツ切レニツ切レ等幾片ニ細斷スルトモ中央ノ數位 (數位トハ各紙幣ノ

種類ニ隨ヒ拾圓、五圓、壹圓、五拾錢、貳拾錢、拾錢トアル黒色ノ文字ヲ云以下皆之ニ

全シ)全存シ大藏卿出納局長ノ印章記録局長ノ割印上下ノ番記號(四箇所)ヲテ接続

スルモノ又全部所々破損スルトモ中央ノ數位全存シ大藏卿出納局長ノ印章記録局長

ノ割印ノ内一箇上下番記號四箇所ノ内二箇所(記號一箇所番號一箇所又ハ番號ノ

ニ二箇所記號ノキニ二箇所)存在スルモノ又中央ノ數位半存ト雖モ各印章全存番記號

二箇所ヲ認ムルモノハ全額ヲ以テ交換ニ付スヘシ

但全紙接続スルトモ左右ノ番記同シカラサルモノ又ハ彩紋等不台他ノ紙幣ヲ以テ

接続スルト認ムルモノハ交換ニ付セス

第二條

縱又ハ横斜等半片ハ消滅シ殘リ半片ノ紙幣ハ中央數位半存シ大藏卿印章或ハ出納局

長ノ印章記録局長割印ノ内一個上下番記號ノ内一個ヲ認ムルモノハ半額ヲ以テ交換

ニ付スヘシ

第三條

大藏卿及ヒ其他ノ印章番記號トモ全存スルト雖モ中央ノ數位ヲ認メサルモノ中央ノ

數位存在スルトモ印章及ヒ番記號ヲ認メサルモノハ交換ニ附スヘカラス

○第六款 贗造金銀銅貨紙幣取扱規則 明治九年四月 第五十七號布告

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨紙幣ヲ鑑定ノ節贗造品取扱規則左之通相定候條此旨布告候事

贗造金銀銅貨紙幣取扱規則

第一條 新金銀銅貨紙幣等贗造品ハ詳ニ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ尋テ其面前ニ於テ斷截シ速ニ其最寄警察出張所或ハ屯所或ハ區戶長ニ差出シ其顛末ヲ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スル時ハ該廳ヨリ警察官署ニ通知スヘシ

但持主立會ハサル時ハ必ス代理人ヲ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞送シ來ソル者ハ立會人ヲ取リテ之ヲ斷截シ速ニ遞送主ヘ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ斷截シタル時ハ改人ヨリ持主ヘ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ品ト引換ヘ相渡シ其斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳ヘ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正價定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於テ其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳ヘ差出スヘシ

然ルルハ該廳ニ於テ詳細吟味シ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス適用ノ際人民ノ疑

ヲ生スベキモノハ直ニ持主引換渡スヘシ其贗造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣贗造品ハ持主又ハ代理人ノ面前ニ於テ斷截シ直ニ其持主又ハ代理

人ヘ還付スヘシ

第五條 贗造ヲ知ルト雖モ斷截セシメテ持主ニ還付シ又ハ申立テ等閑ニスルモノ等ハ相當ノ處罰ヲナスヘシ

○第廿六章 遺失物

○第一款 遺失物取扱規則 明治九年四月 第五十六號布告

第一條 凡ソ遺失物ト稱スルモノハ自ラ其遺失スルコトヲ覺ラヌ及ヒ其所在ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ就テ主タルヲ證明スルニ於テハ直ニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ論スルヲ得ス

第二條 凡ソ遺失ノ物ヲ得レハ五日內ニ其主ニ還シ其主分明ナラザレハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜止シ一年內其主ヲ見ハ之ヲ得者ニ給ス

第三條 凡ソ遺失者ハ其遺失スル物品ノ摸樣員數並ニ遺失ノ日時場所等ヲ可成テ詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ但シ得者ヨリ其返還ヲ得ル片モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第一類 行政法 遺失物取扱規則

第四條 凡ソ遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖其費用ヲ償ハシムルコトヲ得且ツ得者ニ報勞ノ爲メ其物價百分ノ五ヨリ少カラス貳十ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價額ヲ争フ片ハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡ソ遺失物ヲ得ルニ物品盜匪ニ係ルモノハ直チニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止タ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 (明治十四年二月第二號布告改正)官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ皈スヘシ若シ借地人其借地ヨリ掘得タル片ハ之ヲ地主ト中分セシム但盜贓ニ係ルモノハ此限ニアラス

第七條 凡ソ遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル片ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルコト第二條ノ如シ

第八條 凡ソ家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルコト第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財產ヲ毀損スル片ハ律ニ照ラシテ處分ス

第九條 凡ソ逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサルハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ

官ニ領置シ榜示シテ處分スルコト第二條ノ如シ

第十條 凡ソ遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルコト私物ニ異ナルコトナシ

第十一條 凡ソ警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハズ遺失物ヲ得レハ速カニ之ヲ官ニ送リ全ク其主ニ還附シ其主ナケレハ之ヲ官ニ沒ス

第十二條 凡ソ一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セス並ニ官ニ沒ス

第十三條 凡ソ公私債證書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡ソ遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得若シハ埋藏物ヲ掘得テ官私ニ全ク送達セス或ハ物主ノ其主タルコトヲ證明スルニ冒認シテ返還セサル者ハ並ニ律ニ照ラシテ處分ス

○第二款 埋藏物掘得タル節届出方
明治十年九月内務省甲第二十号布達

明治九年(四月)太政官第五十六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋藏物掘得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徵スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省ヘ届出検査ヲ可受其品ニヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高ヲ發掘人ヘ下付シ該物品ハ永ク博物館ヘ陳列可致候條此旨布達候事

但物品ハ先ツ掘田地名及ヒ形狀等ヲ詳記シ及ヒ摸寫スルモノヲ郵送シ其見込ミアルモノニテ遞送方相達候後本文ノ通り可取計候事

○第廿七章 銃砲

○第一款 銃砲取締規則 明治五年正月 第二十八號布告

(明治八年六月第十一號達ヲ以テ銃砲彈藥取締ノ儀一切内) 務省へ管理セシメラレ本則中抵觸ノ箇條ハ總テ廢セラレ

第一則

一 大小銃並ニ彈藥類商賣ノ儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致問敷右定員ノ商賣ハ其地方管應ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司ニ於テ管轄スヘキ事

免許商賣ノ定員

一 府下

各五員

一 縣下

各三員

一 鎮臺本分營下

各一員

但府縣廳下開港等ニアルハ別ニ設ケス

官一開港場

右免許差遣候商賣ノ姓名住所等東京武庫司へ届クヘキ事

第二則

一 免許商人ヲリ軍用ノ銃砲彈藥類ヲ竊ニ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照ラシ賣渡可申又買入ノ節ハ其管應へ願出免手形ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司へ可願出事

△(明治十二年三月第八號布告左ノ一項追加)

一 免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃並ニ其彈藥類ヲ買入レントスル片ハ買入願書ニ其買主ノ連書ヲ爲サシムヘキ事

第三則

一 免許ノ商人其賣買ノ銃砲彈藥類ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ者ハ免手形相添毎月其管應へ差出ス可シ其應ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄鎮臺へ差送可申事

但諸鎮臺ヨリ毎歲正月七月兩度半々年明細帳ヲ以テ東京武庫司へ差送リ可申尤東京大阪ノ儀ハ武庫司ニ於テ取締可致事

第四則

第一類 行政法 銃砲取締規則

一 彈藥ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミナ計リ勝手ノ場所ニ差置間敷兼テ其地方管廳ニ願出差圖ヲ受相圖可申事

但東京大阪ノ儀ハ武庫司ニ願出ヘキ事

第五則

一 華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲并彈藥類ビストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出 東京大阪ハ別紙銃砲改刻印式ノ通番號官印ヲ受可申他人ニ讓與ヘ候節ハ第二則ノ手續ニ從フ

但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通リタルヘシ

銃砲改刻印ノ式

干支何番 武庫司或ハ何府縣

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄鎮臺ヘ届出鎮臺ヨリ東京武庫司ヘ差送可申事

免許ノ銃類

一 和銃四文目八分玉以下

一 各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナレハ霰彈ヲ用ユルモノハ之ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管廳ヘ届出其管廳ヨリ東京武庫司ヘ差出可申 東京大阪ハ所持ノ者ヨリ直 萬一軍用獵用銃ノ差別難相辨者官ヘ尋出候得ハ檢査ノ上免許ノ證印ヲ据ヘ可相渡事

第六則 (明治六年第二十五號布告) 鳥獸獵規則ヲ以テ廢ス

第七則

一 銃砲彈藥下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管廳ニ相願管轄鎮臺ヘ届出免許ヲ可受事

但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ鎮臺ヨリ武庫司ヘ差送り檢査ヲ遂テ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰可有之事

是迄銃砲並彈藥類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書記シ管轄廳ニ爲指出其廳ヨリ東京武庫司ニ可差出事

但東京大阪ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ武庫司ニ可届出事 右之通ニ候事

○第二款 彈藥雷管賣買手續 明治十一年五月 第十一號布告

銃獵免許ノ者及ヒ有害ノ鳥獸威シ銃室内射の場營業免許ノ者等需用ノ彈藥雷管ニ限リ
賣買手續左ノ通り相定候此旨布告候事

銃獵免許ノ者及ヒ有害ノ鳥獸威シ銃室内射の場營業免許ノ者等需用ノ彈藥ヲ買ハ
ト欲スル時ハ其免狀若シハ免許證ヲ以テ彈藥賣買免許商人ニ示シ以テ其免許人タル
ヲテ證スヘシ

彈藥賣買免許商人ハ右ノ免狀若クハ免許證ヲ認メ正確ナリトスル時ハ左ノ程限ニ照
ラシ之ヲ賣渡シ其姓名及ヒ數量等ヲ詳記シ月々其管轄廳(東京ハ警視本署)へ届出ツ
ヘシ

西洋形獵銃用

彈藥 散彈ハト
ポンノ類

貳千發

同上用

雷管

四千粒

火繩銃用

火藥

壹貫目

威シ銃用

雷管

壹方粒

右一次賣渡シ最多ノ程限トス若シ一次此程限外ノ彈藥雷管ヲ買ントスル時ハ銃砲取
締規則第二則ニ從フヘシ

○第三款 銃砲取締規則違犯罰例

明治五年九月第二
百八十二号布告

銃砲取締規則ニ違ヒ銃砲彈藥類ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品
取上ケ更ニ五拾錢ノ過料可申付候事

但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事

○第四款 銃砲彈藥製造者罰則

明治七年十二月
第百卅二號布告

一 免許ヲ得スニテ銃砲彈藥ヲ製造スル時ハ其品取上ケ更ニ三圓以内ノ過料可申付事

但書同前

○第五款 武官所有軍用銃賣買取扱規則

明治十三年三月
第二十二號

使府縣(東京府ヲ除ク)達

陸海軍武官所有ノ軍用銃ハ明治五年(正月)第二十八號布告ニ依リ管轄廳ノ検査番號ヲ
受來候處自今准士官以上ノ武官ハ左ノ規則ニ據ルヘシ此旨相達候事

武官所有ノ軍用銃賣買取扱規則

第一條 陸海軍省ニ於テハ武官所有ノ軍用銃并其彈藥類買入ノ節交付スヘキ買入免狀
ヲ定メ置キ豫メ其印影等照會ノタメ使府縣廳(東京ハ警視本署)へ通知スヘシ

第二條 武官軍用銃并其彈藥類ヲ買入ル、時ハ前款ノ免狀ヲ受取之ヲ該地ノ免許商人

第一類 行政法

武官所有軍用銃賣買取扱規則

六百八十七

ニ交付シテ其買入ヲ爲スヘシ

第三條 武官轉任又ハ免官スル時ハ其奉職中所有セシ銃器ハ其銃名(檢印アラハ其番號)ヲ記載シ使府縣廳(東京ハ警視本署)ヘ届出常則ニ從ヒ其取締ヲ受クヘシ

第四條 武官奉職中所有ノ軍用銃及ヒ其彈藥類ヲ人民ヘ賣渡サントスル時ハ買受人ヨリ其使府縣廳(東京ハ警視本署)ヘ差出スヘキ願書ヘ連署スヘシ

○第六款 鳥獸獵規則 明治十年一月 第十一號布告

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノ爲メニスルヲ遊獵トス
第二條 銃獵免狀ナキ者ハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除クガ爲メニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 銃獵免狀ヲ得メト欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳(舊ト内務省ノ處十四年第四十三號布告ヲ以テ改テ農商務省ト爲シ更ニ同年第六十一號布告ヲ以テ警視廳ニ改ム第六條亦同シ)其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若クハ授受スルコトヲ禁

第五條 免狀ヲ願受クル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ

一 職獵稅 金壹圓

一 遊獵稅 金拾圓

第六條 水火盜難其他ノ事故ニ依リ免狀ヲ毀失スル時ハ速カニ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト
雖モ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セサルヘシ

一 十六歳未滿ノ者

一 白痴瘋癲等ノ者

一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受クシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲ爲スヲ禁ス

一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所

一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離場所

一 禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃ニ挺ヲ交叉シタル圓ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記シ掲ケ置クヘシ

一作塲種植ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

第一類 行政法 鳥獸獵規則

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四匁八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃ヲ用フルヲ禁ス

△(明治十年十二月第八十五號布告但書追加)

但開拓使管内ニ限リ和銃玉目十匁以下ヲ用フルヲ得ヘシ

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是期限ノ外ハ銃獵ヲ

禁ス

但地方ノ景況ニ依リ己ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スルキハ其理由ヲ農商務省ヘ届出ヘ

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帶スヘシ出獵中警察官吏區戸長村役人等

免狀ヲ看ント請フ者アル片ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル片ハ第八條所示ノ如キ

制札ヲ立テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲ爲スヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスニテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五十圓ノ

罰金ヲ科シ免狀取上ケ其期内銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ證明ヲ取リ訴出ル片ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フ

ヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラス貳拾圓ヨリ多

カヲサル罰金ヲ科スヘシ

第十八條 (明治十年十二月第八十五號布告追加)開拓使管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該

使施行ノ規則ニ遵フヘシ

○第七款 火藥取締規則 明治十七年十二月

第三十一號布告

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但従前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

火藥取締規則

第一章 總則

第一條 凡火藥劇發火藥 棉火藥、ナイトログリセリン、ダイハ人民ニ於テ製造スルコト

ヲ禁ス但煙火マツチノ類ハ此限ニ在ラス

第一類 行政法 火藥取締規則

第二條 火藥類 火藥類發火ノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳東京府ハニ願出免許
警視廳鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以内トス

第三條 火藥類ハ營業者ニ限リ陸軍海軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ク可キモノトス

第四條 管轄廳東京府ハニ於テ
警視廳火藥類ノ檢査ヲ必要ト認マル時ハ營業者タルト否トテ問ハス警察官ヲシテ之ヲ檢査セシムルコトアル可シ

第五條 戰時若クハ事變ニ際シテハ陸軍卿海軍卿ハ火藥類ノ拂下クヲ停止シ内務卿ハ其賣買運搬ヲ停止スルコトアル可シ

第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非ザレハ日出前日没後ニ於テ賣買運搬其他荷造等ヲ爲ス可カラズ

第二章 買買

第七條 營業者ハ毎月買受タル火藥類ノ種類數量ヲ記シ証書アレハ
之ヲ添ヘ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非シテ所有ノ火藥類ヲ買ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡スヘシ營業者ハ其賣渡證書ヲ取リ置ク可シ

第九條 營業者ハ銃砲用又ハ坑業土工煙火其他職業用ニ限リ火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス

但十六歳未満若クハ白痴瘋癲ノ者ニハ之ヲ賣渡スコトヲ許サズ

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃獵若クハ煙火製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲メニスル者ハ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ陸海軍軍人ノ射的用ニ供スル者ハ其省ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルコトヲ許サズ

小銃用	火藥	三百目	雷管	五百個	
船舶設備銃砲用	大砲一門ニ付	火藥	五十發分	導火管類	七十個
煙火製造用	小銃一挺ニ付	火藥	百發分	雷管	百五十個
		五貫目			

坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ヲ買受ケントスル者ハ其旨趣及種類數量並ニ使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ若クハ許可證ヲ受取リ火藥類ヲ賣渡ス可シ但

第十條ノ數量ヲ超ルコトヲ許サズ

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所氏名及ヒ其賣渡シタル種類數量年月日ヲ記シ證書アレハ
之ヲ添ヘ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第十三條 火藥類ハ火藥三百目雷管導火管類五百個迄ハ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スル

第一級 行政法 火藥取締規則

コトヲ得

營業者ハ前項制限ノ外火藥拾貫目劇發火藥壹貫目雷管導火管類壹萬個迄煙火製造人
ハ火藥五貫目劇發火藥五百目迄ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏スル
コトヲ得其數量ヲ超ル時ハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スルコトヲ許サス火藥五百貫目以上
劇發火藥五拾貫目以上ハ火藥庫ト雖モ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第十四條 火藥類チ一庫内ニ貯藏スル時ハ其種類毎ニ不燃質物ヲ以テ之ヲ區畫ス可シ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置并ニ建設ノ方法書及ヒ近傍ノ地圖ヲ添
ヘ管轄廳東京府ハニ願出許可ヲ受ク可シ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域チ距ル十町以内ノ地ニ建設スルコトヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅地國道縣道鐵道電信柱瀧松ノ
通スヘキ河湖及他ノ火藥庫境界トノ中間ニ五十間以上ノ距離チ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ不燃質物ヲ用ヒ内部ニハ鐵釘
石瓦ヲ露ハサス窓ニハ透明ノ硝子ヲ用フ可カラズ又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ二間
以上チ隔テ、高サ六尺以上ノ土堤ヲ築キ其入口ニ火藥庫ト書レタル標木上ニシテ五
寸角以上チ建ツ可シ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地ニ材木草秣其他燃質物ヲ蓄積ス可カラズ又五十
間以内ニ於テ火ヲ取扱フ建造物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質ノ物
品ヲ蓄積ス可カス

第二十條 坑業土工其他多量ノ火藥類ヲ要スル爲メ其事業中假貯藏所ヲ設ケントスル
者ハ第十七條ニ掲ケタル距離チ二倍ニ第十五條ニ據リ管轄廳東京府ハニ願出許可ヲ
受ク可シ但貯藏ノ數量ハ火藥貳百貫目劇發火藥參拾貫目ヲ超ルコトヲ許サス

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨリ十間以上ノ距離チ有ツ可シ
又五貫目以上ノ火藥類ヲ置ク可カラズ

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬セントスル時ハ其種類數量運搬ノ日時場所及
水陸通路ノ名稱ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ携帶シ運搬畢ラハ直ニ之ヲ返
納ス可シ若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可シ

第二十三條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬スル時ハ鐵釘鉄輪ヲ用ヒサル木製銅製若クハ
亞鉛製ノ器ニ入レ其外部ハ筵包若クハ繩卷ト爲シ毛布類ヲ以テ之ヲ覆ヒ赤地ニ火藥
ノ二字ヲ白書シタル小旗陸路ニハ曲尺縱二尺橫二尺五寸水路チ建テ護送入ヲ附ス可
シ但縱積スル時ハ明治六年(八月)第貳百九拾貳號布告危害品貯藏法ニ從フ可シ

第二十四條 火藥類ヲ運搬スルニハ火氣ニ注意シ休泊ノ時ハ安全ナル場所ヲ撰ヒ看守

人ヲ附ス可シ

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火藥類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ軍用品ニアラスト雖モ刑法第百五十七條ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第百六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第百五十八條第百五十九條第百六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火藥庫又假貯藏所ヲ建設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ検査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯シテ賣買運搬シ第九條第十條

第十一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十條ノ制限ヲ超テ貯藏シ又ハ第二十一

條ニ違犯シタル者又ハ營業者賣買ヲ除ク外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ二

圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第

二十四條ニ違犯シタル者ハ一圓以上一圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 營業者此規則ニ違犯シタル時ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止

シ又ハ停止スルコトヲ得

附則

一從前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄ニ火藥製造諸器及火藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳東京府ハニ願出ルニ於テハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シニ願出ルニ於テハ從前免許ヲ得タル彈藥免許商人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄火藥買營業ヲ差許シ從前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又從前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過クルトキハ總テ此規則ニ從フヘシ

○第八款 爆發物取締罰則 明治十七年十二月 第三十二號布告

爆發物取締罰則別冊ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

爆發物取締罰則

第一條 治安ヲ妨グ又ハ人ノ身體財產ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ

有期徒刑ニ處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫激唆煽動ニ止ル者及ヒ共謀ニ止マル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入販賣譲與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサルコトヲ證明スルコト能ハサル時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルコトヲ認知シタル時ハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラントスル人ニ告知ス可シ違フ者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ其罪證ヲ湮滅シタル者ハ正犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十六歳未満ニシテ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備陰謀ヲ爲シタル者ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ記載シタル犯罪者モ亦同シ

第十二條 本則ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ仍ホ重キ者ハ重キニ從テ處斷ス

○第廿八章 警察

○第一款 行政警察規則 明治八年三月二十九號達

行政警察規則別冊ノ通相定候條本年四月一日ヨリ施行可致就テハ從前捕亡吏取締組番人等ノ名稱ヲ廢シ邏卒ト改稱可致此旨相達候事

(明治八年第八十三號達ヲ以テ邏卒ヲ巡查ト改稱全八年二百六號達ヲ以テ刪除改正等アリ直ニ修正ス)

但捕亡費ヲ改テ警察費ト稱シ定額ハ先從前ノ通ニ候條出張所並吏員配置ノ儀ハ適宜タルヘク尤差向規則ノ通施行難致事情有之向ハ其段内務省ニ可申出事

別冊
行政警察規則

第一類 行政法 行政警察規則

六百九十九

第一章 警察職務之事

- 第一條 行政警察ノ趣意タル人民ノ凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スルニアリ
 - 第二條 各府東京府ノ縣長官其事務ヲ提掌シ警部ヲシテ之ヲ分掌セシメ便宜各所ニ出張シ巡査ヲシテ各部ニ分派シ巡邏査察セシム
 - 第三條 其職務ヲ大別シテ四件トス
 - 第一 人民ノ妨害ヲ防護スル事
 - 第二 健康ヲ看護スル事
 - 第三 放蕩淫逸ヲ制止スル事
 - 第四 國法ヲ犯サントスル者ヲ隱密中ニ探索警防スル事
 - 第四條 行政警察豫防ノ力及ハスニテ法律ニ背ク者アルハ其犯人ヲ探索逮捕スルハ司法警察ノ職務トス之ヲ行政警察ノ官ニ於テ行フハ檢事章程并司法警察規則ニ照スヘシ
 - 第五條 警察官吏ハ公同一般ノ裨益ヲ計リ一家隱微ノ小惡ヲ發ク可ラス且一己ノ功ヲ貪リ警察一般ノ目的ヲ愆ル可ラス
- 第二章 警部勤務ノ事
- 第一條 各出張所ニ派出セル警部ハ時々本廳ニ參會シ事務ヲ商議シ處分異同ヲキテ要スヘシ

スヘシ

- 第二條 凡ソ布告布達ハ其旨趣ヲ巡査ニ教示シ誤解スルモノナキヲ要スヘシ
 - 第三條 時々區内ヲ巡視シ其景況並ニ巡査ノ勤怠正否ヲ察スヘシ區内ノ人員戶數職業等ハ成丈ヲ詳知スルヲ要スヘシ
 - 第四條 區内ノ事故ハ月報ヲ以テ長官ニ報告スヘシ若シ非常急緊ノ事件アレハ速ニ報知スヘシ時機ニ因リ直ニ警保頭ニ報告スルヲ得ヘシ
 - 第五條 凡ソ警察ノ事ニ付テハ直ニ他府縣ノ警察官ニ報知若クハ照會スルヲ得ヘシ
 - 第六條 達又ハ訊問等ノコトアルニ付テハ勅奏官及ヒ華族並有位ノ者ハ家令家扶執事ヲ呼出スヘシ判任官以下士族平民ハ直ニ本人ヲ呼出スヲ得ヘシ
 - 第七條 違警犯人ハ其犯狀ヲ按シ違警條目ニヨリ處斷シテ後長官ニ具申シ其疑按アルモノハ長官ノ指揮ヲ受ケテ處分スヘシ
- 第三章 巡査勤方之事
- 第一條 第一章第三條ヲ以テ職務ノ大目的トナスヘキ事
 - 第二條 持區内ノ居民並道路行人ヨリ困難出來シテ救護ヲ乞フ片ハ何時ニテモ乞ニ應ジ或ハ救護ヲ乞ハサルモ見聞次第力ヲ盡シテ防護スヘシ
 - 但街路其外ニテ人命ニ係ル危難有之節ハ瞬速救護シ最寄ノ醫ヲ頼ミ治療ノ手續懇

切ニ取計フヘシ

- 第三條 老幼癡疾婦人等ハ就中注意シテ保護スヘシ
- 第四條 持區内ノ大小往來筋及ヒ市街村落ノ位置區長戸長ノ宅等盡ク詳知スヘシ
- 第五條 持區内ノ戸口男女老幼及其職業平生ノ人トナリニ至迄テ注意シ若シ無産體ノ者集合スルカ又ハ怪シキ者ト認ルルハ常ニ注目シテ其舉動ヲ察スヘシ
- 第六條 持區内ヘ他ヨリ移リ來ル者アラハ前條ニ隨テ速ニ之ヲ探知スヘシ
但右等ノ事ニ付權威ヲ以テ其人ヲ呼出ス等ノ儀ハ決シテ有之間敷勉メテ當人ノ覺知セサル様隱密ニ探偵スルヲ以テ警察ノ本意トス若シ己ムヲ得サルコアル片ハ自
ヲ行テ尋問スヘシ
- 第七條 布告布達等總テ新令ノ出ルニ付人心ノ信否ヲ考察シテ警部ニ報知スヘシ
- 第八條 巡邏中職務ニ關スル大小ノ事故ハ逐一手帖ニ記シ警部ニ報知スヘシ
- 第九條 非番アリモ合圖アルカ又ハ臨時呼出ヲ受レハ早速其場ニ駆付ヘク平常其心掛アルヲ要ス
- 第十條 往來筋ノ妨害トナルヘキ物ヲ見ル片ハ速ニ取除カシムヘシ
- 第十一條 道路ノ荒蕪溝渠ノ淤塞及不潔物アレンハ之ヲ戸長ニ告ケ掃除ノ手續ヲナスヘシ

- 第十二條 官舎橋梁道路其他公有之建造物破損スルキハ警部ニ報知スヘシ
- 第十三條 行人ニ道路或ハ其他ノ事ヲ尋問セラルル片ハ丁寧ニ教示スヘシ
- 第十四條 稚兒道ニ迷フアラハ之ヲ保護シ其居所不分明ナル者ハ之ヲ其地ノ戸長ニ預メ之ヲ警部ヘ報知スヘシ若シ其居所分明ニシテ其持區内ナラハ直ニ之ヲ送致シ他ノ區ナラハ其地ノ區長ニ掛合送致ノ手續ヲナスヘシ
- 第十五條 芝居其他群集ノ所ニハ出張シテ亂雜ヲ防制スヘシ
- 第十六條 放シ牛馬アレハ之ヲ便宜ノ所ニ留メ置キ其主分明ナル者ハ之ヲ附與シ然ラサルハ警部ノ指圖ヲ受クヘシ
- 第十七條 路上酒ニ酔ヒ失心スル者ハ之ヲ注意シ又ハ最寄人民ニ介抱セシメ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ
- 第十八條 路上狂癡人アレハ穩ニ之ヲ介抱シ其暴動スル者ハ取押ヘ其地ノ戸長ニ引渡スヘシ
- 第十九條 路上ニ狂犬アレハ之ヲ打殺シ戸長ニ告ケ之ヲ取棄ル手續ヲナスヘシ
- 第二十條 道路河渠ニ死屍アル片ハ其模樣ヲ檢シ警部ニ報知シ指揮ヲ受クヘシ
- 第二十一條 獸畜ノ死骸アル片ハ速ニ戸長ニ告ケ之ヲ取除ク手續ヲナスヘシ
- 第二十二條 鳥獸魚類其他飲食物ヲ販賣スル店ニ贗造腐敗ノ品之アルヤヲ常ニ檢査スヘシ

第一類 行政法 行政警察規則

第廿三條 人家夜間戸締油斷ノ者アレハ速ニ之ヲ其主ニ知ラヌヘシ

第廿四條 怪キ者ヲ見認ル片ハ取糺シテ様子ニ依リ持區内出張所ニ進行或ハ警部ニ密報シ差圖ヲ受クヘシ倉卒ノ取計アル可ラス

第廿五條 失火ノ節ハ巡查失火ノ合圖ヲナシ一般ニ知ラシム且燒失ニ罹ル家ハ其家人ヲ助ケ消防ノ事モ勤ムヘシ消防人己ニ集ルニ至レハ勉テ亂雜及ヒ竊盜ヲ防ク事ニ注意スヘシ

第廿六條 同斷ノ節第一ニ其人ヲ救ヒ出シ次ニ書類金貨等ヲ出スヘシ又官廳其他區戶長等ノ宅ハ文書第一ニ取出スヘシ

第四章 巡查心得ノ事

第一條 專ラ行儀作法ヲ正シク威權ケ間敷儀之ナクシテ區民ノ侮慢ヲ受クサル様可心掛事

第二條 法度規則ヲ確守シ上官ノ命令ヲ遵奉スヘシ決シテ職外ノ事ヲ議ス可カラサル事

第三條 同勤中ハ一心全體ト心得常ニ謙和温順ヲ旨トシ忠實ヲ以テ交誼ヲ盡シ職務ニ怠ラサル様互ニ獎勵スヘキ事

第四條 節儉ヲ守リ分限不相應ノ儀致間敷事

第五條 職務上ニ付上官ニ申立ノ事ハ總テ實直ヲ旨トシ愛憎偏倚ノ儀決シテ有之間敷尤後日ニ至リ前言ヲ翻改スル儀無之様可心掛事

第六條 巡邏中道路行人並ニ營業ノ者ノ妨ニ不相成様可心得事

第七條 往來ノ者ヲ取扱ニハ柔和ヲ旨トシ辨ヘナキ者ハ殊更穩ニ取扱ヒ決シテ凌辱ヲ加ヘ手荒キ處置致間敷事

第八條 取調ノ爲メ人家ニ至ル節ハ接對筋總テ懇篤ニ可致但公私ノ分ヲ守リ狎レ狎敷儀決テ有之間敷事

第九條 巡邏中私ニ人家ニ立寄候儀ハ勿論徒ラニ市店ヲ詠メ職務ヲ怠ル間敷事

第十條 持區内ニテ金譚等類入レ或ハ物ヲ買ヒ其價ヲ借ル等ノ儀決シテ有之間敷事

第十一條 出勤中醉態ヲ露ハシ又ハ婦女ヘ對シ戲ケ間敷儀等決シテ有之間敷事

第十二條 機密ノ筋ハ勿論職務ニ係リタル事ハ總テ他言致間敷事

第十三條 公事出入等ニハ一切關係致間敷若シ強テ相賴候者アラハ掛官員ヘ具申スヘキ事

第十四條 官ヨリ相渡サレタル得物ノ外兵器ヲ携ル儀ハ不相成且相渡シタル品ハ大切ニ取扱フヘキ事

第十五條 得物ハ自身ヲ擁護スル具ト心得猥ニ人ヲ打擲致間敷勿論兇暴人アリテ手ニ餘リ不得止節ハ格別ノ事

第十六條 巡邏中傍人ノ嘲哂スルコトアリト雖モ必ス耻辱ト思フヘカラス能ク忍耐シテ相當ノ處置ヲナシ決シテ憤怒ノ色ヲ顯シ争鬪ヲ間敷儀致間敷事

第十七條 何様ノ事アリトモ職務上ニ付人民ヨリ謝物トシ金銀物品ヲ受ルコト有可ラサル事

第十八條 巡邏中ハ必ス役服ヲ着用シ能ク容姿ヲ正フシ他人ト同行シテ雜譚スヘカラスル事

第十九條 毎朝衣服玩物其他器械ヲ検査シ常ニ見苦シカラサル様注意スヘキ事

第二十條 屯所ハ毎朝清潔ニ掃除スヘキ事

第一章 總則

第一條 凡ソ司法警察ヲ爲シ止ムコト得サル處分ニ於テハ人ノ身體ヲ拘留シ居宅ニ進入シ物料ヲ押入書簡ヲ開クコト得而シ司法警察ノ處分ヲ行フハ司法警察官タル者若クハ司法警察

○第二款 司法警察假規則 明治九年四月司法省第四十八號達

官ヨリ委任ヲ受ケタル者ニ限ルヘシ

第二條

司法警察ノ處分ハ罪犯ヲ探索檢視ノ事證ヲ取リ各裁判所ニ付スルニ在リ

第三條

司法卿ノ命ヲ受ケ司法警察ノ事ヲ行フノ官左ノ如シ

第一 檢事及檢事補

第二 警察使並地方警部

第二ノ警察官吏ハ其違警犯ニ於テハ司法警察ノ全權ヲ有スルヲ除クノ外其他ノ罪犯ニ於テハ檢事補助ト心得檢事檢視ノ職務ヲ攝行スルコト得

但檢事派出ナキハ縣ハ地方官ノ命ヲ受ケヘシ

警視廳長官及地方長官(東京府ヲ除ク)急遽ノ時ニ於テハ直チニ司法警察ノ事ヲ專行シ而後檢事ニ報告スルコト得

但シ派出檢事ナキハ府廳ハ地方官ノ内常ニ檢事ノ事ヲ行フ

第二章 檢事司法警察職務

第四條

檢事ハ違警犯ヲ除クノ外總テ罪犯ニ付テノ告訴被害入自ラ告發他人ヨリテ受取リ及自

第一類 行政法 司法警察假規則

ヲ現行犯ヲ檢視シ檢視明細書ヲ作り若シクハ他ノ司法警察官ノ檢視明細書ヲ受取リ之ヲ相當ノ裁判所ニ訴ヘ裁判ヲ求ムヘシ

第五條

犯罪ノ地ノ檢事又ハ犯人住所及寄留地ノ檢事又ハ犯人ヲ見出シタル地ノ檢事ハ並ニ前條ノ職務ヲ行フ事ヲ得

第六條

重罪犯若クハ犯情繁雜ナル者ハ檢事ヨリ糾問判事ニ付シテ下調ヲ請フ下調濟ノ後檢事更ニ證憑文書ヲ受取リ裁判所ニ訴ヘ裁判ヲ求ムヘシ
第七條 糾問判事ニ付シテ下調ヲ請フ於テ檢事不服ナル片ハ再ヒ他ノ糾問判事ニ下調ヲ求ム或ハ直チニ判事ニ付シテ裁判ヲ求ムルヲ得

第三章 警察使並警部

第八條

現行犯罪ニ於テハ警察使又ハ警部ニ先ツ事犯アルコトヲ聞知シタル者直チニ犯罪所ニ至リ檢事ノ行方ニ對シ一切ノ事ヲ行フヘシ

若シニ事件ニ付檢事ト警察使又ハ警部ト同時ニ檢視ノ爲メ犯罪所ニ至リタル片ハ警察使又ハ警部之ヲ檢事ニ讓ルヘシ

第十條

但檢事ハ警部ヲ引續キ檢視ヲナサザルコトヲ得
檢事及糾問判事ヨリ警察使又ハ警部ニ委任シ自己職權内ノ一部ヲ行ハシムル時ハ警察使又ハ警部之ヲ奉行スヘシ

第十二條

警察使又ハ警部ハ受取ル所ノ告訴告發ノ文書若クハ現行犯ノ檢視明細書及ヒ其他ノ書類ヲ送リ檢事ニ送り檢事處分ニ供フヘシ故ナク淹滞勾留スルコトヲ得ス

第四章 司法警察官現行犯處分

第十二條

現ニ行フ罪犯及現ニ行ヒ終リタル罪犯ヲ現行犯ト云衆人指名シテ其犯主タルコトヲ傳シ若クハ兇器文書其他罪犯ノ証憑タルハハ物ヲ携帯シ犯人ト思察スハキ片ハ犯罪ヨリ時日ヲ過キタリト云ヒ亦現行犯ニ准ス

第十三條

現行ノ重犯アリテ巡查見知シタル片ハ急飛チ以テ司法警察官ニ報シ犯人ヲ追拿シ屍體

第一類 行政法 司法警察假規則

ヲ現行犯ヲ檢視シ檢視明細書ヲ作り若シハ他ノ司法警察官ノ檢視明細書ヲ受取り之ヲ相當ノ裁判所ニ訴ヘ裁判ヲ求ムヘシ

第五條

犯罪ノ地ノ檢事又ハ犯人住所及寄留地ノ檢事又ハ犯人ヲ見出シタル地ノ檢事ハ並ニ前條ノ職務ヲ行フ事ヲ得

第六條

重罪犯若シハ犯罪情勢難ナル者ハ檢事ヨリ糾問判事ニ付シ下調ヲ請フ下調濟ノ後檢事更ニ證憑文書ヲ受取り裁判所ニ訴ヘ裁判ヲ求ムヘシ

第七條

糾問判事ニ下調ニ於テ檢事不服ナルハ再ヒ他ノ糾問判事ニ下調ヲ求メ或ハ直ニ判事ニ付シ裁判ヲ求ム事ヲ得

第八條

現行犯罪ニ於テハ警察使又ハ警部ニ先ツ事犯スルヲ聞知シタル者直ニ犯罪所ニ至リ檢事ノ行スル一切ノ事ヲ行フヘシ

第九條

若シハ事件ニ在リ檢事ト警察使又ハ警部ト同時ニ檢視ノ爲メ犯罪所ニ至リタルハ警察使又ハ警部之ヲ檢事ニ讓ルヘシ

第十條

但檢事ハ警部ヲ引續キ檢視ヲナサシムルヲ得

第十一條

檢事及糾問判事ヨリ警察使又ハ警部ニ委任シ自己職權内ノ一部ヲ行ハシムル時ハ警察使又ハ警部ハ之ヲ奉行スヘシ

第十二條

警察使又ハ警部ハ受取ル所ノ告訴告發ノ文書若シハ現行犯ノ檢視明細書及ヒ其他ノ書類ヲ速ニ檢事ニ送り檢事處分ニ供フヘシ故ナク淹滞勾留スルヲ得ス

第十三條

現行ノ重犯アリテ巡查見知シタル片ハ急飛テ以テ司法警察官ニ報シ犯人ヲ追拿シ屍體シ若クハ兇器文書其他罪犯ノ証憑タルヘキ物ヲ携帯シ犯人ト思察スヘキ片ハ犯罪ヨリ時日ヲ過キタリト云フ亦現行犯ニ准ス

第十四條

現行ノ重犯アリテ巡查見知シタル片ハ急飛テ以テ司法警察官ニ報シ犯人ヲ追拿シ屍體

第一類 行政法 司法警察假規則

若クハ兇器物具一切ノ證據ヲ看護シ原態ヲ保存セシメ他人ノ擾動ヲ防キ見証人ノ離散ヲ制シテ以テ司法警察官ノ來着ヲ待テ司法警察官ハ其最先ニ報知ヲ得タル者即刻犯所ニ臨ミ檢視處分ヲ行フヘシ

但司法警察官ノ所在遠隔ナル者ハ巡查直チニ檢視處分ヲ行ヒ司法警察官ニ報スルコトヲ得其報ヲ得タル司法警察官疾病故障アル片ハ巡查ニ委任シテ所分ヲ終ヘシムルコトヲ得

第十四條

司法警察官ハ犯罪ノ情狀ト犯所ノ模様ヲ觀察シ行兇被兇見証人ヲ問供シ證據物件ヲ押ヘ而シテ檢視明細書ヲ作ル之ヲ警視處分トス

第十五條

司法警察官ハ其場ニ居合セタル諸人ヲシテ檢視終ル迄ノ間事犯ノ場所ヲ出去ルコトヲ禁シ若シ背ク者アレハ直チニ拘留シテ刑事ニ付スルコトヲ得

第十六條

司法警察官ハ巡查被兇人見証人近隣人及事犯ノ前後ノ事情ヲ知リタル者等一切關係ノ人ヲ喚ビ其供述ヲ聞き各人ノ口書ヲ作り之ニ花押若クハ實印セシム
但花押スルコト能ハス又實印ナキ者ハ摺印セシム

第十七條

現行犯ノ證據アルニ於テハ被告人ヲ拿捕スルコトヲ得而シテ直チニ之ヲ糾問シ口書ヲ作り被告人ヲシテ花押若クハ實印若クハ摺印セシム被告人逃走シタル片ハ司法警察官直ニ巡查ニ命ジテ追捕セシム

第十八條

司法警察官ハ差押ヘタル兇器贓物文書其他犯罪ノ證據タルヘキ物件ヲ被告人ニ示シ其答辭ヲ取り並セテ口書ニ記入スヘシ

第十九條

差押ヘタル物件ハ明細書ニ記入シ其物件ヲ封印シ若クハ器物ニ納レテ之ヲ封印ス可シ

第二十條

司法警察官ハ技術ノ人醫師分析師建築工彫刻工ノ類ヲシテ司法警察官ノ面前ニ於テ驗察セシメ證書ヲ作り花押若クハ實印セシムルコトヲ得二人以上俱ニ驗察シタル片ハ隔別ニ證書ヲ作ルヘシ

第二十一條

司法警察官檢視ノ處分己ニ終リ罪證ヲ得ル時ハ被告人ヲ拘留シ若シクハ保管シ其明細書及口書證人口書及證憑文書物件ヲ合セテ速カニ刑事ニ送り裁判ヲ求ムヘシ

第五章 司法警察官非現行處分

第二十二條

現行犯ヲ除ク外罪犯ヲ告訴若クハ告發スル者アリ及ヒ警部ヨリ告訴告發ノ文書ヲ送付スルアレハ檢事書類ヲ檢シ又ハ一應訊問シ其法律ニ觸ルモノト思察スル片ハ其文書ヲ具ヘテ糾問判事ニ送付スヘシ

但時宜ニ依リ第十七條第二十條第廿一條ノ規則ヲ通シテ用フルコトヲ得

第三款 司法警察規則附錄 明治七年九月

第百二十八號達

本年(一月)第十四號ヲ以テ相達候司法警察規則附錄別冊之通相定候條此旨相達候事

別冊

司法警察規則附錄

外國公使及公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國憲法以テ羈廢スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家族並ニ公使館屬員官ノ僕隸等總テ公使館ノ名籍ニアル者ヲ云フ及ヒ其家屋車馬迄モ同様子リト思量ス可シ

第二條 內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬

隸ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出キテ糾問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ匿テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待テ後引出ス可シ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條 內國人各公使館及書記官ニ備ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ届出外務省ハ其屆書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置キ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置クヘシ若シ途中ニテ或ハ人ヲ引留其名簿ニ在ル處ヲ聞知ス時公使館ニ備ムル中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ送ケタル後其處分ヲ施スヘシ若シ其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内ヘハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ル可カラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門内ヘ匿入セシ等毫髪ノ間モ猶豫スヘカラル時ハ其犯門者ニ告テ其館主ノ許可ヲ受ケテ後館内又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車馬家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合せ

第一類 行政法 司法警察規則附錄 憲兵條例

而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使館屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行フヲ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシ難キ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申ヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可カラズ或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼レヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スル時ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞館主ニ引渡シヲ要求シ其人ヲ受取リテ後之レヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ルキハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ム可シ

○第四款 憲兵條例 第十一號達

明治十四年三月

憲兵條例別冊ニ通相定候條此旨相達候事(十六年十一月第五十二號達ヲ以テ)

但現今先ツ東京府下ニ其一隊ヲ實施シ他府縣ニハ追テ施行スヘシ

憲兵條例

第一章 憲兵汎則

第一條 凡ソ憲兵陸軍兵科ノ一部ニ位シ巡按檢察ノ事ヲ掌リ軍人ノ非違ヲ視察シ行政警察及ヒ司法警察ノ事ヲ兼テ内務海軍司法ノ三省ニ兼隸シテ國內ノ安寧ヲ掌ル其戰時若クハ事變ノ際ニ於ケル服役ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

第二條 憲兵ハ各軍管ニ布キ各府縣ニ配置ス

第三條 憲兵ノ職掌其軍記ノ檢察ニ係ル事ハ陸海軍兩省ニ隸シ行政警察ニ係ル事ハ内務省ニ隸シ司法警察ニ係ル事ハ司法省ニ隸ス

第四條 憲兵ハ其職務ニ關シ警視總監府知事縣令(東京府知事ヲ除ク)并ニ各裁判所檢事ヨリ指示ヲ受クル時ハ直ニ其事ニ從フヘシ

第五條 憲兵軍管ノ司令官ニ對シテハ鎮臺條例第十九條及ヒ第二十條ヲ遵守スヘシ

第六條 巡察中若シ警察ノ職權ヲ有スル者又ハ巡查ヨリ助力ヲ要求スルコトアラハ直チニ應援シ或ハ代ツテ其事ヲ掌ル又時宜ニ依リ憲兵ヨリ巡查ニ補助ヲ求ムルコトヲ得

第七條 軍人遊歩中途上ニ酔酤暴行シ或ハ酒樓食肆等ニ暴動シ或ハ武權ヲ弄ンテ人ヲ侮凌スル等凡ソ隊外ニ在テ兇暴ノ所爲ニ涉ル者ハ直チニ逮捕シ若シ暴行者數人アリテ悉ク捕獲スルコト能ハサル時ハ其中ニテ造意者或ハ威權アル者ヲ逮捕スヘシ

第八條 若シ草賊一揆等ノ萌芽スルアラハ審カニ之ヲ視察シ其首唱ノ人名及ヒ其人員

等ヲ探偵シテ速ニ報告スヘシ

第九條 水火災ノ節ハ專ラ其防救ヲ爲シ非違ヲ警メ及貨物運搬ノ場所等ヲ監視スヘシ

第十條 變死人アル時ハ速ニ其處分ヲナシ又老幼婦女及ヒ急病人或ハ瘋癲人等ノ危害

ニ罹ル者アレハ其扶助ヲ加フヘシ

第十一條 憲兵ハ命令書ヲ有スルニ非サレハ漫リニ人ヲ逮捕シ若クハ人家ニ侵入シ若

クハ物件ヲ差押ルコトヲ得ス

但シ現行犯及ヒ現行犯ニ准スル場合ハ此限ニ在ラス

第十二條 憲兵ハ漫リニ兵器ヲ用ルコトヲ許サス

但シ其抗拒シテ制シ難ク殺傷シテ勢ヒ窮蹙シ難キ者アル時ハ之ヲ用ルモ妨ケナシ

第十三條 凡ソ何等ノ犯罪タルヲ論セヌ逃シテ外國公使ノ館地内ニ在ル者ハ之ヲ追捕

スルコトヲ得ス此場合ニ於テハ其外部ヲ警備シ速ニ屯所ニ報告シテ其指揮ヲ受クヘシ

第十四條 憲兵其職務上ノ過誤失錯懲戒シテ止ムヘキモノハ陸軍懲罰令ニ照シテ之ヲ

處分ス

但シ事ノ軍紀ニ關スル者ハ此限ニ在ラス

第二章 布置撰任

第十五條 憲兵ハ現今先ツ東京府下ニ其一隊ヲ設置シ二大隊ヲ以テ之ヲ編制シ憲兵本

部ヲ置キ陸軍卿ニ直隸ス(明治十八年第七號達ヲ以テ設置シテ下ニ一ヲ三ニ改ム)

第十六條 府内ヲ六區ニ分之ヲ憲兵ヲ六管區トナシ各管區ニ若干ノ屯所ヲ設ク其六

管區ノ配置左ノ如シ

第一管區 芝區 赤坂區 麻布區 荏原郡

第二管區 麹町區 日本橋區 京橋區

第三管區 芝區 赤坂區 麻布區 荏原郡

第四管區 四谷區 牛込區 南豐島郡 東多摩郡

第五管區 神田區 本郷區 下谷區 淺草區

第六管區 深川區 本所區 南葛飾郡 南足立郡

第七管區 小石川區 北豐島郡

第一類 行政法 憲兵條例

第十七條 憲兵ハ第十八條ヨリ第二十三條マテニ據テ其撰舉及ヒ進級ヲ爲ス者トス

但シ進級法ハ其最下限ヲ示ス者ナルヲ以テ其最下限ヲ越ル者ト雖モ必シモ直チニ進級セシムルノ例ニ在ラス

第十八條 兵卒ハ近衛及ヒ鎮臺ノ常備豫備後備軍ニ在テ左ノ三項ニ合格ス者ヲ撰舉ス

第一項 年齢二十二歳ヨリ三十歳迄ニシテ身幹五尺以上ノ者

第二項 讀ミ書キヲ爲シ得ル者

第三項 行狀方正ノ者

第十九條 伍長ハ憲兵卒ノ服役六箇月ヲ經タル者ヨリ撰任ス

但シ時宜ニ依リ他兵科ノ伍長ニシテ其服役六箇月ヲ經タル者ヨリ撰任スルコトヲ得

第二十條 軍曹ハ憲兵伍長ノ服役六箇月ヲ經タル者ヨリ撰任ス

但シ時宜ニ依リ他兵科ノ軍曹ニシテ其服役六箇月ヲ經タル者ヨリ撰任スルコトヲ得

第二十一條 曹長ハ憲兵軍曹ノ服役一箇年ヲ經タル者ヨリ撰任ス

但シ時宜ニ依リ他兵科ノ曹長ニシテ其服役一箇年ヲ經タル者ヨリ撰任スルコトヲ得

第二十二條 下副官ハ憲兵曹長若シテ他兵科ノ下副官ヨリ撰任ス

但シ時宜ニ依リ他兵科ノ下副官ヨリ撰任スルコトヲ得

第二十三條 士官以上ハ專ニ憲兵曹長以上ノ者ヨリシテ陸軍武官進級條例ニ基キ順次昇

級セラルルヲ以テ正例トス

但シ時宜ニ依リ他兵科ノ士官以上ヨリ之ヲ撰任スルコトアルヘシ

第三章 職務分掌

第二十四條 憲兵隊長ハ憲兵大佐(佐)内一名之ニ任シ憲兵本部長トナリ部下ノ憲兵ヲ

統率シ其命令ヲ司リ其勤務ヲ監視シ憲兵本部ノ事務ヲ總理ス

第二十五條 隊長ハ各官廳ノ命令或ハ依頼ヲ受テ其職務ニ服行シ及ヒ其職務ノ事ニ係

リテハ直チニ各官廳ト往復スルコトヲ得

第二十六條 隊長ハ非常ノ事件アルヲ探知セハ即時ニ之ヲ内務卿陸軍卿司法卿及ヒ警視

總監ニ急報スヘシ

第二十七條 隊長ハ非常ノ事件アルニ際シテハ時宜ニ依リ直チニ鎮臺兵ノ應援ヲ要求ス

ルコトヲ得

第二十八條 隊長ハ各大隊長ノ報告ヲ受テ月末毎ニ報告書ヲ作り行政警察ニ係ル者ハ内

務卿ニ司法警察ニ係ル者ハ司法卿及ヒ檢事ニ申告シ其行政及ヒ司法ニ係ル者ヲ併セ

陸軍卿ニ申報スヘシ

但シ海軍部内ニ關スル報告ハ別ニ海軍卿ニ申告スヘシ

第二十九條 隊長ハ時々各管區并ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ軍曹及ヒ兵卒

各一名ヲ具スルコトヲ得

第三十條 本部次長ハ憲兵少佐之ニ任シ長ヲ補佐シテ部事ヲ整理シ長事故アル時ハ其代理ヲ爲スコトヲ得

第三十一條 次長ハ時々各管區并ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長及ヒ兵卒各二名ヲ具スルコトヲ得

第三十二條 本部副官ハ憲兵大尉之ニ任シ次長ニ亞テ部事ヲ整理シ兼テ武器掛及ヒ書記ノ勤情ヲ監視ス

第三十三條 本部副官ハ本部長若クハ次長ノ命ヲ受テ各管區并ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長或ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第三十四條 本部副官ハ憲兵曹長之ニ任シ本部副官ノ命ヲ受テ本部中ノ庶務ヲ掌ル

第三十五條 大隊長ハ憲兵少佐之ニ任シ部下ノ指揮ヲ司リ巡察ノ部署ヲ定メ其隊ノ事務ヲ總理シ會計ノ事務ヲ監視ス

第三十六條 大隊長ハ時々所轄各管區並ニ各屯所ヲ巡回シ部下ノ勤情ヲ監視ス其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長及ヒ兵卒各一名ヲ具スルコトヲ得

第三十七條 大隊長ハ各中隊長ノ報告ヲ受テ一週毎ニ報告書ヲ作り之ヲ隊長ニ申報スヘシ
但非常若クハ至急ヲ要スル事件ハ急報又ハ日報ヲ以テ申報スヘシ

第三十八條 大隊副官ハ憲兵中尉之ニ任シ其隊中ノ庶務ヲ掌リ併テ武器掛及ヒ書記ノ勤情ヲ監視ス

第三十九條 大隊副官ハ大隊長ノ命ヲ受テ各管區並ニ各屯所ヲ巡回スヘシ其夜巡ヲ爲ス時ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第四十條 大隊副官ハ憲兵曹長之ニ任シ大隊副官ノ命ヲ受テ隊中ノ庶務ヲ掌ル

第四十一條 中隊長ハ憲兵大尉之ニ任シ中隊ノ指揮ヲ司リ又管區以下ノ會計給與ノ事ヲ管理ス

第四十二條 中隊長ハ時々管區内ヲ巡回シ部下ノ勤情ヲ監視ス其夜巡ヲ爲ス時ハ伍長或ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第四十三條 中隊長ハ管區内ニ非常ノ事件アル時ハ直チニ出張シ之ヲ大隊長ニ急報シ其指揮ヲ受クルヲ例トス

第四十四條 中隊長ハ各屯所ノ報告ヲ受テ一週毎ニ報告書ヲ作りテ之ヲ大隊長ニ申報スヘシ

第四十五條 小隊長ハ憲兵中(少)尉ノ内之ニ任シ中隊長ノ命ヲ受テ時々各屯所ヲ巡回シ部下ノ勤情ヲ監視ス其夜巡ヲ爲ス時ハ兵卒一名ヲ具スルコトヲ得

第四十六條 小隊長ハ各管區ノ事務ヲ分掌シ各屯所ノ報告ヲ掌ル

第四十七條 小隊長ハ變死人等アル時ハ醫員ヲ率テ其場ニ臨ミ死体ヲ檢視シ軍人ハ該軍衛ニ通報シ其他ハ親戚故舊ニ引渡スヘシ若シ親戚故舊其地ニアラサル時ハ區役所若クハ戸長役場ニ引渡スヘシ

但シ時宜ニ依リ半隊長ヲ以テ檢視セシムルヲ得

第四十八條 小隊長ハ非常ノ事件アル時ハ之ヲ中隊長ニ急報シ其指揮ヲ受ク

第四十九條 小隊副長ハ憲兵曹長之ニ任シ中隊長ノ命ヲ受ケ隊中ノ庶務ヲ掌リ併セテ書記ノ監督ヲ爲ス

第五十條 半隊長ハ憲兵軍曹之ニ任シ小隊長ノ命ヲ受ケ小隊長ノ在ラサル屯所ニ於テハ古參ノ者其長トナリ小隊長ノ職務ヲ辨理ス

第五十一條 半隊長ハ巡察ヲ派遣スルニ方リ其人員分隊ニ越ル時ハ之カ長トナリ分隊長以下ノ勤務ヲ監視ス

第五十二條 本部武器掛ハ憲兵曹長同書記ハ憲兵曹長軍曹ヲ以テ之ニ任シ大隊附武器掛ハ憲兵軍曹同書記ハ憲兵軍曹伍長ヲ以テ之ニ任シ各副官ノ命ヲ受ケ事務ヲ分掌ス

第五十三條 分隊長ハ憲兵伍長之ニ任シ巡察及ヒ護送等ノ事ニ當リ分隊ヲ以テスル時ハ其指揮ヲ爲シ兵卒ノ勤務ヲ監視ス

第五十四條 中隊附ノ書記モ亦憲兵伍長之ニ任シ小隊副長ノ命ヲ受ケ事務ヲ分掌ス

第五十五條 兵卒ハ守區ヲ畫シテ巡察スル者ナリト雖モ警察上追蹤スヘキ者アルニ方

リテハ自他ヲ區畫スルノ限リニ在ラス

又他ノ管區ト連續スルノ事件ハ相通牒シテ其處分ヲ爲ス渾テ巡察中ニ生スル事件ハ手帖ニ記載シ其報告ニ供ス

△明治十八年二月第八號達

明治十六年(十一月)第五十三號ヲ以テ大阪府下へ東京憲兵ノ内一中隊ヲ分派ノ儀相達置候處自今一大隊ヲ分派候條此旨相達候事

○第五款 行政警察事務規程 明治十四年十月内務 警視廳府縣 東京府 省乙第五十二號達 ヲ除ク

憲兵職掌中行政警察事務ノ儀別紙ノ通及達示候條爲心得此旨相達候事

(別紙) 憲兵本部

行政警察ニ關スル事務別紙規程ノ通相心得執行可致此旨相達候事

行政警察事務規程

第一條 行政警察ハ人民ノ凶害ヲ豫防シ安寧ヲ保全スルニアリ其事務ヲ大別シテ左ノ

四項トス

一 人民ノ妨害ヲ防護スルヲ 二 法章ノ遵奉ヲ視察スルヲ

三 健康ヲ看護スルヲ 四 國事ニ關スル犯罪ヲ未萌ニ搜索警防スルヲ

第一類 行政法 行政警察事務規程 憲兵職務

第二條 行政警察事務執行ノ際司法警察事務ニ牽連スル事アリト雖モ其事務ヲ混同ス可ラス

第三條 行政警察ノ事務ヲ執行スルニ際リ他ノ警察事務官吏其場ニ臨ミタル片ハ其處分ヲ專務官吏ニ譲ルヘシ

○第六款 憲兵職務 明治十五年五月二十三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡查ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

右奉 勅旨布告候事

○第七款 憲兵卒犯罪例 明治十五年十二月十三號(廳府縣)達

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

右奉 勅旨布告候事

○第八款 巡查帶劍心得方 明治十五年十二月第六十三號(廳府縣)達

自今巡查ニ帶劍セシムルユトヲ得ヘシ此旨相達候事

△明治十五年十二月内務省乙第七十一號(警視廳府縣)達

令般第六十三號ヲ以テ巡查ニ帶劍セシムル義公達相成候ニ付テハ左ノ二項可心得此旨

相達候事 (但調製費用ハ警察費ヲ以テ支辨スヘシ)

一 劍ハ日本刀ニシテ製作及ヒ革帶ハ圖ノ如シ

但シ從前各署ニ備置ク洋刀ノ分モ當分取雜セ帶用シ苦シカラス

一 帶劍者ハ明治八年第二十九號公達行政警察規則第四章第十五條ノ旨趣ニ基キ尙ホ一層慎重シ兇賊逮捕ノ際ト雖モ不得止場合ニ在サレハ拔劍スルヲ得ス(劍及革帶雛形

器ス)

△明治十七年一月内務省乙第三號(警視廳府縣)達

明治十五年當省乙第七十一號ヲ以テ巡查帶劍者不得止場合ニ非サレハ拔劍スルヲ得サル旨相達置候處尙ホ左ノ各條ノ通可相心得此旨更ニ相達候事

但第一條ノ場合ニ非ラヌシテ傷害スルニ於テハ假令過誤ニ出ルモ都テ法衙ノ處分ニ付スヘシ

巡查帶劍心得方

第一條 帶劍ハ左ノ場合ノ外拔劍スルヲ得ス

一 兇器ヲ持シ人ノ身体財産ニ對シ暴行ヲ爲シ拔劍スルニ非サレハ保護スルニ術ナキ片

一 異行人兇器ヲ持シ拔劍スルニ非サレハ防禦スルニ術ナキ片

第一類 行政法 巡查帶劍心得方 度量後改定規則

一 犯罪人逮捕ノ片又ハ外囚追捕ニ際シ兇器ヲ持シテ抗拒シ拔劍スルニ非サレハ防禦
スルニ術ナキ也

第二條 前各項不得止場合ニ際シ拔劍スト雖モ兇人畏服ノ摸樣アルニ於テハ穩ニ取押
ヘシ

第三條 不得止場合ニ際シ拔劍スト雖モ關係ナキ者ニ負傷セサル様深ク注意スヘシ

第四條 拔劍シタル片ハ兇人ヲ傷スルト否トニ拘ハラヌ其景況ヲ速ニ所屬長ニ具申ス
ヘシ

○第廿九章 度量衡

○第一款 度量衡改定規則 明治九年二月
第十七號布告

第一條 三器改定ニ付各地方ニ三器製作所並ニ賣捌所ヲ設ケ製作所ニ於テ製作セル新
器來ル三月十五日ヨリ賣捌所ニ於テ發賣爲致從前ノ秤座秤座ハ同日ヨリ廢止候事

第二條 各地方ニ舊器改所ヲ設ケ候條從前所持ノ三器來ル三月十五日ヨリ十二月廿五
日マテニ右改所へ差出檢査ヲ請クヘシ右期日ヲ過キ檢印ナキ器ヲ商業上ニ用フル
ヲ禁ス時宜ニヨリ掛リ官吏商家ニ入り用器ヲ視察スヘキ事
但改所ニ於テ檢査ノ上新器ニ適合セル分ハ檢印シ廢スヘキ分ハ廢ノ字ヲ印シ總テ

所持人ニ下ケ戻スヘシ

第三條 製作所賣捌所官許ノ外三器製作賣捌一切不相成事

但尺ハ尺杖等一時便用ノ爲メ目盛致シ秤ハ半鳥半等ヲ量ル爲メ箱ヲ製シ又ハ賣買
スルハ苦シカラヌ

第四條 尺度秤量ノ目ヲ盛直シ秤ノ緣鐵弦鐵ヲ打替ヘ斗概ヲ修覆スル等ハ必ス製作所
へ差出スヘシ秤量ノ緒紐ヲ附替フルハ製作所又ハ賣捌所ニ差出スヘシ其他ノ人自儘
ニ致候儀不相成候事

第五條 舊新器共檢印アルヲ賣拂度者ハ必ス賣捌所ニ可申出事

但シ秤ノ錘皿又ハ秤ノ緣鐵弦鐵等ヲ取離シ古ト鉄シテ賣買スルハ苦シカラヌ

第六條 第二條以下ノ禁令ヲ犯ス者ハ其品取上律ニ照ラシテ處斷スヘキ事

○第二款 權衡製作檢査印章 明治十四年五月
第三十二號布告
西洋形權衡製作檢査印章左ノ通改定候條自今左ノ印章ヲ證トシ從前ノ權衡ト同様相用
フヘシ此旨布告候事



檢

○第三十章 坵法

第一類 行政法 權衡製作檢査印章 日本坵法

○第一款 日本坑法 明治六年七月第二
百五十九號布告

第一章 坑物

第一 正理ヲ以テ論スルハ凡ソ無機物タル者ハ生活ノ機ナ
都テ坑業ノ部分ニ屬スル
此無機物品質ニ類ニ分ル即チ第一類ハ有鑛質第二類ハ無鑛質タリ凡ソ諸金屬ノ天然
本質ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質ト化合シテ出ル者ハ右第一類ニ屬ス燃質物山鹽礬酸
石灰美石及ヒ玉璞ノ類ハ右第二類ニ屬ス本條舉ル所ノ有鑛質無鑛質トモ總テ是ヲ坑
第二 前ニ掲記セシ物類凡ソ日本國中ニ於テ發見スル者ハ都テ日本政府ノ所有ニシテ
獨リ政府ノミ之ヲ採用スルノ分義アリ

第三 築石土砂粘土其他建築耕作ノ所用ノ諸物品ハ都テ地主タル者ノ所有ト爲スヘシ

第四 日本ノ民籍タル者ニ非レハ試堀ヲ作シ坑區ヲ借リ坑物ヲ採製スル事業ノ本主或
ハ組合人トナルコトヲ得ス坑產ノ割合及ヒ損益ニ關係ス若シ之ヲ犯ス者ハ其業ニ屬ス
ル所有物ヲ官ニ沒入シテ其業ヲ禁止スヘシ

第二章 試堀

第五 試堀ヲ作サント欲スル者ハ鑛山寮ニ願出許可ヲ得テ之ヲ行フヘシ
試堀ヲ行フ爲メニ必要ノ地面他人ニ屬セハ其價金ヲ對談處分ス可シ
地主ニシテ自ラ試堀ヲ企ツル者ハ衆ニ超テ許可ヲ得ヘキ分義アリトス然レモ自ラ試

堀ノ資本ナクシテ他人ノ舉ヲ拒ミ或ハ不當ノ價金ヲ貪ラハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正
價ヲ裁決シテ其地ヲ買上クヘシ

第六 試堀ニテ坑物發見スルハ直チニ見本ヲ添ヘテ鑛山寮ニ届出ツヘシ且試堀中ハ
一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ノ行業日數及ヒ工數并ニ產鑛量ヲ開報スヘシ
凡ソ產鑛ハ借區券ヲニ出ル得ル後ニアラサレハ恣ニ賣却スルヲ得ス若シ之ニ背カハ
其全價ヲ沒收スヘシ

第七 試堀ハ都テ一年間ヲ以テ期限トス若シ延期ヲ願出ルニ實ニ未タ開坑ヲ決スルコ
トヲ得サル事理判然タラハ之レヲ許可スルコトアルヘシ

第八 試堀人廢業スルハ第二十款廢坑則ノ如クスヘシ
此時ニ產鑛ハ鑛山寮ノ許可ヲ得テ賣却シ第三十一款ノ坑物稅ヲ納ムヘシ
試堀人損失ニ因テ廢業スル事實判然タルニ於テハ坑物稅ヲ免ヌルコトアルヘシ

第三章 借區開坑

第九 開坑スル者ハ先ツ坑區ヲ得ヘシ坑區ノ廣狹ハ其適宜ナル起業ノ目途ニ應シテ之
ヲ得セムヘシ
但石炭坑ノ借區ハ一萬坪以上ニ限ルヘシ(明治十五年八月第
三十八號布告追加)
有鑛質坑ヲ開ク者ハ必ス製鑛ノ業ヲ兼ヌヘシ

凡ソ借區開坑ハ鑛山寮ニ願出ツヘシ此願書ニ其得ソト欲スル坑區ノ測量圖ヲ添ヘテ
出ス可シ試掘ヲ經テ借區願出ル者ハ其坑區中別ニ地主アリト雖モ之ヲ拒ムテ得ス尤
モ其處分ハ借區券ヲ得ルノ後二十二款ノ如クナルヘシ

第十 願出ノ借區ハ鑛山寮官員之ヲ驗測シ標石ヲ植テ境界ヲ識別スヘシ巡回官員歸報
ノ後許可スヘキハ工部全權ノ證印ヲ以テ借區券ヲ附與スヘシ

第十一 凡ソ借區ハ通常十五年間ヲ以テ定期トス之ヲ終ルニ至テ繼年期ハ新ニ願出ス
ヘシ

第四章 通洞

第十二 通洞ハ坑道ハ縱横ニ小坑ヲ穿ツヲ通常トス別ニ探鑛疏水運輸等ノ我カ借區中
ニアラスト雖モ之ヲ企ツルヲ得ヘシ此時ハ願書ニ目論見明細圖ヲ添ヘテ鑛山寮ヘ
出スヘシ若シ其通洞他人ノ借區ニ亘涉スヘキハ豫メ其借區人ニモ報知スヘシ

通洞ハ高九尺幅六尺ヨリ減スヘカラス是ヨリ小ナルハ通洞トセズ

第十三 願出ノ通洞ハ鑛山寮官員實地踏踏歸報ノ後ヲ許可スヘキハ工部全權ノ證印ヲ
以テ免狀ヲ附與スヘシ免狀ヲ得ルノ後若シ目論見圖ニ違ヒ方向ヲ轉シ或ハ距離ヲ
延縮セント欲セハ更ニ鑛山寮ヘ願出許可ヲ得テ之ヲ行フヘシ

第十四 借區人何レモ自ラ通洞ヲ開クヘキ資本有ルニアラサレハ我區中タリト雖モ他

人ノ率ヲ拒ムヘカラス

通洞保全ノ爲メニ其周圍ノ土石ヲ外ヨリ厚サ一間半以内ニ掘入ルヘカラス然レモ其
跡ニ自己ノ入費ヲ以テ支柱ヲ構造シ崩潰ノ患ナカラシムル者ハ此限ニ在ラス 是ハ坑
ノカ爲メ一旦土石ヲ掘
出スルノ如キ是レ也

第十五 通洞ニ因テ諸借區人便利ヲ得ルヲアラハ通洞發起人ニ其謝金ヲ出スヘシ若シ
之ニ就テ對談穩當ナラスハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ

通洞ヲ開ク者ハ借區人未定ノ所ニ於テハ通洞ノ周圍内ヨリ出ルタメノ鑛石ヲ取ル
ヲ得ヘシ他人ノ借區中ニ於テハ此鑛石ノ一半ヲ借區人ニ販スヘシ

第五章 坑業

第十六 都テ坑業ニ付テハ坑助ヲ坑中支柱ノ爲ニ存スヘキ所ノ外ハ成ル丈ク坑利ヲ遺
スヲナク取出スヘシ此法ヲ犯シ其他都テ坑ノ利用ヲ害スルモノハ其輕重ニ隨テ罰金
ヲ徴ス可シ

第十七 試掘開坑或ハ通洞等ヲ企ルニハ舍屋鐵道河流及ヒ道路ノ如キ其害ヲ受クヘキ
場所ハ度ヲ計テ之ヲ避ケ殊ニ城堡ハ七十間以内ノ地ヲ避クヘシ
凡ソ場所ノ主タル者應諾スルコアラズレテ此ヲ犯ス者有レハ城堡ハ其律ニ任シ餘ハ
其損害ヲ償復スルニ倍ノ費額ヲ取テ本費ハ其主ニ附與スヘシ

第十八 凡初發許可ヲ得シ坑物ノ外ニ別種ノ坑物ヲ見出ス者ハ速ニ鑛山寮ニ報知スヘシ之ヲ背ク者ハ其坑物又ハ代價ヲ取揚クヘシ如此ノ類ノ借區稅ハ第三十一條ニ照準シ高價ナル方ノ例ヲ以テ納ム可シ

第十九 開坑人ハ歲々一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ニ産出セシ坑物量其賣出高並代價及ヒ行業日數工數ヲ具記シテ鑛山寮ニ報知スヘシ

有鑛質ハ坑產量并製出量且製出セシ混淆物二種以上ノ金屬ヲ含有スルハ其試驗ノ割合ヲモ具記シテ賣出高以下都テ前ノ如クスヘシ

右量數不正或ハ開報違期ノ罰ハ金五拾圓トス若シ賣出シ高並代價ヲ減書スルモノハ其減書セシ高ノ三倍ヲ徵收スヘシ

第二十 通例開坑又ハ廢礦ヲ採製スルニモ一年間ノ事業ハ地面五百坪ノ下ニ就テ壯健ナル工夫三百日ヲ以テ成セル程ノ工數ヨリ減スヘカラス若シ之ニ背ク者實ニ百方免シ難ク妨碍判然タルニアラスンハ其業ヲ禁止スヘシ

第二十一 坑業人ハ互ニ隣坑ノ風通シヲ便利ニスヘシ且甲區ヨリ乙區ノ地中ニ水道ヲ通シ地上ニ要路ヲ通セシトテ求ムルニ於テハ不當ノ價金ヲ貪ルヘカラス若シ相對シ以テ決セスノハ鑛山寮ヨリ處斷スヘシ

第二十二 凡借區人ハ區上ニ於テ藏庫諸所作事場洗鑛所鑛所通路等其他坑業ニ必

要ナル地面ハ地主タル者ニ豫メ價金ヲ辨スヘシ若シ異論決セスノハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シ其地ヲ買取ル可シ

第二十三 總テ坑區ヨリ隣區ニ患害損傷ヲ被ラシムル者ハ之ヲ價フヘシ若シ價金決セズンハ鑛山寮ヨリ裁決スヘシ

第二十四 凡ソ借區人其坑業ヲ年限中他人ニ讓渡ス如キハ前以テ双方ヨリ鑛山寮ニ願出許可ヲ請フヘシ若シ之ニ背ク者ハ其業ヲ禁止スヘシ

第二十五 凡ソ借區年限終リ又ハ法ニ背ヒテ其業ヲ禁止セラレ或ハ自ラ廢業スルニ至ル者アレハ都テ其借區ハ政府ニ還復シ其事業ニ就テ如何ナル負債アリト雖モ總テ其坑山ニハ關係セサル者トス此時ニ當テ地中ノ結構ハ坑山ニ屬シテ政府ノ有タルヘシ地上ノ營造ハ其主ノ取去ルニ任スト雖モ其跡ノ地面ハ完全ニ修復ヲ爲スヘシ

第二十六 坑業人ハ其坑山地方ノ住民同僚トス因テ其地方官ノ諸法令ヲ遵守スヘシ

第六章 廢業

第二十七 坑業ヲ廢セント欲スル者ハ堅坑ノ口ヲ掩ヒ又柵圍ヒスヘシ鑛山寮ヨリ其堅坑ヲ當然ニ堅固ニセシヤ且坑内ノ營繕完全存在スルヤヲ檢査スヘシ若シ疎漏アラハ鑛山寮ニ於テ之ヲ繕治スヘキ費額ノ一倍ヲ徵收スヘシ

第二十八 鑛山寮ヨリ疏水ヲ命スルニ背キテ其事ヲ行ハス之カ爲ニ坑中廢没スルニ至

ルモノハ其業ヲ禁止ス

第七章 製鐵所建築

第二十九 凡ソ開坑人坑山外ノ場所ニテ有鐵質物ヲ製出セン爲メニ建築スヘキモノア
ラハ先ツ鑛山寮ニ許可ヲ請フヘシ

第三十 己ニ製煉セン鐵物ヲ精製 荒銅ヲ丁銅棹銅ニ作り山吹スル職業ノ者ハ起業ヲ鑛
山寮ニ報知シ六ヶ月毎ニ元鑛量並製出品量等ヲ具記シ鑛山寮ニ開報スヘシ

第八章 稅納

第三十一 (明治十四年九月第四十九號布告第一項及ヒ第四項中改正第一項ニ但書追加)
鐵ヲ除クノ外有鐵質物ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ヶ年金壹圓ツ、借區稅ト
シテ毎年一月ニ其年一ヶ年分ヲ前納スヘシ 借區稅ハ地租 鐵及ヒ無鐵質ノ諸物品ヲ採
取スル坑區ハ面積五百坪ニ付前條ノ半高ヲ納ムヘシ即金五拾錢トス

但息納者ハ借區券ヲ取揚クヘシ
廢鐵ヲ採取スル坑區ハ面積千坪ニ付常例ノ稅額ヲ納ムヘシ
開坑區面積五百坪廢鐵區面積千坪トニ足ラサルモノハ總テ右面積ノ比例ニ隨テ納ムヘシ
借區初年ノ區稅ハ月割ヲ以テ借區券下付ノ節前納スヘシ
前書借區稅ノ外ニ採製セン金屬及ヒ諸坑物ニ就テ代價百分ノ三ヨリ百分ノ二十マテ

テ坑物稅トシテ每歲一月七月兩度ニ鑛山寮ニ納ムヘシ

但稅額ノ儀ハ其坑業ノ盛衰ニ隨ヒ鑛山寮ヨリ命スヘシ

第三十二 試掘開坑或ハ通洞等ニ付前後諸條款ニ記セル稅或ハ罰金價金等ヲ納メサル
片其業ニ屬スル所ノ運移スヘキモノ殘ラズ鑛山寮ヨリ入札拂ニシテ代價ノ中ヨリ不
納高ヲ引去リ其殘金ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ

第三十三 凡ソ坑法ノ意旨ニ戾ル過失アル者ハ輕重ニ隨テ罰金ヲ命スヘシ若シ事業疎
畧ニシテ人命ヲ失ハ、國律ヲ以テ論處スヘシ

右章款ニ記載スル方法ハ明治六年九月一日ヨリ施行スヘシ從前ノ法則及ヒ舊習等若シ
此法ニ矛盾スル者ハ都テ廢停タルヘシ

坑法附示

坑業及ヒ製鐵ノ業ヲ舉行スル者西洋ノ學術及ヒ工作ヲ用ヒンカ爲メ一定ノ給料ヲ以テ
外國技術家ヲ雇入ル、カ如キハ我坑產損益及ヒ所有物ニ關係スルイナキニ因テ坑法第
四款ノ禁ニ觸レンス然レモ之ヲ雇入ル、以前職業給料及ヒ年限ヲ分明ニ記載シ其案紙ヲ
鑛山寮ヘ送呈シテ結約ノ許可ヲ可請候事